欠けているモノを求めて

怠惰の化身

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小町の総武高受験も終え、合格発表を待つ比企谷八幡。

でも、彼には他にもやるべき事がある。

雪ノ下のこと、由比ヶ浜のこと、自分のこと。

雪ノ下の依頼は奉仕部として最後の依頼となるだろう…

そんな感傷にも似た感覚に浸る八幡。

そんな空気を「こんにちはー」と気楽に破壊する少女が訪れる。

空気を旨そうに吸い、亜麻色の髪揺らしながら依頼を持って席に着くのだった――

目次

その依頼は実にどうでもいい ―― 1
比企谷家への道は長く険しい ―― 6
きっと、比企谷家はソファーと炬燵と素敵な何かでできている。前編 ―― 11
きっと、比企谷家はソファーと炬燵と素敵な何かでできている。後編 ―― 17
3月3日のサバト　前編 ―― 23
3月3日のサバト　後編 ―― 30
コマチボウル ―― 38
比企谷八幡と由比ヶ浜結衣のラブラブ＆ドキドキな一時間　ラブラブ編 ―― 47
比企谷八幡と由比ヶ浜結衣のラブラブ＆ドキドキな一時間　ドキドキ編 ―― 55
戸部回 ―― 64
そして歯車は噛み合い、されど動かず。 ―― 70
生徒会にようこそ！ ―― 79
ほうしぶちほー ―― 87
感情支配のアウトブレイク ―― 95
閑話休題 ―― 106
地方の発売日が1日遅れるのはまちがっている。 ―― 111
この素晴らしい教師に祝福を、ほんとお願い！ ―― 124
過ぎ去りし時を求めて ―― 132
一色イロハの憂鬱 ―― 145
一色イロハの動揺 ―― 153

その依頼は実にどうでもいい

奉仕部の部室で生徒会長、一色いろはは、〝むむむむ…〟といった擬音語が付きそうなあざとい顔をして、その視線の先は一枚のプリントを、凛とした姿勢で目を通している奉仕部部長、雪ノ下雪乃に向けらている。

暫くすると雪ノ下はプリントを見終わったのか長机に置き、一色に視線を合わせる。

「どうですかね…」

「そうね、誤字脱字も特に見当たらないし問題はないわね」

その返答に一色は〝ふぅ〟といった擬音語が付きそうな顔で安堵する。

「でもさ、なんか上手く説明出来ないけど、素っ気ないとゆーか味気ない、みたいな感じするよね」

雪ノ下の隣で同じプリントを見ていた由比ヶ浜結衣が的を射てるのか射ていないかよくわからない発言をすると、それを聞いた雪ノ下は顎に手を当てて少し考えた後、一色に視線戻す。

「そうね、ありきたり…定型文をそのまま使った、といった感じがするわね」

「えっと、あの…先人の知恵に学ぶって言うかー、歴史から見習うって言うかー、何と言うかー…」

視線を向けられた一色はビクッと体を揺らし、もにゅもにゅもじもじと居心地の悪そうにして、さ迷わせた視線の先にもう1人の部員を捉えると、すがるように視線を向け〝先輩助けて！〟と念じるように瞳を潤ませる。

視線を向けられた部員はもぞもぞとゾンビが墓から這い出るように身動ぎし、けぷこむと咳払いをし3人の視線を集めた。

「別にいいんじゃねーの？どこのベストアンサーさんの送辞か知らんけど、下手に考えるより理にかなってるだろ」

いつの間に読み終わったのか比企谷八幡は、同じ送辞のプリントを置き、念に応えて湯呑みを啜る。

２人は何か思うところがあるのか、その発言にハァと溜め息を漏らす。
一色はその助け船にひょいっと乗っかり我が意を得たりとばかりに「そうなんですよー」と言葉を紡ぐ。
「わたし、３年生とあまり接点ないですし振り返る思い出とかも特に無いんですよねー」
「あまり、と言うなら多少はあるのかしら？」
「そだよね、それを折り込めばオリジナル感が出ていいと思う！」
初航海に出た一色船あざと丸に、駆逐艦雪ノ下と戦艦由比ヶ浜の追撃が迫る。駆逐艦の小型大砲と戦艦の大型大砲に照準を合わされ、八幡は『あざと丸初航海で轟沈』かと固唾を呑んで見守るが
「アピールとか、デートのお誘いとかー、告白とかなんですよねー」
その一色と3年生の悲しい接点に八幡は密かに親近感を覚える。
２人はそれにも何か思うところがあるのか、その発言にハァと溜め息を漏らす。
追撃から難なく逃れた一色船長は、心なしかドヤ顔で反撃とばかりに華奢な船体に似合わぬ大砲からトドメの一撃を放つ。
「それに3年生って地味じゃないですかー、だからわたしがあまり目立つのもどうかな？ってのもあります」
あまりの発言にも言い返す言葉が見付からない。
３年生にも城廻めぐりといった人気者もいるが派手ではない。上に雪ノ下陽乃、下に雪ノ下雪乃・葉山隼人・一色いろはといった総武高の顔に挟まれた不遇な世代、ハンバーガーに例えるとピクルスだ。ハンバーガーの話題になってもピクルスについて感想を述べる者はいない。
これ以上、送辞について論議しても哀しみしかないと思い至るのも必然の流れだろう。
「ま、送辞なんか変に冒険する必要なんてねぇよ、卒業式に涙する奴等は雰囲気に酔ってるだけで送辞の内容なんて聞いた側から忘れてる」
あんなもんに時間費やすのは無駄だ無駄、と今までのやり取りを無にするような八幡の物言いに雪ノ下はやれやれと頭を振り、一色はそ

うですよねーと相づちを打つ。
「でもあなたの場合、3年間の思い出に涙しそうだけれど」
「それはボッチの高校生活ついて言ってんのか雪ノ下？残念だったな、俺は望んでボッチでいるんだ、後悔なんてあるわけ無いまである」
「その発想が既に悲しいわね…私達の卒業式に比企谷くんが答辞をすれば全校生徒が涙しそうね」
「わたしは腹を抱えて笑ってしまいそうですけどねー」
「あら？そうね、私も笑ってしまいそうだわ、やっぱり止めてくれるかしら？お笑い谷くん」
「お前らぁ…」と悔しそうに歯噛みしている八幡と、勝利とばかりに勝ち誇る雪ノ下を横に、さっきから顔を伏せたままの由比ヶ浜は「でもさ…」と前置きして
「あたしはやっぱり泣いちゃうと思う…」
水族館で由比ヶ浜が願った思い〝奉仕部で今まで通り3人で居る〟本物に届かないなら例えそれが偽物でも繋ぎ止めたい、卑怯な想い、そして叶わなかった思い。花火大会の時に想いを伝えていれば、文化祭の後に側で寄り添ってあげてたら、修学旅行の時に支えてあげてたら、常に流されて選択することをしなかった後悔…
「由比ヶ浜さん…」
「…」
抑えていてもちょっとした切っ掛けで出てきた感情を抑えきれず

「…よく分かりませんが、わたしは先輩方が卒業しても少なくとも先輩だけは無理矢理つれ回すつもりですけどねー」
「……いろはちゃん？」
その独善的な物言いに由比ヶ浜はハッとする。恋人が欲しいから好きになったわけじゃない、好きだから恋人になりたかったんだ、と。
例え恋人がいようと比企谷八幡は何も変わらない。恋人がデートに誘っても喜んで出かけるような人じゃないし、恋人より小町ちゃんを優先するだろう、と。
そう考えると、恋人より小町ちゃんになるほうがポイント高いので

は?とか意味不明な思考になり、伏せた顔に笑みが浮かぶ。
「どうやら先輩は妹さんに弱いみたいですし、上手くすればもっと利用…使える駒になりそうです」
妹さんも総武高を受けたんですよねー、合格したら生徒会勧誘しよっかなー、と八幡奴隷化計画を企む一色に、引きつった顔をする八幡とポカンとした表情の雪ノ下をよそに由比ヶ浜は「へへへ…」と漏らす。
「そっか、ヒッキーは奉仕部が無くなっても生きてるもんね」
そう言った由比ヶ浜の瞳には迷いは無かった。
ポカンとしていた雪ノ下はそんな由比ヶ浜を見て悲しそうな顔をし「違うわ由比ヶ浜さん…」と諭す。
「この男は既に死んでいるのよ…」
「ちょっとー?人をゾンビみたいに言うのやめてね?」
「そうだよゆきのん!ヒッキーはまだ死んでないよ!」
「これから死ぬみたいな言い方もやめてね?」
「先輩の生死なんかより、わたし的には妹さんの人柄とか知りたいんですよー」
「小町ちゃん可愛いんだよ!ヒッキーみたいにキモくないし、それに――」
そこから何故か一色主催の由比ヶ浜講演〝小町プレゼン〟が始まり雪ノ下の補足も加わり盛り上がりをみせた。
そんな中、八幡は考える。
由比ヶ浜はやはり俺に好意を持ってくれてるのだろう、と。
水族館での出来事は言葉にはしなかったが明確な答えがあった。あれを自意識過剰で済ませることはできない。
そして、理由に相違があれど、八幡はその言葉を受け入れることはできなかったのだから。
比企谷八幡は恋を知らない。その感情を知らないのだから受け入れることができないのだ。
そして、一色いろはについても考える。
葉山隼人について焦ってるように振る舞うが、実行に移した気配も

無い。チグハグな行動は非生産的で、クレバーな一色のイメージと明確にズレている。そう思うのはきっと比企谷八幡が恋を知らないからなのだろう、と。
「…なあ、ちょっといいか？」
雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣についてこれからもっと知っていこうと、踏み込もうと思った。
「小町の受験の労いと合格祝いを兼ねて、家でちょっとしたパーティーみたいなのをしてやりたいと思ってるんだが…」
「小町ちゃんの？いいねー！やろうやろう！」
「合格前提なのがあなたらしいわね…まあ、そうね、私も空けとくわ」
「ありがとな……あと一色、お前も良ければどうだ？」
一色いろはについても、もっと知るべきだと八幡は思った。そこに本物があるような気がして。
「はい」
話を向けられた一色は一瞬ぽけーとした後、あざとさの無い笑顔でそう答えた。

その後、パーティーの準備について話し合い解散となり、一色は平塚先生に送辞の提出して稲毛海岸駅に向かう。
比企谷家は幕張本郷駅の近くだから総武高まではかなり近い、一色家は千葉みなとから乗り換えでモノレール1号線で終点の県庁前、ディスティニーランドの帰りに送ってもらった時のことを思い出し申し訳ない気持ちになる。
自分に関係ないフラれた女をわざわざ送ってくれる人はそうそういないだろう。
「小町ちゃん会うの楽しみだなー、仲良くできたらいいなー」
ふいに独り言を漏らし、初恋の人に家へ招かれた喜びと、叶わぬ想いの苦しさに胸を締め付けられるのだった。

比企谷家への道は長く険しい

幕張本郷駅から住宅街を抜けると、のどかな田園風景が広がる。
その境界線にある民家の1つに比企谷家も存在する。
総武高校に小町が合格したので名実共に合格パーティーと相成った。
比企谷家には一度行ったことがある由比ヶ浜が雪ノ下と一色を引き連れて行くことになった。
最初は八幡が迎えに行こうと提案したのだが、雪ノ下が『由比ヶ浜さんが知っているのだから迎えにくるのは非効率よ』と断じたため八幡は晴れて引きこもることができたのだ。
しかし、小町に由比ヶ浜から〝これから家に向かう〟と連絡が入ったらしく、せめて外で迎えなさいと言われ追い出された。
もうすぐ春だが、まだそれなりに寒い。そんな中、ぬぼーっと立ってたら聞いたことのある声が聞こえた。
「あれ？比企谷じゃん、何してんの？空き巣？」
振り向くと、おいっすーと手を上げた折本かおりと見知らぬ女と男2人がいた。
「いや、ここ俺んちだから…」
そう返すと後ろで「知り合い？」「中学の時同じクラスに居た奴じゃね？」と言った会話がされており、同級生のご様子だ。
「じゃあ、家から追い出されたれたとか？」
「…まあ、そんなところだ」
「何それウケる」と言った折本の後ろでも情報の擦り合わせが終わったらしく同級生らしいお三方が薄ら笑いを浮かべているのが見てとれた。方やトップカーストの折本と一緒にいる自分、方や折本にこっぴどくフラれたボッチ、そんなとこだろう。
「んじゃ、ま、そゆことで…」
これ以上、話てもろくなこともなさそうなのでさっさと切り上げようとし、折本も不穏な空気を察して立ち去ろうとした。
「あ、じゃあね、比企――」

「比企谷、暇なら一緒来るか？折本のこと好きなんだろ？遊べるチャンスじゃん」
薄ら笑い浮かべ誘うその姿は、彼等の中学生活において比企谷八幡に向ける姿であり本質ではないのだろう。
集団心理からくる一種の防衛本能であり、彼等の性格を判断する基準にはならない。臨海学校の鶴見瑠美を取り巻く人間関係と同様に、彼等と八幡の関係を破壊した時、初めてその本質を見せるのだろう。
「人待ってるんで暇ではないんだが…」
「ほら、行こうよ！比企谷も高校生活で色々あるんだよ」
「久々に会った同級生なんだしさー、待ってる人が来るまで話そうよ」
人を待ってる。その言葉に折本は警戒レベルを上げるが、同級生共は不動明王の如く動かない。顔は冒険者ギルドの絡んで来る系の冒険者だが。
別に八幡は彼等の本質に興味の欠片もないが、これも彼等の選択の結果なのだ。やられたらやり返したい気持ちも相応にある。ただ、気まずさそうにする折本だけはフォローしてやろうと誓った。

「やっはろーヒッキー！」
「こんにちは」
「こんにちはー」
後ろから掛けられる三者三様の声に八幡は振り返り「おう」と返事を返す。三者とも美少女だ、単身ですれ違う男を振り向くかせるレベルが一緒にいるのは、外見を取り繕うタイプには最早凶器ですらある。
先程まで薄ら笑いを浮かべてたのが嘘のように固まっている様は滑稽だ。折本も「あ、1人じゃないんだ…」と顔を引きつらせている。
「流石に迎えに行かず家の中で待ってるのもなんかあれだしな、外で待ってたら中学の同級生に声掛けられて、待ってる人が来るまで話そうと言われて今に至るわけだ」
「折本は遠慮してたんだけどな」とフォローをする。

こう言えば雪ノ下は理解するだろうと八幡は確信している。雪ノ下もこういった輩は嫌悪の対象なはずだから乗ってくれると。
「そう、食材も私達のしか用意してないから安心したわ。…それに見知った人だけじゃないと嫌だもの」
そう言って食材の入った袋を見せるしぐさに内心ニヤリとした八幡は、お兄ちゃんスキルを全開にして袋を取り雪ノ下を見る。
膝上までのファー付きの白いコートに黒のスキニー、雪ノ下の端正なたたずまいも相まって一枚の芸術のようだ。
「正月の時も思ったが、やはりお前の綺麗な黒髪に白のコートはよく似合うな」
「っ！あ、ありがとう…」
そう言って髪をいじりながらもじもじする姿に八幡は演技とわかっていてもドキリと胸を弾ませる。
「ヒヒヒッキー!!あ、あたしはどうかな！」
絶対に察してない由比ヶ浜はこの作戦で一番の難関だ。軽い感じで褒めると「ヒッキーキモい！」で返される。
しかし、褒められるのには慣れてない。軽く褒めるのは葉山と戸部で耐性が付いてるだろうが。だから八幡は重く行く。
そんな由比ヶ浜は赤のジャケットに白のセーター、黒のショートパンツからスラリと伸びた足を覗かせる。
「似合ってるな…」
あー、と含みをもたせていると、由比ヶ浜が「な、何？何か変かな？」と聞いてくる。
「いや、素敵な女の子だな、と思って」
「……ふわ」
由比ヶ浜は動かなくなった。直立不動である。
そうすると次に動くのは当然、一色いろはだ。
「先輩！先輩！わたしには何かないですかー？」と、その場で一回まわって、手を後ろに組み少し前屈みになって上目遣いで聞いてくる。女版〝かかってこいや〟のポーズだ。
一色はピンクのロングジャケットにリボン付きの白いワンピース、

黒のタイツだ。
一色は察しては無いだろうが、流れを読む能力は一流だ。前ふりまでする姿勢は芸人のソレである。そう八幡は読み取り、その挑戦に全力で応える。
「ああ、今日も可愛いよ。いろは」
「あぅ…。先輩も、その、イイかな？って思い…ます…よ」
ここでまさかの清純派。雪ノ下陽乃には絶対に不可能なスキルを一色が使えることに驚愕し、八幡は一色の評価を劣化版陽乃から亜種陽乃に改めることにした。
八幡はそんなやりとりをしながら横目で同級生を見やる。
同級生・女はポカーンとし、同級生・男２人は悔しげに睨んでいる。
もう同級生のプライドはズタズタだ…。同級生で越えるはずのない自分を超えるものが現れてしまった…。しかもそいつはたかがボッチ野郎だった…。ショックを受けたまま生き続けるがいい、ひっそりとな…
「じゃあな折本、また葉山絡みで何かあったらな」
海浜高校でも名の知れた、髪質もそれっぽいスーパートップカースト葉山隼人の名を出すことで折本の立ち位置を崩さない。Ｗデート、クリスマスイベント、料理教室、どれも葉山がいた、嘘は言ってない。フォローも忘れない男、八幡。折本は微妙な顔をしていたが。
八幡はそのまま家に向かって歩を進める。正気に戻った由比ヶ浜と一色も追従するが、雪ノ下は留まっている。
「…？どうした？雪ノ―」
「何でもないわ八幡。折本さん、さようなら」
そう言って、歩を進める雪ノ下は勝ち誇った顔をしていた。八幡は雪ノ下が何に勝ったのか皆目見当付かないが、作戦中ずっと自分の心臓が激しく動いていて、今は顔も熱いので心臓病の発作かな？と思っていた。

「皆さん、ようこそ比企谷家へ、ドゾドゾ上がって下さいー」

玄関に入るとドタドタっとリビングから八幡にめったに見せてくれない笑顔で比企谷小町が現れる。
「こんにちは、小町さん」
「や、やっはろー、小町ちゃん」
「初めまして、一色いろはです」
「やっはろーてす！雪乃さん結衣さん。それと、初めまして一色さん。比企谷小町です！小町とお呼びくださいー」
「はい。わたしもいろはと呼んでね、小町ちゃん」
「いろはさんもお美しい……ん？」
そこで小町は何かに気付いたように雪ノ下と由比ヶ浜をチラチラ見ると「お兄ちゃん何かあったの？」と小声で聞いてくる。無理もない、まだ微妙に威風堂々としている雪ノ下ともじもじしてる由比ヶ浜は違和感はあるだろう。
「中学の同級生に会ってな、まあいろいろあってコイツらに協力してもらったんだよ」
「あー、やっぱりですか。わたしのクラスにもいますよ、ああいうの」
一色は「先輩、あんなセリフ言いませんしねー」と納得している。一色の場合は見下したい連中だが、同じ人種である。一色は生徒会選挙の時を思い出しうんうんとうなずいている。
「人を見下す下衆(げす)がいたから比企谷くんと仲の良い演技しただけよ」
「ああ、演技だったんだ…そだよね、ヒッキーあんなこと言わないし」
返す刀で八幡を斬り捨ててご満悦の雪ノ下とちょっと残念そうに笑う由比ヶ浜。
小町も何があったのか大体理解したのだろう。お兄ちゃんがご迷惑かけたみたいですいません、と謝罪をする。
八幡は靴を脱ぎリビングへ向かいながら「まあ、言った言葉に嘘はないけどな」と告げる。

きっと、比企谷家はソファーと炬燵と素敵な何かでできている。前編

「お兄ちゃん何言ったのー！」
小町はそう言ってドタドタとリビング向かい、入り口からチョコっと顔を出し「皆さん上がって下さーい」と言ってリビングに消える。
呆けていた一色はその声に我に返り、雑な案内に血の繋がりを感じて苦笑いを浮かべる。
「ひ、比企谷くんがあんなこと言うなんて。何か悪い物でも食べたのかしら…」
困惑気味な顔を紅潮させたまま、答えを求めるよう雪ノ下は由比ヶ浜に視線を向ける。
「…ゆきのんのおかげだよ。ヒッキーは向き合おうとしてくれてる、あたしだって分かるもん。ゆきのんに分からないわけがない。その気持ちを信じてあげて」
そう言った由比ヶ浜は儚げな笑顔でありながら、咎めるような瞳で雪ノ下を見つめる。
「私の…気持ち…」
「ゆっくりでいいんだよ」
雪ノ下は震える瞳を閉じ「ええ…」と応える。そんな雪ノ下を見つめる由比ヶ浜はどこまでも優しかった。

「あ、あのー、そろそろ上がりませんか？小町ちゃん待ってるでしょうし…」
「…？あっ！一色さん！そそそうね」
「ほえ？いろはちゃん!?ううん、そだね！」
一色のその声に、〝存在を忘れてました〟といった表情になる雪ノ下と由比ヶ浜に一色は、こんな世界で先輩は生きているのか…、と比企谷八幡の深淵を覗いた気分になった。
比企谷家のリビングはリビング（居間）ダイニング（食堂）キッチ

ン（調理場）がセットになったＬＤＫ。
リビングはＬ字型のソファー、テーブル、食器棚、テレビ、大きな本棚、ベランダに繋がるガラスサッシ。ダイニングには４人用のの机と椅子、部屋のドア。キッチンはコの字型になっていて冷蔵庫がある。
そして、冬にはリビングに炬燵（こたつ）が置かれ、ダイニングにはリビングにあったＬ字型のソファーが置かれるためＤＬＫに変化する。
八幡はこのソファーがお気に入りで、携帯ゲームをする時、小町と語り合う時、何か思案してる時、そして、本物が欲しいと語った日に身悶えした時も。このソファーに体を預け、ソファーも八幡を受け止めてくれた。
そんな八幡は冬になると炬燵に浮気をする。本物が欲しいと語った八幡がこの体たらくである。
冬に八幡を堕落させる炬燵は長方形の形だ。テーブルの上にはみかんとお茶の入った電気ポットが置かれてある。
「帰って早々炬燵ですか…」
リビングに入ると、炬燵でぐでっとしている八幡にジト目を向ける一色と呆れたように頭を振る雪ノ下。しかし、人間観察が得意な八幡は炬燵にぴょこんと反応するお団子を見逃すはずがなかった。
「ほぅら、由比ヶ浜。炬燵だぞ？あったかいぞ？お前もこちら側の人間だろう？」
「違うし！炬燵なんか知らないし！ヒッキーのバカ！」
ぷくっと頬を膨らませ、チラチラと炬燵の様子をうかがう説得力皆無の由比ヶ浜の抗議に皆の目は優しい。
「うちは家族揃ってこんな感じですから遠慮せず入ってください」
そう言いながら、小町は食器棚から人数分の湯飲みを手に取りながらお椀に入れて炬燵に置く。
その言葉に由比ヶ浜は、「小町ちゃんが言うなら…」と炬燵に引き寄せられるように向かうが〝はっ〟と小町に向き直ると、いそいそと服のポケットから一枚の封筒を取り出す。

「小町ちゃん合格おめでとー！はい！合格祝いだよ！」
「あ、わたしも合格おめでとう、小町ちゃん」
「ありがとうございますー、小町嬉しいです！」
　由比ヶ浜は図書カードだ。一色も持っていた菓子折りを小町に渡す。
「おめでとう、小町さん。私はまあ、これね」
　雪ノ下は昼食。
　既に比企谷家で合格祝い（白物家電）をされてるのと誕生日が近いのでプレゼントは控えめにした結果だ。
　小町は雪ノ下にお礼を言い、雪ノ下の料理が食べれることが嬉しいらしく、キッチンの使い方を教えながらうきうきワクワクと説明を始める。
「…なあ、雪ノ下。さっき、ちらっと見えた食材の中に凄いのがあったんだが気のせいか？」
「これのことかしら？…姉さんからよ」
　それは〝米沢牛〟と木箱に書かれた大層美味しそうな食材だった。
　沈黙。
　雪ノ下陽乃は贈り物一つで場を支配する。食材に例えると陽乃はこうなのだろう。
　ちなみに八幡はナス。
「…はるさん先輩がなぜ？」
「今、一緒に住んでるのよ。今日の事も…小町さんの合格祝いなら、と」
「……そうですか」
　そう問う一色は、今までにない真剣な表情だった。
「…一色どうした？」
「……いえ、……美味しそうお肉だなーと、わたしも食べていいんですよね？」
「いろはちゃんそこまで!?」
　こんなお肉テレビでしか見たことないですし～、と言う一色に小町と由比ヶ浜もお肉について語りだす。

由比ヶ浜は肉について語りながら自然体で炬燵に入っていた。〝激流を制するは静水〟そんな動きだった。
そんな由比ヶ浜に畏怖しながら一色も炬燵に入る。
少したって、小町も雪ノ下への説明が終わり炬燵に向かってくる。このパーティーの主役は小町だ。キッチンの説明も八幡がするべきであり、お茶の用意も八幡がするのが当たり前のはずなのだ。
「…なんか、お兄ちゃんだけ遠い気が…」
小町が炬燵の入ってる場所が妙に八幡だけ孤立している状況に困惑してると、それを聞いた三人が視線を交わす。
「あ、奉仕部と一緒だ…」
「だな」
「ですねー」
くっくっと笑いだす三人を疑問に思いながら小町は一色の隣に座ると、いそいそと炬燵に入る。
小町ちゃんお疲れさま、と由比ヶ浜と一色から労いの言葉をもらい
「いつものことですからー」と返す。
「おう小町、お疲れ」
「炬燵から一歩も動かなかったお兄ちゃんには言われたくないなー」
小町はジトっと愚兄を見るが、愚兄は動じない。そんな愚兄にため息をが漏れる。
一色は八幡を支える苦労を思い、小町の肩をたたく。
「小町ちゃん、わたしで良ければ愚痴、聞いてあげるよ…」
「いいんですか？いろはさん！」
相当溜め込んでいるのだろう。小町は目をウルウルさせて一色を見上げるとゆっくりと語りだす。
小町の愚痴は自堕落な子を持つ母親のようなものだった。家事全般の語りには小町の苦労がひしひしと伝わる内容だった。
一色はそんな小町の肩を寄せ、由比ヶ浜もウンウンとうなずいている。八幡は、きっと小町ならここから持ち上げてくれると、期待しながら見守る。
しかし、そんな期待も虚しく小町の愚痴は続く。

「小町がお兄ちゃんとレンタル屋さんに行った時なんて、一緒に選んで借りてきたＤＶＤを家に帰って見ようとしたら、お兄ちゃんどうしたと思います？」
「ヒッキーのことだから途中で寝たのかな？」
「甘いです結衣さん！正解は携帯ゲームを始める、です！」
うっわ～、とドン引きの由比ヶ浜に「いや、一緒に見るとか言ってないし…」と八幡が漏らすと小町もドン引き。
「あー、わかるよ小町ちゃん。先輩、一緒に映画館行った時なんか、別々に映画見ようとして『あとで待ち合わせな。下のスタバでいいか？』って聞いてくるんだよ！」
「…およ？いろはさん、お兄ちゃんと映画見に行ったんですか？」
一色痛恨のミス。実況なら「あーあ」や「ｗｗｗ」が飛び交っているだろう。
興味深く一色を見つめる小町、所在なさげに目を動かす由比ヶ浜、状況を見守る八幡。
一色は、この場をしのぐ最善の一手を模索する。
「おまたせ、小町さん。素材が良いから、ステーキにしたわ」
唐突に小町の前に置かれたお皿は外はこんがりと焼かれ、中は赤身をのぞかせる米沢牛、付け合わせの玉ねぎときのこのソテーもどこか誇らしげに見える。タレも三種、塩、甘辛だれ、肉油を使ったソース。まるでテレビから出てきたようなビフテキだ。
全員の喉からゴクリと音が鳴る。
「比企谷くんも手伝いなさい。」
「はい、よろこんで」
ステーキを乗せたお皿を運ぶ八幡もどこか誇らしげだ。
そうして全員ぶん運ぶと雪ノ下は八幡の対面に座る。
「ゆきのんはやっぱそこだよね」
「あ…ふふっ、そうね。奉仕部と同じね」
「あー、なるほど！」
小町も理解して、奉仕部の並びに五人はくっくっと笑う。一色は思わぬ助け船への喜びも含まれるている。

「こんなステーキ食べれるなんて小町、凄く嬉しいです！雪乃さん、ありがとうございます！」
「今回ばかりは姉さんに感謝ね。小町さんのお口合えばいいのだけれど」
雪ノ下は小町の感謝に応え、全員で〝いただきます〟と言いステーキに箸をのばす。
「では一色さん、話の続きをしましょうか」
「え？」
一色がその声の先に視線を向けると、満面の笑顔をした雪ノ下がいた。一色の見た助け船は、よく見ると駆逐艦だったようだ。

きっと、比企谷家はソファーと炬燵と素敵な何かでできている。後編

先に食事を済ませてから尋問を開始することになり、全員お肉様のお味に感涙の声を漏らしながら食事をする。

一色は最後の晩餐だ。

食事も終わり、お茶を飲んで一息ついてから雪ノ下は八幡に視線を向ける。

「比企谷くん」

「俺は悪くねえ！」

「…無罪」

「俺はわ、…え？お、おう？な、なんで？」

「比企谷くんに何があったのか大体想像つくもの。コラムの件であれだけ苦労したのだから、何かしらの非があっても償ったと言って差し支えないわ」

比企谷八幡まさかの勝訴。雪ノ下のこの判決に由比ヶ浜も小町も一色も驚きの顔を隠せない。

「残念だったな一色、もう観念しろ。罪を償ういい機会だ、楽になれ」

そして、一色は理解した。八幡を許すことで一色は隠し事ができなくなったことに。

一色被告人は吐いた、包み隠さず吐いた。

カフェに行った事は雪ノ下も由比ヶ浜も聞いているが、問題はフリーペーパーの取材のためにではなく、経費で落とすためにフリーペーパーを利用したこと。

これだけで意味合いは１８０度変わる。

そして卓球、なりたけ、も利用したことも。

「比企谷くん、一色さんの言ってることは間違いないのかしら？」

「はい、ちなみに俺の分は自腹で払ってますよ」

八幡は決して悪くない。むしろ付き合わされた挙げ句、フリーペーパーのコラムで締め切りに追われた。でも、何故か敬語になるのか、

挙動不審になっているのかはわからない。
「となると、一色さんは生徒会経費で遊びに行き、フリーペーパーで経費として落とすつもりだったけれど、決算に間に合いそうになかったから比企谷くんを脅し、私達を巻き込んだと」
「自身の財布を守るだけのためにね」と淡々と語る雪ノ下に一色の顔は青い。
「違うんです！違わないけど違うんです！」
わちゃわちゃと手を振る仕草で意味不明な自供をする一色に雪ノ下は微笑みを返す。
「一色さん」
「わたしは悪く──」
「有罪」
「は、はうぅぅ…」
一色は沈む様にうなだれる。
覆水盆に帰らず。一色船あざと丸、ココニ轟沈セリ。
「ゆきのん、なんか楽しそう」
静観していた由比ヶ浜は頬ずえをついて笑顔でそう漏らす。
「ふふ、バレてしまったわね」
口に指を当てて、ちょとお茶目な素振りで応える雪ノ下にも負の感情はない。
「意外だな。お前こういった行為は嫌いだと思ってたわ」
失言だ、と八幡は思うが、雪ノ下は思い出すように口を開く。
「別の可能性を考えてたのよ」
そう言って雪ノ下は、自身の問題に気を使ってくれている八幡に〝大丈夫〟とばかり小さく首を振る。
「もし、私が生徒会長になっていたら、と想像したの」
一色の依頼。もし、八幡が一色を乗せて生徒会長にしなければ、雪ノ下が生徒会長になっていただろう。
由比ヶ浜も阻止に動いたが、先生からの支持もある雪ノ下に勝つのは不可能に近い。
「クリスマスイベントも私の指揮のもと問題なくこなし、総武高歴代

最高の生徒会長として君臨してたでしょうね」
「私、優秀だもの」と笑う雪ノ下。
　雪ノ下陽乃とも違う道、そこには雪ノ下雪乃の抱える問題〝依存〟は無い。
「でも、比企谷くんと由比ヶ浜さんから逃げた後悔が残る。…奉仕部にも行けなくなって、今この場に私はいない。一色さんが生徒会長になってくれなければ私、一生後悔してたでしょうね」
　そう言って雪ノ下は一色に微笑む。
「それって…。もしかして、わたし救世主だったりしますー？」
　一色は、パッと顔を上げ愛嬌のある微笑を浮かべる。総武のアイドル、復活は早い。
「わかったな小町、お前はああなるなよ」
　八幡が目配せすると「何言ってるの、お兄ちゃん」と、小町はしらっとした視線で見返す。
「これも1つの処世術だよ、お兄ちゃんも少しは見習った方がいいよ」
「え…」
　小町の返答に八幡は絶句する。
「小町ちゃんが悪の道に!?」
「結衣先輩！酷いですよー！」
「あ、ごめーん」と笑う由比ヶ浜にプンスカと抗議する一色。
「クリスマスイベントといえは、小町も手伝いに行ってたんですよ、いろはさん」
「小町ちゃんのクッキー美味しかったんだよー」
　小町は雪ノ下のお菓子作りを手伝っていた。そんな小町が焼いたクッキーを由比ヶ浜は食べていた。
「結衣先輩…」
「結衣さん…」
「あ、ごめーん」と笑う由比ヶ浜。
「ケツカッチンでちょーやばかったから助かったよー、アゴアシ無しだから手伝い期待てきなかったしー」
「サス無しであれだけできれば十分ですよ、聞けばドラリハ無しであ

の演出だとか…凄いです！」
　何かが無かったことだけしか理解できない八幡が困惑してると、
「アゴ…アシ？…サス？…ドラリハ…？」「２人が何言ってるのかわかんないよ…」と、雪ノ下も由比ヶ浜も困惑のご様子。
「あのシナリオ、書記ちゃんが頑張ってくれたんだよ。今度紹介するね」
「ぜひぜひ～」
　八幡奴隷化計画の楔を打つ一色。このまま二人だけで話をさせてはいけないと思うのは必然なのだろう。
「賢者の贈り物だっけか。選んだのは一色だよな、無難な選択だった」
　夫婦がクリスマスのプレゼントに妻は懐中時計の鎖を買うため自慢の髪を売り、夫は髪をとく櫛を買うために自慢の懐中時計を売ったお話。
　短い期間で形にするならベストの選択だった。八幡は、そんな意味で発した言葉だが一色は心外だとばかりに不満げな顔をする。
「そんな打算的な理由で選んでないですよー。普通に素敵だなと思った話でしたし！」
　ふんす、と腕を組みぷりぷり怒る一色。由比ヶ浜は頬に指を当てて思案しながら口を開く。
「えーと、夫婦が贈り物をするけど無駄になっちゃう話だったよね」
「由比ヶ浜さん…。それだと、愚者の贈り物じゃない…」
「あれー？」と言ってお団子をポンポン叩く由比ヶ浜。それを見て、「しょうがないわね」と微笑む雪ノ下。姉妹百合フィールドが二人を包む…
「確か贈り物は無駄になったけど、お互いの一番欲しい物を理解していた贈り物だった。お互いの気持ちを理解しているからこその贈り物だった、て話でしたよね！」
　小町が百合フィールドを破壊するように、人差し指を立てて言うと由比ヶ浜は「なるほどー」と納得する。２歳下に教わる由比ヶ浜、学力の底が見え隠れする。
「違うな…。お互いの一番欲しい物を理解しているが、お互いの気持

ちは理解していなかった。報連相は大事だよって話だ」
「うわー、捻くれてるなー」
うへぇー、としなだれる小町。流石の由比ヶ浜もこれには苦笑い。
「でも、比企谷くんの意見も理解できるわ。お互いの気持ちを理解していれば、こうなることは予想できたもの」
「雪乃さんまで…」
流石の小町もこれには苦笑い。
「わたしはそうは思いませんけどねー」
素敵だな、と言った手前、後には退けない一色。八幡＆雪ノ下連合に単身で挑む〝漢〟の姿があった。
「二人は確かにすれ違ったんですよ。でも、二人は確かに幸せだったんです！」
「…それは妥協だろ、幸せだと思い込んで誤魔化しただけだ」
雪ノ下も何も言わない、八幡と同意見なのだろう。小町と由比ヶ浜も敗戦濃厚な一色に心の中で敬礼をする。
「妥協ですね。でも、妥協してでも失いたくなかったからですよ」
そう言うと一色は探るような視線で特大の爆弾を放つ。
「…先輩が奉仕部で言ったあの言葉は、妥協じゃなかったんですか？」
『あの言葉』それが、どの言葉なのかは言う必要は無かった。
八幡がアイデンティティクライシスに陥り身悶えした言葉。その意味までは理解されなかった、八幡も理解していなかった言葉。
それを一色は理解していた。八幡は、そのことが恥ずかしくて、嬉しくて、嫉妬して、子供みたいに俯いてしまう。
「いろはちゃんは凄いね」
由比ヶ浜は悲しそうに微笑みながらも言葉には尊敬の念が含まれている。
「何言ってるのかよくわかりませんでしたが、いろはさん凄いですね。あんなお兄ちゃん初めて見ましたよ」
隣から目をキラキラさせてかぶり寄りそうな小町、今にも「姉御！」とも言わんばかりだ。
「一色さん」

不意に呼ばれる声に振り向くと、雪ノ下が屈託の無い笑顔を一色に向けていた。
「比企谷くんの代わりに言わせてもらうわ。…私達の負けよ、貴女が正しいわ」
「ゆ、雪ノ下先輩の口からそう言ってもらえるなんて、その、恐縮です」
それは、女王に謁見を許された市民が思わぬ賛辞に萎縮する構図だった。
「可愛い、優しい、称賛される。いろはさん、モテるんでしょうね～」
「まあ、否定はしないけどね。でもー、葉山先輩には通用しないんだよねー」
ガックリ肩を落とす一色に「あのイケメンの…、…ん?」と首を傾げる小町。
「いや、そりゃ葉山に見る目がないんだよ」
一瞬、何を言われたのか理解できず声の主をみれば、目を瞑り僅かに微笑んでいるのが確認でき、みるみる自分の頬が紅潮するのがわかった。
「な、ななんですか!?口説いてるんですか?俺はわかってるよアピールすればコロコロっといくんじゃないかーとか炬燵でゴロゴロしてる人に言われても効果がないのでとりあえずこめんなさい!」
同一人物からフラれた回数でギネス狙えるんじゃなかろうか、と本気で思う八幡だった。

3月3日のサバト　前編

一色いろはは可愛いかった。
それは4歳になる頃から、少しずつ容姿が形成されてきた段階に突出されてきた。
両親は喫茶店を経営しており、当然お店に居ることになる幼女は必然と大衆の目に止まることが多くなる。
千葉城近辺といった立地にある喫茶店は年配客も多い。そんな年配客は、幼女に『可愛い』といった言葉を無遠慮に浴びせる事に躊躇がない。
そんな言葉を毎日浴びせられる幼女は自身の可愛さを自覚し、誇るのは至極当然の結果であろう。
しかし、大抵の場合は小学生に上がる頃に、同年代の女子と比較して挫折を味わう。
だか、一色は同年代の中でも突出していた。
4月産まれというのも精神的に同学年の中で優位になり大人びた印象も与えた。
そんな一色に女子は憧れ、男子は敬う。
特別枠に納められた一色は、その期待に応えるよう振る舞うようになる。
一色はそんな人間関係に悦を覚え、捻くれた。
変化が起きたのは中学生になる頃。
異性を意識し始める周囲の環境に一色も応える。
女子は畏れ、男子は心酔する。
特別枠に納められた一色は、その期待に応えるよう振る舞うようになる。
捻くれ具合にも拍車がかかり、女子を見下し、男子を利用する快感に浸る。
高校生になった一色は、そこで初めて挫折を味わう。
完璧超人、葉山隼人。イケメン、スポーツ万能、成績優秀、周囲の期待に完璧に応える人。

一色は同じ特別枠を自分以上にこなす葉山に尊敬と憧れを抱き、それを〝恋〟といった感情だと思い葉山にすがった。
その頃、一色の周囲も変化し反応も複雑化する。
女子は敵視、無関心。男子は好意、諦め。
一色は葉山のように頭が良いわけではない、だから期待に応える振る舞いを完璧にこなす事ができなかった。
その結果、一色のキャパシティを越えた感情は暴走し、生徒会選挙といった罠に到達する。
どうすることもできない。そんな絶望的な状況において、どう振る舞えばいいのか分からない挫折した一色の前に現れた人がいた。
自身の振る舞いを見抜き、自身の性格以上に捻くれた男、比企谷八幡。
『生徒会長なのに部活に出てくるわたし』
絶望的な状況を利用し、周囲を無理矢理に一色のキャパシティに納める提案をする八幡に抱いた感情は興味だった。
最初の印象はクールを気取ってる痛い奴。しかし、生徒会選挙の一件で印象はガラリと変わる。
雪ノ下と由比ヶ浜、生徒会選挙に立候補した二人に一色が勝てる要素が無いと言い放つ八幡に反論ができなかった。
一色は『可愛い』以外取り柄が無い。
そう気付かされる。そして、それすらこの男に通用しないことにも…。
生徒会長になり海浜高校との合同クリスマスイベントを八幡に手伝ってもらう事になった。
その頃の八幡の印象は、頭が良い人、冷めてる人、利用価値のある人〟だった〟。
〝だった〟のは、奉仕部での八幡と雪ノ下、由比ヶ浜の口論の果てに八幡の言葉を聞くまで。
『本物が欲しい』
同じように捻くれた人間関係を構築し、挫折した一色だから理解できた言葉。

特別枠に納められ、それに応えるように振る舞い、壁に衝突し挫折する。八幡と一色の進んできた道は一緒だった。

３月３日土曜
小町の誕生日。
一色は、千葉駅のコーヒーショップでカフェショコラを注文して空いてた四人用の席に座っている。
一色は、ネイビーのジャケットに杏子色のクローシェスカート、白のパンプス。ピンクのハンドバッグを足下に置いている。
先日、比企谷家で小町の誕生日について話した際、小町の希望で遊びに行くことになった。
時間は８：５５分、八幡と小町は１０：００時に待ち合わせなので一時間早い。
「いろはちゃん、やっはろー」
「こんにちはー」
赤のセーターに白のスカート、紺のロングブーツに黒のトートバッグを肩に掛け笑顔で謎挨拶をする由比ヶ浜。
注文したブレンドコーヒーを対面の席に置き、いそいそと席に座る。
「待たせちゃた？」
「いえ、今来たとこですよ」
待ち合わせに一時間早く来たのは由比ヶ浜から『話たいことがある』とメールで頼まれたからだ。
「ゆきのん、やっぱ来れないみたい」
「家の事情じゃ、しょうがないですよねー。雪ノ下先輩の場合、一般家庭と抱える問題の質も違うでしょうし」
「子供の頃はお金持ち羨ましいとか思ってたんだけどねー、…実際は悩みを相談できる人も限られるから…」
そこまで言ってパッと手で口を塞ぐ由比ヶ浜。
「…いろはちゃん、誘導尋問上手いね…。危うく引っかかるとこだっ

たよ…」
「何が!?」
突然の反応に狼狽する一色。由比ヶ浜は、あぶないあぶないと言いながら額を拭う仕草をしつつブレンドコーヒーをこきゅりと飲み心を落ち着かせる。
それから少しの間、雑談を踏まえつつ近況のことを話し合った。
「ところでいろはちゃん、最近奉仕部来ないけど何かあったの?」
「あー、えーとですね。…まあ、色々調べ物がありまして。平塚先生と相談してから決めようかなーと思ってるので、お気になさらずしておいていただけたらなーと」
「平塚先生?」
「ええまあ、わたしに何かあったとかそんなことはないので大丈夫です。…話ってこの事でしたか?心配かけてすいませんでした」
そう言って、申し訳なさそうに眉をハの字にしてカフェショコラをスプーンでこねくりまわす一色。
「あ、いや、違くて…」
手を胸の前で振ってから、ゆっくりとスカートの位置に戻し、少し俯くとたどたどしく声を発する。
「ヒッキーのこと、なんだけどさ…」
由比ヶ浜はスカートの裾を握って『話たいこと』を口にする。
一色は、こねくりまわす手を止め、混ぜられたカフェショコラを放置して目を瞑る。
「いろはちゃん、…好き、だよね…」
「…はい、好きです」
「そっか…、あたしも好き」
その後、しばらく店内に沈黙が続く。
そして、近くの席に座っていた男がコーヒーカップを落とす音が店内に響き渡ると二人はハッと音のした方に注意を向ける。
コーヒーカップを落とした男が気まずそうに片付けてると、店員が優しい笑顔で「大丈夫ですか?」と片付けを代わり、他の客も〝大丈夫だよ〟と言わんばかりの顔をしている。

千葉駅のコーヒーショップが優しさに包まれる。
その原因を作っている二人は気を取り直し、会話を続ける。
「…いつから、って聞いていいのかな？」
「はい。…でも、いつの間にかって感じなので。気付いた時ってことでなら…」
由比ヶ浜はこくりと頷く。店内は静まりかえっているが二人は知る由もない。
「ディスティニィーランドの後、先輩が初めてわたしを認めてくれて。その時、わかっちゃったんです」
一色は奉仕部の一件に感化され、葉山に本物を求めた。
ディスティニィーランドで奉仕部の三人が距離を縮める中、葉山に積極的にアピールする一色は縮まぬ距離に焦りを覚える。
時間だけが過ぎて行き、自棄になり葉山に告白することになる。
そんな心の無い告白に葉山が応えるはずもなく、一色は当たり前のように拒絶される。
嫉妬、妬み、不安、焦り、後悔、恥、空虚、困惑…。色々な感情が涙と一緒に溢れ、虚勢を張って強がってみせる一色に八幡が言った言葉。
『すごいな、お前』
その一言で、ぐちゃぐちゃの感情が涙と一緒に霧散し、空っぽの心に一つだけ残った感情がわからない筈がなかった。
「とまあ、それから先輩に認められるだけで舞い上がっちゃう女の子になったわけです」
まあ、先輩なかなかデレてくれませんけどねー、としょんぼりする一色。
「そ、そーなんだー…」
予想以上の愛の深さに若干引きつつ、由比ヶ浜はふと思った。
「でもさ、ヒッキーってまだ隼人くんのこと好きって思ってるよね。それって辛くない？」
何故、誤解を解かないのだろうと素朴な疑問が残る。恋敵だけど、だからこそ辛さが理解できる。

その機会がないのなら、そのくらい協力しても良いと思って聞いた由比ヶ浜だが。
「でもー、結衣先輩は気付きましたよね？」
「う、うん。そりゃ見てれば流石にね…」
「先輩、人を見抜くのチョー上手いじゃないですかー。だったら真っ先にわかりそうな気がするんですよねー」
でも間違いなくわかっていない、それに由比ヶ浜は困った顔で応える。
「ヒッキー、その辺り鈍感なんだよ…」
「や、単純に恋をしたこと無いからですよ」
恋をしたことないから気付かない。由比ヶ浜は理解できない理由に首を傾げる。
「先輩は行動や発言から結論を出すタイプですが、その中に恋は含まれてないんですよ」
そう言って一色は腕を組んで「どう言えばいいのか…」と思案する。
「うーん…。よくわかんないけど、いろはちゃんは気付くまで待ってるってこと？」
「…そうですね。まあ、まだその時ではないって感じですね！」
指を立てて明るく笑顔で宣言する一色。
八幡が恋を知った時。つまり、好きな人ができた時である。
一色が想いを伝えるつもりがないと言ってるようなものだが、感情的に動く由比ヶ浜にはわからない。ただ、近くの席の女が涙を拭うばかりである。
「でも、隼人くんのことは本当にふっ切れてるんだね。優美子にあたしから伝えとこうか？意味なく嫌われてるのいい気しないだろうし」
「…いえ、三浦先輩は張り合いのある相手がいた方がいい感じしますし。それにこれは葉山先輩への贖罪にもなるかなと…」
「隼人くんへ贖罪？」
何故、気持ちを伝えることが罪となるのか。申し訳なさそうに話す一色に首を再度傾げる。
「葉山先輩への気持ちは恋なんて綺麗な物じゃなかったんです…」

「恋じゃない…？それって…」
由比ヶ浜は、これ以上聞いてはいけないような得も知れぬ感覚に自然と体を強ばらせる。
その恋ではない紛い物。それは――
「言うなれば、依存ですね…」
「いぞ…ん…」
親友を苦しめている〝依存〟、恋の紛い物。
由比ヶ浜の瞳は揺れ、口は喋った状態で固定されたように動かない。
「あ、いや！い、依存っていっても別に悪い感情じゃないですよ！尊敬とかそんな感じからくるものですし。…そ、そう！宗教とかも依存じゃないですか？葉山先輩も怒ってるとかそんなんじゃないですし、むしろ嬉しいんじゃないですかね？葉山教祖ですよ、そうですよ！葉山教なんです！」
由比ヶ浜の状態を勘違いし、あたふたと言い訳をする一色。
少し遠くの席に座るボウズ頭がぽつりと「葉山教？」と漏らしピクリと眉を動かす。
「あ！ごめん。怒ってるとかじゃなく、びっくりしたとかだから気にしないで！…にしても葉山教…葉山神…」
想像して口を押さえて笑う由比ヶ浜。それに安堵して一色は話しかける。
「わたしの話しばかりなのもあれなので、結衣先輩のも聞かせてくださいよー」
「ふえ？あたし？」
もっと一色の聞きたい気持ちもあるが、これ以上一方的に聞くのも悪いと思うので「何を？」と応える。
「先輩との馴れ初めですよー」

3月3日のサバト　後編

由比ヶ浜結衣は明るい元気な子。
それが幼少の頃から変わらぬ周囲の評価だ。
団地で育った由比ヶ浜はご近所の評判も極めて高く、〝由比ヶ浜家は理想の家族〟と言われるほどだった。
我が儘をを言わない、ちゃんと挨拶できる、言われたことは守る。
子供同士の付き合いも円満で〝結衣ちゃんが居ると安心できる〟と親子共々から評価された。
小学生になっても、中学生になっても、その評価は変わらなかった。
反抗期も無く、いつも明るく元気な手のかからない子。ご近所の夫婦はそんな由比ヶ浜家を羨んだ。
ただ、由比ヶ浜の両親は違った。
娘には問題がある、と。
周囲に合わせていること、自己主張ができないせいで自分を押し殺して生活していること。
こんな生き方が続けられる筈がない、いつか壊れてしまう。そう思った両親は行動に移した。
団地からマンションに引っ越し、娘に犬を買い与える。
環境を変えることで娘にも変化があるだろうと。
犬はサブレと名付けられ、娘は自発的に面倒見るようになる。
制服が可愛いといった理由で受けた総武高校。
由比ヶ浜の学力では難しいだろうと先生から言われるが、主張を曲げず挑み合格した。
両親はそんな娘の変化に喜んだ。
総武高校入学初日までは。

入りはあるのに出がない、千葉駅のコーヒーショップ。土曜の朝には有り得ないほど込み合っていた。
入店した客はまず、その客の多さに驚く。

そして、静かなことに困惑すると同時に一際目立つ二人の美少女が視界に入る。
その二人の話し声だけが店内に響き、他の客は静観するように黙る。
千葉駅のコーヒーショップはちょっとした劇場と化していた。
「ヒッキーとの出会いは入学初日の早朝。犬のサブレを散歩に連れてたんだけど、車にひかれそうになったサブレを助けてくれたんだ」
「ドラマチックな出会いですね。颯爽と助けるとか、葉山先輩みたいです」
「でも、ヒッキーが車にひかれちゃて。そのまま入院したんだ…」
「あ、先輩ですね…」
自分のせいで誰かを傷つける。誰でも幼少の頃に自身の行動の末に経験するものだ。
しかし、自己主張をしない由比ヶ浜は誰かを傷つけることが無かった。自身で行動しないのだから当たり前だ。
「人を初めて傷つけたのが交通事故。どうすればいいのか、どう責任をとればいいのかわからなくて…」
放心状態の由比ヶ浜に両親は自分たちの安易な方法で最悪の結果を招いたことに後悔する。
「それで、パパがヒッキーに謝罪しに病院に行ったの。そしたらヒッキー何て言ったと思う?」
「…さすがに内容が内容だけに想像できませんね…」
交通事故の原因を作った人の親。そんな人の謝罪をどう受け取ればいいのか、一色に想像すらつくわけない。
そんなことを考えていると、由比ヶ浜はクスッと笑う。
「そんなに深刻に悩まれてるとは思ってなかったです、すみません。だって」
由比ヶ浜父が病院に行った時、比企谷母が対応した。
しかし、謝罪に来たことを伝えると、申し訳なさそうな顔をされて「気にしないでください」と言われる。
土下座する覚悟で挑んでた由比ヶ浜父は拍子抜けするが、そのまま

帰ることは絶対にできない。どうしてもと頼んで、渋々八幡の病室に案内される。
八幡の病室は一人部屋だった。
由比ヶ浜父が入ってきた時に八幡は怪訝な顔をしていたが、比企谷母が説明すると納得して申し訳なさそうな顔をした。
それから愛犬を助けてくれたお礼、娘が放心状態で来れない代わりに謝罪に来たことを伝える。
八幡はそれを聞くにつれて段々と顔を青くして由比ヶ浜父の謝罪を遮り、発した言葉が先の八幡の謝罪だった。
一人部屋が用意され、多額の慰謝料を手に入れた八幡は思った。
ラノベ読み放題、好きなだけ飲めるマッカン、働かなくても食える飯。ここは天国だ、と。
八幡は病院での自堕落生活を満喫していた。
「あたしが事故の重圧に苦しんでる時、ヒッキーはエンジョイしてたんだよ！」
「相変わらずのクズっぷり、先輩を同情できる日は永遠になさそうです」
同情するなら金をくれ！を地で行くスタイルに劇場も唖然。
由比ヶ浜も父から聞かされた八幡の状況に「なにそれ！」と反射的に反応した。
「でも、救われた…。どんな慰めの言葉でも救われなかったと思うから」
当時は理不尽だー！と思ってたけどねー、と楽しそうに苦笑いで話す由比ヶ浜に一色も苦笑いで返す。
「気になったんですけど、車の運転手側はどうなったんですかねー」
「あ、それも大丈夫だよ。わだかまりとかないから、解決してる」
運転手側は雪ノ下家だか、この問題は最終的かつ不可逆的に解決している。
今更、蒸し返されることは国際常識的にあり得ないので言う必要は無い。
「そうですかー。まあ、それはいいとして。結衣先輩、長いですね先輩

との付き合い」
　それに由比ヶ浜は「ううん」と言いながら首を振る。
「話しかける勇気がなくてね…」
「先輩の方から話しかけたり…って、ありえないですね…」
「ははは、うん。２年になって奉仕部に依頼に行くまで全く」
「依頼、ですか？結衣先輩が依頼とか想像つきませんね…」
　一色は一年間話しかけれなかったのも驚いたが、トップカーストの交遊関係の広い由比ヶ浜が依頼する理由の方が謎だった。
　一色とは違い悩みを打ち明けられる友人も多いし、その中に葉山もいる。自前の戦力で奉仕部を圧倒しているだろうことは明白だからだ。
「ヒッキーにね…。えーっと、お礼にクッキーあげたいなー…て思ってさ。作り方を教えてもらいに行ったの」
　なるほどそれなら友人には頼めないな、と納得する一色だが…
「え？でも、先輩も奉仕部に居ましたよね？それに、手作りクッキーって…」
　渡す相手に教わる、実にシュールだ。
　しかも、手作りクッキー。好意があります、と言ってるようなものだ。
「あ、や、違くて。ヒッキー居るのあたしもびっくりだったし。それに、その時はまだそんなんじゃなくて…一歩手前って感じでさ。クッキーも知り合うきっかけになればなーって、こゆの初めてだからよくわかんなくて」
　大抵の人は少しずつ心の距離を縮めていくが、由比ヶ浜は自己主張しない性格だから心の距離を測ることなく全て受け入れてしまう。それ故、心の距離を測るのが下手なのだ。
「でも、依頼に行ったらゆきのんとヒッキーがいつもみたく言い合いながらあたしに協力してくれたの。二人とも本音を隠さずあーでもないこーでもないってさ…。」
　そう言って由比ヶ浜は昔を思い出すように目を細める。
「あたし、いつも本音言えなくて流されるだけだったから。そんな二

人がすごいカッコいいなー、て思ったの。あたしも二人みたいになりたいって、一緒に本音で言い合いたいなって」
　そして、由比ヶ浜幸せそうな表情をする。
「その時にはヒッキーのこと好きになってた…」
　それからの由比ヶ浜は家でも自己主張をするようになり、雪ノ下と八幡の話を楽しそうに話す姿に両親は安堵した。
「本音で言い合うかー…。わたしもそうです、先輩の前なら素のわたしでいられる」
「うん、あたしも。それと、いろはちゃんとも本音で話せてよかったなーて思う」
「わたしもです」
　そうして二人してクスクスと小さく笑い合う。
　すると、はたと思い出したように一色は自分のバックをガサゴソとあさり、携帯とイヤホンを取り出す。そして、イヤホンを由比ヶ浜にスッと差し出すと付けるように仕草で促す。
　由比ヶ浜は突然の行動を不審に思いながらも促されるまま耳にイヤホンを付ける。
「今日は先輩とデートです。結衣先輩は目一杯オシャレして待ち合わせ場所に行きます」
「ヒッキーとデ、デート!?」
　突然始まった一色の語りに何事かと驚くが、一色はこくこくと頷くばかりだ。続きがあるらしい。
「待ち合わせ場所に着くとすでに先輩はいます。結衣先輩はおまたせー、と声を掛けます」
「う、うん」
「その声に先輩はおう、と応えると結衣先輩をまじまじと見定めます。結衣先輩はその視線に変かな?と問いかけるんです」
「ヒッキーどう思うのかな…」
　唐突の妄想デートに、さして抵抗なく受け入れる由比ヶ浜。今、由比ヶ浜の前には八幡がいることを確信した一色はおもむろに携帯を操作する。

『今日も可愛いよ』
「うひゃあ!!ヒヒヒヒヒヒッキー!……いろはちゃん、これは一体…」
　耳元に突然聞こえる八幡の声に驚くも、イヤホンだと気付き一色に問いかける由比ヶ浜。一色はそれに首を振って応える。続きがあるらしい。
「それから結衣先輩の行きたい場所に行きます。先輩はそんな結衣先輩と肩を並べて歩きます、もちろん恋人繋ぎです」
「ヒッキーと恋人繋ぎ…えへへー」
　由比ヶ浜の妄想デートは順調のようだ。アトラクションに乗ったり水しぶきがかかっている、ディスティニィーシーに行ってるようだ。
「でも楽しい時間はあっという間。日もくれてきて、そろそろデートもおしまい」
「そんなぁ…」
「二人はベンチに腰掛けます。近くには誰もいません、二人だけ。ふいに結衣先輩は先輩の視線を感じ振り向きます」
「ヒッキーも同じ気持ちでいてくれてるのかな…」
「先輩は、結衣先輩を優しい笑顔で見つめています。そして、手を結衣先輩の頬へ優しく添えました」
「ヒッキー、どうしたの？」
　ついに妄想に語り掛ける由比ヶ浜。
『いや、素敵な女の子だな、と思って』
「ヒッキーも素敵だよ…」
　うっとりする由比ヶ浜、もう完全に乙女の顔だ。
　妄想八幡が近くに居るのだろう、そこに顔を近づけていく。
「ちょーと、ちょと！結衣先輩！戻ってきて下さい！」
「はえ？あれ？ヒッキーは？」
　ちょっとした遊びのつもりだった一色は、現実をいともたやすく突破する由比ヶ浜の妄想力に戦慄する。
「先輩はいませんよ。…ちょっと調子に乗ったのはあやまりますか

ら、現実を取り戻して下さい」
「あ、いろはちゃん。……あとちょっとだったのに…せつないよぅ」
　正気に戻った由比ヶ浜を見て胸を撫で下ろし、携帯をバックに戻そうとする。
「ちょっと待って、いろはちゃん！ヒッキーの声したけど、それは一体何なの？」
　一色は戻すのをやめて、気まずそうにあははと笑い由比ヶ浜に向き直る。
「いやー、この間の先輩のを録音したんですよ。いずれ先輩を利用するための脅しになるかな～、と思いまして」
　察しのいい一色は、雪ノ下への言葉を聞いて録音を開始した。
　家に帰って予想以上に上手く録音できていたので編集し、八幡を脅す材料として使おうと思っていた。
「…ねぇ、いろはちゃん。それあたしにもくれないかな？」
「え？い、嫌ですよ。レパートリーも色々用意して、作るの結構苦労しましたし」
「えー、いいじゃん。ちょっとだけ、あたしへの言葉の部分だけでいいからさ～」
　でも録音したのは一色だ。それに、脅しの材料は管理をしっかりしないと効力が弱くなるから簡単にあげることはできない。
　そんなことを説明するも由比ヶ浜は諦めきれないのか、テーブルに突っ伏して足をばたつかせ駄々をこねる。
　その姿があまりに可愛らしく、一色の意志が揺らいできたところでふいに由比ヶ浜が動きを止め、「ねぇ、いろはちゃん」と言いながら顔を上げ姿勢を正す。
「じゃんけんしよっか？」
「…じゃんけん、ですか？」
「そう、じゃんけん」
　由比ヶ浜はいったん言葉を区切ると、小さく頭を振る。そして、それで…、と付け足して彼女は一色をひたと見据えた。
「あたしが勝ったら全部貰う。ずるいかもしんないけど……。それし

か思いつかないんだ……。ずっと、このまま聴いていたいなって思うの」
ガキ大将も尻尾を巻いて逃げる程の暴論だった。
「どうかな……？」
「どうって……、それは……」
由比ヶ浜に問いかけられて、一色は言葉を詰まらせた。
じゃんけんをしたら確実に負ける、そう思わせる迫力だった。
時間も空間も確率すら無視して、因果律さえ超越する、そんな気迫があった。
由比ヶ浜はたぶんまちがえない。楽しい時間をずっとこのまま。
「いろはちゃん、それでいい？」
まるで母親が幼子に尋ねるように、由比ヶ浜は問いかける。問われて、一色は肩をぴくりと震わせた。
「わわわ、わかりましたよ！あげますから、差し上げますから！」
「やたー！いろはちゃん、ありがとー」
一色は屈した。
でも、誰も責めることはできないだろう。
それから一色の〝先輩ボイスセレクション〟を楽しそうにチェックしてる由比ヶ浜と、冷めてしまったカフェショコラをチビチビ飲む一色の姿があった。
そこで、演目は終了と相成った。
怒濤の展開から解放された会場の客も落ち着きを取り戻しつつある。
「おう、お前ら早いな」
二人は前触れなく掛けられる声に反応して振り返る。
そこには妹の小町を連れた比企谷八幡がいた。

コマチボウル

３月３日土曜９：５０分
比企谷八幡と比企谷小町は兄妹揃って千葉駅にいる。
小町はピンクのカーディガンにボーダートップス、黒のショートパンツと黒のシューズ、灰色のバックが肩から覗く。
八幡は黒のブルゾンと白のＴシャツ、カーキのカーゴパンツとダークブラウンのブーツ、濁った眼が深き深淵を覗く…。
１０：００時オープンの店が多いため、さほど込み合いをみせない千葉駅だが目的のコーヒーショップは妙に人が多く見受けられる。
八幡は人が多い店内に軽く溜め息をつくと、由比ヶ浜、一色と待ち合わせをしているため仕方なく踏みいる。
「お兄ちゃん、結衣さんといろはさんだよ！」
「ん？…おお、そだな」
由比ヶ浜と一色はよく目立つ、そこだけ空気からして違うような気さえするほどに。
よくナンパなどされると自慢気に話す女子がいるが、ナンパされる女子は探して見つける程度の存在でしかない。言わばダンジョンにある宝箱レベルだ。
美少女と言われる存在は、ああやって目立っているが声をかけることはされない人達のこと、言わば王国の姫。一般人が話しかけることは許されない、話しかけてしまえば周囲の視線に責められゴリゴリとライフを削られて、なにもできずに逃げ出すことになる。許されるのは勇者葉山と愉快な仲間たち、くらいだろう。
八幡は一般人、だが特殊スキル「ステルスヒッキー」があるから平然と話しかけることができる。要は認識されなければ問題ないのだ。
コーヒーショップで八幡はチョコリスタ、小町は宇治抹茶ラテを注文し二人の席に向かう。
小町の宇治抹茶ラテを一緒のトレーに置き、さりげなく妹への優しさを見せるが小町ポイントはアップしない。小町的にどうでもいいらしい。

「おう、お前ら早いな」
　声に反応して二人は同時に振り向く、一色は目を見開いて驚き、由比ヶ浜は慌てて携帯を手に取る。
「お、おい。俺だよ俺、不審者じゃない。それと、由比ヶ浜はとりあえず携帯から手を離せ」
「お兄ちゃん、言い方が不審者っぽいよ…小町的にポイント低い」
　小町にもあきれ顔で見つめられ、昨日気晴らしにやった名前診断も人格が凶だった八幡は落ち込む。
「違うよやっはろー！そゆのじゃないから！」
「そうですよ、言わば乙女のヒミツですよ」
　言いながら由比ヶ浜は乙女のヒミツ（盗聴の物的証拠）をバックにしまう。
　八幡はなんだそれと思いつつ、トレーをテーブルに置き、一色の隣の椅子に座る。
「…およ？」
「え、なに？」
　小町が意外そうな顔つきで八幡を見る、由比ヶ浜と一色もポカンとした顔だ。
「いや、迷いなくそっちの席に座ったな～と」
「あれ？小町ちゃん？もしかして、お前は地べたに這いつくばれ的なこと？八幡的にもポイント低いよ？」
　伊達に小町は１６年もこの兄と付き合ってきたわけではない、普段の兄はこの状況を理解できない訳がないのだ。女子の隣に座る、それを意識しないわけがない。それでも迷いなく一色の隣に座る理由は…。
　譲れない想いがあったから。
「つまり小町をいろはさんの隣に座らせたくないと…」
「なんのことだか、わからんな」
　類似性の法則。趣味、特技、思考など、共通する者同士は仲良くなりやすい、といった法則がある。
　小町と一色は一見、似ているように思えるが、この類似性の法則に

は当てはまらない。だから八幡は心配していなかった。
それ故、八幡は見落とした。二人の最大の共通点、『八幡を利用する』を。
二人は初対面なのに一気に距離を縮めた、八幡という共通点だけで。
そして八幡は類似性の法則には欠点があることを知る、『ミラーリング』である。
ミラーリングは、好意を寄せる相手に合わせること。趣味、特技、思考などを相手に合わせる。そして、その影響を受けるのは年下の小町だ。
小町の一色化。最悪のシナリオ、最悪の選択。だから八幡は譲れない。
「すみません変な兄で。いろはさん、気持ち悪い人だけど我慢してください」
そう言いながら由比ヶ浜の隣に座る小町たが、一色が「う、うん」と附せ気味に応じる姿に不適な笑みを浮かべる。
「あれー？お二人とも、小町が来る前に何かありましたかー？」
「えー、いやー、何もないよ！ない、全くないよ小町ちゃん！」
手をブンブン振って応える由比ヶ浜に小町は笑みを深めニッシッシと笑う。
「まあ？乙女のヒミツでしょうから？お・に・い・ちゃん！がいるので聞きませんけどねー」
そう言って目をニタリとしたまま由比ヶ浜に向けつつ宇治抹茶ラテを飲む。そんな小町に二人は頬を引きつらせる。
「で？これからどうするんだ小町」
唐突に話題を変える八幡。乙女のヒミツが何なのか分からないわけではない、由比ヶ浜が俺の好意的な話をしていたのだろう、と予想している。
実際はもっと濃い恋の話なのだが。
一般的な男子なら、にやけて話の続きを気にするものだが、八幡は居心地悪くなってしまう残念な仕上がりなのだ。まるで由比ヶ浜の

クッキーのように。
「ん？あー、そのことねー」
ちょっと醤油とってー、みたいな適当な物言いをする小町。それが、今日の予定ではなく八幡に対する扱いからきてることに、ちょっぴり傷つく八幡。
由比ヶ浜と一色も聞いていなかったらしく黙って聞いている。
「ボウリングです！」
「お、おう」
ずびし！と八幡に指をさす小町。その瞳は燃えており、八幡は気圧されて身動ぐ。
「ボウリングですかー。じゃあ、前に先輩と卓球したところが近いですねー」
「ヒッキーと卓球…。あ～、こないだ話してたとこかー」
一色は手をぽんと合わせて八幡を見る、その流れで由比ヶ浜も自然と八幡を見ることになる。
そういえば今日初めて名前？を呼ばれたな、と思いつつ卓球での一色の振る舞いを思い出す。
「おう、一色が卑怯な手段ばっか使ってきやが…」
途中で話しを一旦止め、一気にチョコリスタを飲みほす。
「先に店出ない？…なんか視線が痛い」
「しせん？」
言うと由比ヶ浜は辺りを見渡す。すると、店内の数人が視線をそらす。
由比ヶ浜は空気を読む能力は一流だ、すぐに注目されてたことに気付くと、いつから注目されてたか考える。
――そういえば店内が静かだったような…。いつから…？確か、誰かがコーヒーカップを落とした時から…？その時何を話してたか…。
そこまで考えて、みるみる顔を赤くする。
一色は察する能力は一流だ、由比ヶ浜の姿を見て状況を理解すると同じく顔を赤くする。
「そ、そうですね！それがいいと思います！」

「う、うん！そだね！」
二人の慌てる状況に小町は楽しげに了承し、八幡はトレーに全員分のカップを乗せると、そそくさと返却口に向かう。
「ありがとうございましたー」
ステルスヒッキーを容易に突破した客達の視線を浴びながらトレーを置くと、返却口の隙間から男の店員がそう声を掛ける。
その店員は、スマイルを張り付けた顔に不釣り合いな呪詛を含んだ瞳で八幡を見つめていた。

千葉中央駅から徒歩一分程度の場所にある老舗のボウリング場、1フロア46レーンは千葉最大を誇る。
午前中なのもあり客もさほど多くないので、登録は由比ヶ浜・小町、八幡・一色で2レーンを使わせてもらった。
登録名は八幡を除いて三人で、わいわい楽しく決めた様子。そして、シューズを借りて由比ヶ浜はピンク、小町はグリーン、八幡はブラック、一色はレッドのボールを選ぶ。
由比ヶ浜・小町は7番レーン、八幡・一色は8番レーン。液晶パネルには登録した名前でスコア表が映し出されている。
「なあ？色々言いたいことあるけどさ、なんで俺1人なの？一色こっちじゃない？」
「いいじゃん、お兄ちゃんは大抵いつも1人なんだし～」
小町は中央の液晶パネルを操作しながら適当に応える、由比ヶ浜と一色は7レーン側で話している。
八幡は小町に近付き液晶パネルをトントンと叩く。
「それと、これはなんだ」
ゆいゆい
こまちゃん
ヒッキー&先輩

あやねる
「よくない？ヒッキー、なんかアイドルユニットみたいでいいじゃーん」
「ユニットなのに1人ですけどねー」
ニヤニヤ笑う一色に、お前も相当だぞ、と思いつつ不貞腐れたように席に戻る八幡。
「さて皆さん、これからボウリングを始めるのですが、小町から1つ提案があります！」
そう言って、小町は立ち上がり手を腰に当て、提案と名を打った決定事項を伝える。
「ボウリングでトップになった人の命令に一時間絶対従ってもらいます！」
由比ヶ浜はチラチラこちらを見つつ、一色はニヤニヤとこちらを見つつ、その提案を了承する。
「一時間か…。まあ、あまり無茶な条件じゃないならいいぞ」
無茶な条件といった曖昧な言葉を入れることで負けた時の命令逃げを付け足す八幡。ここに雪ノ下がいれば通らないだろうがな、と内心ほくそ笑む。
「それじゃ、始めましょう！結衣さんからレッツスタートー！」
「よし！負けないからね！」
気合い十分、ゆいゆいの第一投。ボールを掴んで小走りのままボールをレーンに転がす。
気合いのわりに、のろのろと進むボールはピンまで到達すると5本倒す。二投目も同じ軌道で進むボールは3本倒す、なぜガーターにならないのか不思議だ。
そんな由比ヶ浜は投げる瞬間に少し前屈みになるため、スカートからのぞくフトモモがエロい。
八幡はチラチラとその眼福な景色を堪能するが、小町と一色から白い目で見られてることに気付き咳払いして誤魔化す。
「8本だねー、やっぱ気合いだけじゃダメだなぁ」
「フォームを、フォームを見ていたが、もっと投げるようにすればい

いかも知れんぞ！」
　八幡の誤魔化し全開のアドバイスに小町と一色の目は冷たい。
「結衣先輩。この人、スカート見てただけですよ」
「え！・ヒッキーキモい！」
　そう言って両手でスカートを押さえる由比ヶ浜。そのせいで今度は二つの双丘が強調される、…エロい。
「結衣先輩には勝てる気がしませんね…」
「天然モノですね…」
　その養殖な二人の反応に由比ヶ浜は、あれ？・と首を傾げる。
　そんな中、とある事情により、その場に座り尽くすことしかできない八幡だった。
「なんか結衣さんに色々持っていかれた感が否めませんが、ボウリング勝負はいただきます！」
　こまちゃんテイクオフ。ボールを掴み、それなりの構えでストロークに入る小町。
　前傾姿勢から投じられる第一投は、そのまま一番ピンまで直進し９本倒す。二投目で残りの１本も軽々倒してＶサインでランディング。
「へっへへーん、スペア～」
　天真爛漫な笑顔で戻ってくる小町に由比ヶ浜と一色はハイタッチでお出迎え。そして、ニヤリと口を歪ませて八幡に近付く。
「お兄ちゃん？・小町の平均スコアは１５０だよ～！・かってるっかな～？」
「……」
　これは小町の罠だった。命令権でとりあえず結衣さん、いろはさんのファッションを誉めさせよう、などと考えてほくそ笑む。そんな妹に八幡は附せ、肩を震わせる。
「残念だったなぁ、小町」
「へ？」
　ぬぼりと起き上がり、ボールを掴んでレーンに向かう八幡。
　漆黒の球体を構え、闇を見透す眼で先の１０の生け贄を見定める。
ヒッキー＆先輩の蹂躙劇が開始される。

踊るように軽やかに、やや前傾姿勢で放たれる球体。球体は闇の波動を乗せ一直線に1番3番の間を突き抜け全ての生け贄を駆逐する…。

その惨劇を確認した八幡は背を向け小町の顔を見やる。唖然と立ち尽くす小町に、口の端を吊り上げてすれ違いざまに肩をポンと叩く。

「お兄ちゃんの平均スコアは１９０だ」

「なん…だと…」

小町はドサリと膝から崩れ落ちる。

小町は友達とボウリングに行き腕を上げた、一般的なスコアは年齢不問で女性平均１００前後。故に小町の１５０は驚異的なのだ。マイボウルを持っていても恥ずかしくない程の腕前であり自信を持つのも仕方ない。

しかし、八幡は基本高スペックでありボウリングもボッチなので基本1人でプレイするが故に、このスコア。ボッチ最強。

小町は今後のことを考える。兄は命令権で『大好きなお兄ちゃん』と言わせてくるだろう、次の行き先へ『家』とか言いそうだと。

「小町ちゃん、しっかりして！まだ始まったばかりだから！いけるいける！小町ちゃんなら３０点差なんか覆せるよ！」

由比ヶ浜の応援にも小町の心は折れたままだ、虚しい励ましだ。

小町は理解している。スコアが上がるほど、その差は絶対的であると。後、１０点少ない。

「でわ～、わたし行きまーすねー」

そんな沈んだ空気の中、唐突に発せられる声に一同が振り向くと、あやねること一色がボールを構えアドレスに入っていた。

一色の流れるような美しいアプローチから放たれたボールは、右寄りのスパットからフックし1番3番ポケットへ。ボールは吸い込まれるように全てのピンを鮮やかな音色とともに薙ぎ倒す。

八幡と同じストライクだが、一色の投球は誰が見てもプロのソレだった。

「せーんぱい」

呆然とする八幡は、ふいに掛けられる声に我に返ると一色が満面の笑みを浮かべていた。
「わたしの平均スコアは２４０です」
「……は？」
その光景は小町には、イタズラをする悪魔の前に降臨した大天使の姿に見えた。
そこからは一色のワンサイドゲームだった。
八幡も必死に食らいつくも差は開くばかりか、一色のアドバイスによって小町にも追い上げられ、由比ヶ浜のエロスに目を奪われる。
その結果。

ゆいゆい	１０５
こまちゃん	１７６
ヒッキー＆先輩	１７３
あやねる	２５０

「いろは様のかちー！ささ、なんなりと、ご命令してください～」
八幡にも僅差で勝ち上機嫌な小町、様付けである。
「おい、無茶な命令は聞かんからな」
最後の切り札、防波堤、これがあるから、どこか余裕をみせていた八幡。
しかし、一色はニタァと笑みを浮かべて、その命令権を行使する。
「では、小町ちゃんを借りますね～」
捻くれた考え方は、捻くれ者には通じない。小町への命令、八幡の切り札も抗議も通用しなかった。

比企谷八幡と由比ヶ浜結衣のラブラブ＆ドキドキな一時間　ラブラブ編

小町と泣く泣く別れた八幡は由比ヶ浜と共に千葉中央駅に向かう。
昼間の千葉中央駅は人通りも多くなり、昼食を食べるため駅内のファーストフード店は込み合っていた。
一色は小町とサイゼに行くらしく、そのチョイスに八幡は『やりおるな一色！』と心の中で評価した。
東口から出てジョナサンにするかと思っていると、ふいに由比ヶ浜が行きたいお店があると言うので任せることにした。
由比ヶ浜について行き大通りを避け、喧騒の少ない裏通りを歩く。
由比ヶ浜はお店について優美子から聞いただの、ビスマルクがなんだの楽しげに話している。
あの水族館以来、由比ヶ浜と話し合う機会が作れなかった八幡は、自身の性格に軽く落胆する。
二人でこうして一緒にいる時間をくれた一色に悔しいが、ほんの少し、本当に、ほんの少し感謝をしつつ由比ヶ浜に話しかける。
「なあ、由比ヶ浜。……話がある」
「……うん」
八幡は由比ヶ浜の返事を聞くと、近くの小さい公園に向かうとベンチに座る。由比ヶ浜も隣に座り口を開く。
「ゆきのんのこと…？」
「……いや、俺とお前のことだ」
八幡の返答に由比ヶ浜は肩をビクッと震わせる。
雪ノ下の問題も重要だが、八幡はするべきことは分かっている。ただ解決に至る道筋が定まっていないだけだ。
由比ヶ浜の問題は道筋すら定まっていない、考えても考えても思考の渦に呑まれ、行き着く場所の手がかりすら見えない。
そして、この二つの道筋は同じ答えであり、由比ヶ浜の問題を解決できなければ雪ノ下の問題も解決できない。

結局、八幡は自分が二人をどう思ってるのかが分からないのだ。
「由比ヶ浜の抱いてる想い…。その、なんだ…、勘違いなら笑ってくれてかまわないんだが…」
「勘違いじゃないよ」
問う想いに明確な答えを返す由比ヶ浜。その声は真っ直ぐで今までのように濁すことはない、どんな答えでも結果を受け入れる覚悟を決めているのがわかる。
八幡はその答えを持ち合わせていない。ただ、由比ヶ浜には自分の今の気持ちを素直に伝えることが彼女の想いに対する真摯な態度なのだろうと思っている。
「俺は由比ヶ浜のことを大切に思ってる。ただ、それがどんな感情なのか言葉にできない。わからないんだ……」
「いろはちゃんが言ってた、ヒッキーは恋をしたことがないってさ」
「一色が…？」
「うん。よくわかんなかったけど、そうだって言ってた」
八幡には一色が何故ここまで協力的に動くのか理解できなかった。
この場を作ったのもだが、部室の微妙な空気を変えたり、デートに付き合わされた時も人との付き合い方を教えているような発言が多かった。
そう考えると、デートと言うよりアレは授業だった。それと『女の子に呼ばれてほいほいついてきちゃうあたり、マイナス５０点です』
あれは雪ノ下と由比ヶ浜へもっと真剣に向き合えと言ってたのだろう。
そこまで考えて思考が脱線していることに気付き、心の中でため息を吐くと思考を切り替える。
「その通りだ、俺は心が理解できない。…違うな、理解したくない、と思っていた」
「どうして…」
「基本的に嫌われてきた人間だったからな…。嫌ってる人の心なんて知りたくないだろう？」

「……」
由比ヶ浜は酷く辛そうな顔で八幡を見つめる。
負の感情を向けられるのは辛い、それは理解できる。しかし、由比ヶ浜は嫌われる感情は受けたことがない。
交通事故の際、お菓子を持って比企谷家に行った時に、その感情を向けられる想像をしただけで足がすくんだ。それが基本の生活がどれほどか想像つかない。
「…俺は悪意を向けられるのは慣れてるが、好意を向けられる経験がない。……いや、好意だとしても信じられない。期待して裏切られる…あの辛さ……ほど…辛いものは…ないだろう、と思える…から」
嘔気を催しながら続けられた言葉は八幡から自虐的に聞いた過去の本来の気持ちだ。
「だから人を信じられなくなった…。信じなければ裏切られることもないからな……」
「ヒッキー……」
由比ヶ浜は、八幡の膝に置いてある手に自身の手を乗せて優しく包む。それに八幡は少し肩を震わせた後、隣にいる哀しそうな顔をした少女に首を振り顔を綻ばせる。
「でも、お前と雪ノ下なら信じられる、…信じたい、と思った。どんな結末になろうと、お互いを信頼し合う関係を求める。あれから随分経っちまったけど、これが俺の本物だ」
人を信じない性格から生まれた思考、人間性、アイデンティティー。それを崩壊の危機に晒しても欲しかったもの。
その妥協した考えから求める願い、それは欺瞞かも知れない。二人を失いたくないその願いは、雪ノ下と由比ヶ浜の気持ちを無視した傲慢な考えだ。
「ヒッキーがどんな結論を出すのかわからないけどさ、それが真剣に悩んで出した答えだとわかるから…。あたしはどんな答えでも受け入れる、ヒッキーを信じてるから」
そう言って由比ヶ浜は、包んだ手に力を込めると笑顔を溢す。
「ありがとな、……結衣」

「ふえ?っえええええ!?…っとっと」
　由比ヶ浜はギャグ漫画よろしく、ぴょんと跳びはねてたたらを踏む。
「あ、いや、嫌なら戻すが…」
「う、ううん!いいよ、全然いいよ!むしろ推奨だよ!……えへへ、結衣かぁ」
　頬を手で押さえて首をふりふりして見悶える、その仕草が自身の言葉一つの結果だと考えて〝恋〟は計算の出来ない理由が理解できると八幡は思う。
「じゃ、飯食いに行くか」
　八幡は照れを誤魔化すように言って、ベンチから立ち上がって由比ヶ浜のバックを取る。
「うん!へへ、ありがと」
　由比ヶ浜は、はにかみながらバックを受け取り歩き出す。そして、少し思案したかと思うと決意したように「ねえ、提案があるの!」と言う。
「こ、恋人になってみない?一時間だけ…」
「は、はあ!?」
「いや、擬似的でも体験すれば何か分かるかも知れないし。……ど、どうかな?」
　八幡は擬似的なんて言葉知ってたんだな、と思いつつ由比ヶ浜の提案について考える。
　知らないから分からないのだから経験してみれば良い。その通りだ、由比ヶ浜の提案としては利にかなっている。自転車も何度も練習して乗れるようになるのだから。だが、そうなると疑問もある。
「その…、結衣は付き合った経験とかあるわけ?」
「え!い、いやー…ないけど…」
「ダメじゃん!」
　そう、ダメじゃん!である。
　原始人に自転車を渡しても使い方が分からないし、教える側も原始人では話にならない。二人してウホウホ言いながら、マンモス狩りに

使うだけだ。
「でも、恋人がどうするかとか知ってるし…ダメ、かな？」
しかし、それは恋人の行動であって恋を知る手段ではない。一色とのデートと一緒の理屈で、恋をした後の振る舞い方を学ぶだけに過ぎない。
それは、由比ヶ浜の願望であって八幡の求める結果は得られないだろう。
「断るとは言ってない、俺のできる範囲でたが、お前の希望は叶えてやりたいからな」
そう言って八幡はおずおずと手を差し出す。
「こ、恋人は手、繋ぐんだろ？」
「！…うん！」
由比ヶ浜は曇った顔を晴らし八幡の手を取り指を絡める。
「ちょ、おま」
八幡は、その柔らかく、しなやかな手の感触に心臓が破裂しそうになり抗議の表情で訴える。
「恋人の繋ぎ方だもん、仕方ないね！」
あっけらかんと言われる言葉に、由比ヶ浜は〝自称卑怯な子〟だったと思い出し、これから一時間無事でいられるのか不安が過るのだった。
その後、少し歩くと目的のお店に着いた。
窯で焼かれたピザが売りのイタリアンレストラン。三浦オススメだけあって外装もオサレ、店内の照明も控え目でムードもある。
そして、八幡はカップルシートなる神話上にしか存在していない筈の席に向かう。カップルシートなだけあって由比ヶ浜は対面ではなく隣、しかも手も恋人繋ぎを維持されたまま、由比ヶ浜の匂いの追加効果で八幡は瀕死状態だ。
ビスマルクとホタテのカルパッチョを注文して、八幡と由比ヶ浜は15分ほど談笑してる。
心なしか甘えた声で「ねぇ、ヒッキー」など聞こえてしまうのは、リア充フィルターのせいであろうかと考えるも答えは出ない。分かる

のは、ムードある店内で頬をほんのり赤く染めた由比ヶ浜が隣で幸せそうに微笑んでいることだけだ。
もうドイツ戦艦の方のビスマルクが来ないかな…、と瀕死八幡は思いながら現実逃避しつつ野菜のピクルスを食べる。
「とべっち行きたいとか言ってたから来てたりして」
「…ないな。来てた場合、うるさいからすぐ分かる」
だねー、と満面の笑みで友人をディスる由比ヶ浜。
そんなことを話してたらビスマルクとホタテのカルパッチョがテーブルに届く。
ビスマルクは中央に半熟タマゴが鎮座し、チーズ、アスパラ、ベーコンなと具材がちりばめられて芳醇な香りを放つ。ホタテのカルパッチョは対照的に爽やかな見た目の品のある仕上がりをしている。
「おお…、すごいな」
「おいしそう！…あたしも作ってみようかな？」
……。
「……写真、撮るんだろ？」
「なにその間!?」
結衣ちゃんショック！と抗議するが、すぐ困ったような顔で思案する。写真を撮るなら両手を使わなければいけないのだ。
「……食事終わったらな」
「うん！」
そして写真を撮り始める、この世の可愛いを集めたような由比ヶ浜を見て八幡はふと思い出す。
『……先輩もちゃんと参考にしてくださいね？』
八幡は断腸の思いで決意して手を挙げる。
「しゅ、しゅいませーん、カメラお願いして、もいいですか？」
噛みはしたがミッションコンプリート。
由比ヶ浜は一瞬ポカンとするも、店員が来ると花が咲いたように笑顔を見せ携帯を店員に渡す。
店員が「撮りますねー」と言うと八幡の腕に掴まり体を密着させる。
八幡は柔らかいのといい匂いと腕から伝わる可愛いの集合体の心音

で、理性の化け物が旅支度を始めるのを必死に抑えて耐えしのぐ。
撮り終わると、由比ヶ浜は店員にお礼を言い写真をチェックする。二人とも真っ赤に顔を染め、八幡のアホ毛の先端に白い何かが出ている。湯気かな？
「ありがと、ヒッキー」
「お、おう。じゃ、食うか…」
携帯を宝物のように触る由比ヶ浜に照れながら応え、ピザカッターで切り分けると芳醇な香りが漂う。
八幡に必要なのは言葉じゃない、回復アイテムだ。そう思いビスマルクを口に入れる。
――窯でパリパリに焼かれた生地とチーズのとろける食感と半熟タマゴが合わさり口の中で踊るように広がる。それに気にしていたトマトはバジルのおかげで問題なく味わえる、流石イタリアソース。それと…これは！ジャガイモか！…なるほど、濃い味の中にさっぱりとしたジャガイモの風味。戦場に咲いた一輪の花のようだ…。旨い！旨いぞおおおお!!
「ヒッキー。あたしも…」
そう言って口を開く恋人。
由比ヶ浜のバトルフェイズは終了してなかった。八幡はライフを削られると分かっても恋人として対応せざるを得ない。
手にあるピザをそのまま口に運べと言っているのだろう。
それはやはり正解らしく、もきゅもきゅと八幡ピザを美味しく食べる恋人。
「へへへ…。ヒッキーも」
由比ヶ浜ドロー！ビスマルク！
あ～ん、と恋人が言う。もうやめて！とっくに八幡のライフはゼロよ！
「あ、あ～ん…」
八幡は逃げることは出来ない。だが、それは言い訳だ。
八幡も男だ、実は少し憧れてたのだ。
……しかし、それを許すほど世界は八幡に優しくない。

「ひゃっはろー、比企谷くん」
黒を基本とした上品な服の美少女。
明るい声で話しかけてくるが、目だけ一切笑ってない雪ノ下陽乃がそこにいた。

比企谷八幡と由比ヶ浜結衣のラブラブ＆ドキドキな一時間　ドキドキ編

雪ノ下陽乃、この場で合いたくない人断トツ一位との遭遇。
八幡は思考が完全にフリーズし、ただ雪ノ下陽乃の呑み込まれそうな瞳を見つめるだけ。
ボトリ…
由比ヶ浜も同じく思考停止し、持っていたピザを落とす。
その音に八幡は自分の首が落ちたよう錯覚して首を触ると、陽乃はその姿を嘲笑う。
「別に気にしなくていいのよ～？続き、どうぞ遠慮なくしてもらって」
「い、いや、これは…」
八幡は追い付かない思考で漏らしそうになる言葉を抑える、ここで言い訳をすれば二度と由比ヶ浜の気持ちに向き合うことは出来ないから。
そして、二人は自然と立ち上がると陽乃と視線を合わせる。見下されるような視線から逃れるために。
「これは、あたしがヒッキーに頼んだの。だからそんな関係じゃ…その…」
陽乃は由比ヶ浜をその黒い瞳で見定めるとニヤッと笑う。
「へぇ…。なんでそんなこと頼んだのか知りたいな～」
問われて由比ヶ浜は瞳に呑まれたように、まるで機械の如く口を開く。
「それは、あたしがヒッキーのこと――」
「由比ヶ浜!!」
八幡の声に由比ヶ浜は我に帰ると自分が言おうとした言葉を思い出し青ざめる。
大好きな人へ伝える一番大切な言葉。それをこんなムードもない場で、しかも言い訳に使おうとし、それも目の前の不敵な笑みを浮かべる人に使おうとした。

由比ヶ浜はふと陽乃を見る。その笑顔には、はっきりとわかる言葉が添えられていた。
――あと少しだったのに。
口を押さえ由比ヶ浜は震える。そんな光景を目の当たりにしてさすがに八幡も理解する。
雪ノ下陽乃は由比ヶ浜結衣のことが邪魔なのだ、潰したいのだ、徹底的に壊したいのだ、と。
それを理解すれば自ずと答えが見える。
八幡は陽乃に向き直る。
「俺は雪ノ下も由比ヶ浜も大切なんですよ。どちらか一方を切り捨てることは絶対にできない」
張り合うように本心を隠して接してきた八幡の陽乃への対抗手段。それを捨てることは八幡の敗北を意味する。
「ふ～ん、そうなんだ」
その言葉に対する返しが異様に軽い。まるで興味が無いように、張り合うつもりも無かったように陽乃は平然と応える。
その軽過ぎる言葉は『空虚』と言う言葉が相応しかった。
「でも、二兎追う者は一兎も得ずって言うよね？」
そして再度探るような言葉を投げかける陽乃に困惑する八幡。
「……それは考えなしに行動した結果ですよ。ちゃんと考えて行動すればいいだけです」
その絞り出した主張に陽乃は冷ややかな目を向ける。
「考えてる間に逃げられなきゃいいけどね～」
「……どういう意味ですか？」
感情の抜け落ちた声で発した言葉の意味が八幡にはわからず問う。その問いに、陽乃は目を細め少し思案すると困ったように眉を八の字にする。
「雪乃ちゃん言ってないんだね」
由比ヶ浜は親友の名前が出たことで俯いていた顔を上げ八幡と目を合わせると首を振って否定する。
二人とも聞いていないことを確認した陽乃は「まあ、これは仕方な

いかな～」と軽い感じで前置きして答えを口にする。
「静ちゃん、転任するの」
「……は…ぁ？」
八幡は、その想定外の事実が鎌首をもたげるのを感じ喉を詰まらせる。
由比ヶ浜は平塚先生がいなくなる事実に衝撃を受けるが八幡が異様に、まるで全ての終わりのような表情をする意味が理解できなかった。
「さっすが比企谷くん、この意味理解できたみたいだね？」
「ヒッキー、どゆこと？……い、意味ってなに？」
由比ヶ浜も尋常ではない雰囲気に気圧されながらも八幡に問いかける。それに、絶望的な答えしか用意できない事実に歯噛みしながらも、その意味を告げる。
「……奉仕部が、なくなる」
「……え」
奉仕部は由比ヶ浜にとってかけがえのない場所だ。
唯一無二の親友と語り合い、大好きな人と時間を共有し、時に協力し、時に対立し、心の底から笑ったり、泣いたり、怒ったり。生まれて初めて失いたく無いと思った場所。
「奉仕部は平塚先生が作った場所だ…。だから…、先生がいない奉仕部は…」
「本物じゃない、だね」
それが、なくなる。
由比ヶ浜は糸が切れたように崩れ落ち、だらんとして深い絶望に落ちる。その姿を八幡は苦悶の表情で見ると、これ以上の重い事実を伝えることはできないと判断する。
しかし、そんな甘い考えなど雪ノ下陽乃は許さない。
「他に、まだあるよね？」
「いや、それは俺がなんとかすれば…」
言って、八幡は自分の適当な言葉に絶句する。確証もなく可能性すらあるのか疑わしい理由にすがろうとする愚かさに失望するが、言っ

てしまえば由比ヶ浜がどんな気持ちになるのか想像に難しくない。
「比企谷くんが言いにくいなら、私が教えてあげるよ～」
そんな八幡を困ったように眺めながら代わりとばかりに陽乃が言う。
雪ノ下から聞くべき内容なのだが、本人が伝えなかった。だからこれは陽乃から雪ノ下への罰なのだろう。
「新学期になったら雪乃ちゃん転校するの。もう二度と会うこともないんじゃないかなぁ？」
淡々と伝えられる終わりの言葉。
大切な場所も親友も同時に失う由比ヶ浜は、声をあげることもなく茫然自失とその事実を受け取る。
水族館の時に由比ヶ浜から背中を押され、今日も一色が切っ掛けをくれるまで行動に移せなかった八幡。動く理由が無いと行動できない受動的な性格、何時も誰かに理由を貰ってでないと動けない。
それは雪ノ下も一緒で、切っ掛けが無かったから言えなかったのだ。だから姉が、雪ノ下陽乃が、その結果を伝える。
「だから早くしてほしいの。やり方、比企谷くんなら分かるよね？」
「それは……」
その〝やり方〟は八幡が真っ先に思いついた、八幡らしいやり方。簡単で効率的な、たった四文字で済む解決案。
「……ヒッキー？それって…」
「……」
由比ヶ浜は考えることができず、そう聞いてしまう。八幡は答えられない、思いついても口に出すことが出来ない解決案を。
だから代わりに陽乃が応える。それが八幡が負うべき罰なのだと言うように、躊躇いも迷いもなく。
「私と同じことをすればいいだけ」
「え……」
「つまり、雪乃ちゃんを突き放す。比企谷くんの場合は捨てる、かな？」
八幡が雪ノ下に『さよなら』と言えば解決する。

八幡に出会う前は陽乃という依存先が近くに居たから反発しながらも影響されてたが、八幡は近くに居ないのだから影響を受けることはない。そして、転校先で新たな依存先を雪ノ下が見つける可能性は無い。

雪ノ下の中で八幡は絶対であり正しい全知全能の存在なのだから、そんな人の代わりになるのは『神』以外は存在しない。

だから、雪ノ下は転校先で自分で考えて行動するしかなくなる。

「ヒッ…キー…、やだよ…そんなの…」

しかし、この解決案では八幡の本物は得られない。そうなれば雪ノ下は元より、由比ヶ浜も八幡の側にいられなくなる。

それを由比ヶ浜も感じ取ったのだろう、今にも泣きそうな瞳で八幡に訴えるように漏らす。そんな由比ヶ浜の頭に守るように手を乗せて応えると、陽乃に感じてた違和感の正体を探るように問いかける。

「……それは雪ノ下さんの望む答えですか？」

「わたしの意見は関係ないでしょ？」

「そうですか……」

これは雪ノ下母の望む答えなのだ、陽乃は別の答えを望んでいる。その予想を後押しするかのように陽乃の瞳は心なしか和らいでいるように思える。

「ところで今日、小町ちゃんの誕生日だよね？君がすっぽかすなんて考えにくいけど…、もしかしてフラれちゃった？」

だからガハマちゃんと遊んでるんだ～、と心にもないセリフを口にして話を変える陽乃は、いつもの強化外骨格スマイルを付けていた。

これ以上の追求はさせないと言っているのだろうが、八幡としても好都合だった。

感受性の高い由比ヶ浜はこれ以上、重い空気に当てられると本当に壊れてしまうだろうから。

「小町は一色に拉致されたんですよ。食事が終われば連れ戻しに行きます」

「……いろはちゃん？……そう」

八幡は軽口で返したつもりだっが陽乃の反応は衝撃的だった。

陽乃と一色の間で何があったのか、その『困惑』の表情が何を示してるのか理解できないが、それより一色の名を出した瞬間に一瞬だけ瞳に浮かんだ感情を八幡は見過ごさなかった。
その感情は八幡だからこそ見過ごさなかった。おそらく雪ノ下雪乃も見たこと無いかも知れない、誰も見たことないのかも知れないその陽乃に似つかわしくない瞳の色。
奉仕部が終わって八幡が自転車で学校の帰りにすれ違う女子からよく向けられる瞳の色、『恐怖』の感情を。
「それじゃあ、そろそろ帰ろっかな？言いたいことも伝えたし、小町ちゃんによろしく伝えといてよ～」
「はい」
「早く結論出してね、あまり時間ないの。忘れないように」
「……はい」
よろしい！と言って踵を返し帰る陽乃を眺めると二階があることに気付いた。
八幡は超魔王がすぐ上で食事していた事実にぶるりと身体を震わせ由比ヶ浜の頭に置いた手を離して席に座る。
「……とりあえず食うか」
「……うん」
それから少し冷めてしまったビスマルクとホタテのカルパッチョを食べ、店を出る。冷めても美味しかったのが二人の沈んだ心に多少の余裕を取り戻してくれた。
それから店を後にしてサイゼに向かう。お互い手を繋ぐ気分なわけがなく無言で歩いているとスクランブル交差点を過ぎたところで
「あのさ、ヒッキー」と由比ヶ浜が話しかける。
「実は1つ、ヒッキーの気持ちを確かめる手段思い付いてたの…」
「……えっ」
由比ヶ浜は言えなかった。その手段ならおそらく八幡の気持ちが誰に向くのか、誰を特別だと思うのかを八幡が認識してしまうだろうと思ったから。
それが誰なのかは、わからない。由比ヶ浜が予測できる感情で動い

ていない八幡の心は一般的な恋愛観に当てはめることはできないだろうから。
　でも、だからこそ由比ヶ浜は選ばれないのだろうと思った。だから、せめて少しの間だけでも夢を見たかった、手を繋いで、写真を撮って、食事をする、仮にでも恋人として八幡の初めての感覚を貰った。
　卑怯なやり方だ、だからその罪を陽乃に裁かれたのかも知れない。
　由比ヶ浜は小さく息を吸って、償いも込めて優しい口調でその方法を口にする。
「先生、さいちゃん、川崎さん、優美子、姫菜、隼人くん、とべっち……後、いろはちゃん。他にもいるけどすぐ確認できるのは、こんなところかな？」
「…確認って何が？」
「ヒッキーのこと嫌いじゃない人」
　葉山は違うだろ、と八幡は思ったが、嫌いと言われても普通の嫌いとは一緒には出来ないので言わないでいると由比ヶ浜は「でね…」と付け加えて本題を話す。
「直接本人にヒッキーのこと、どう思ってるのか聞いてみて」
「え！やだよ、恥ずかしい…」
　八幡じゃなくても恥ずかしい方法だ。しかし、即答で拒否するも由比ヶ浜は譲らない。
「嘘告白までしておいて恥ずかしいもないよ」
「うっ……」
　それを言われると弱い、と思いながらも素直に快諾できないでいる八幡を後押しするように話す。
「嫌いな感情に違いがあるように、好意的な感情にも違いがあるんだよ。人それぞれヒッキーに向ける感情に違いがあるから、その違いが分かればヒッキーが相手にどんな好意を向けてるのか分かる」
「……」
「最後、あたしに聞いて欲しい。それで分かると思うから……」
　好意の指標。
　それに八幡の感情を当てはめていけばいい。

そして、信じている由比ヶ浜の八幡へ向ける特別な感情を八幡は疑わない。その感情が誰に向くのか、誰も該当しないのか。いずれにしろ理論上、答えは出る。
「わかった…やるよ…」
ガックリ肩を落として覚悟を決める八幡。
「でも、その前に雪ノ下の問題が先だな」
「うん…」
雪ノ下の依存体質は自信の無さから来るものだ。だから八幡と由比ヶ浜が雪ノ下の行動を認めていけば自と解決して行く。
そして、その先に由比ヶ浜同様、気持ちの問題が出てくるのだから八幡は悩んでいた。
だが、時間が条件として追加されたなら早く依存体質を解決させる必要がある。雪ノ下でしか解決出来ないような、そんな問題を探さなくてはならなくなった。
「とりあえず雪ノ下に聞いてみないと…って、聞いて分かることなら雪ノ下が解決してるか…」
「ゆきのんの家のことだよね」
雪ノ下家の問題は雪ノ下しか解決出来ない、母の決定が絶対な雪ノ下家。陽乃ですら逆らえない母を雪ノ下の正しさで説き伏せるような姿が想像できない。
そんなことを考えながら歩いているとサイゼについた。
八幡が店内に入ろうとすると由比ヶ浜が「ちょっと待って」と呼び止めてきたので振り返る。
「ゆきのんの問題が解決するまで前の呼び方に戻して欲しいの。…あたしがゆきのんの立場なら、なんか焦ると思うし。それに…」
そう、悲しそうにそう答える由比ヶ浜の言葉の続きは言うまでもない。
八幡は陽乃とのやりとりで前の呼び方を使った。陽乃を刺激しないために仕方ない選択とは由比ヶ浜も分かってはいるが、裏を返せば、まだ公に呼べる域に至っていないのだ。
「ああ…わかった」

「待ってる」
八幡は由比ヶ浜を待たせてばかりだな、と心の中でごちた。

店内に入ると二人は一色と小町を探す。
「おーい！結衣ー、ヒキタニくーん！こっちこっち！」
そのウザい声のする方を向けば、ブンブンと手を振る戸部と、いつもの爽やか笑顔の葉山が居た。
「！な、なんであいつらが！」
席には背を向けて後ろ姿しか確認できないが一色と小町が同席していた。
「あ、せんぱーい」
八幡へ振り向いた一色は任務完了とばかりにニヤリと笑う。
「お兄ちゃん、おっそーい！」
小町はナチュラルメイクで少し大人っぽくした顔で、ぷりぷりと頬を膨らましながら、あざとい抗議をしてくるのだった。

戸部回

小町はサイゼに行き、食事をしながら総武高校の話をしたり流行りの話題などを一色から聞いた。

小町は一色が入り浸る前の奉仕部の出来事など中心に話していた。

そして、食事が終わると一色から誕生日プレゼントとして化粧品を貰ったのだが、小町は化粧など詳しくないので一色からレクチャーがてら化粧をしてもらう。

小町も女の子だ、化粧で大人っぽくなった自分を鏡で確認すると感激した。そして、新しいワタシにぴったりの仕草を一色から教わりながら過ごしたのだ。

その最中に二人を見かけた葉山と戸部が来て会話に加わった。

「どう？お兄ちゃん、普段と違うワ・タ・シ。見間違えた？」

「……」

上目遣いで聞いてくる小町に八幡の思考は止まった。まるでカカシのように微動だにしない。

「妹ちゃんイケてるっしよー。男子虜っしよー」

「戸部先輩の意見はともかく。先輩と血の繋がりがあるとは思えないよ～」

ありがとうございますー、ときゃぴるんとお礼を言う小町。そのお礼は、虜にできることか、血の繋がりの否定なのか分からないがどちらにせよ小町は一色の影響を受けていることは疑いようはなかった。

小町と一色はまるで姉妹のように仲良く話して、戸部が合間合間に会話に入り由比ヶ浜は若干引きつつその輪に入っている。

それを八幡は遠い目で眺めながら小町の変化に、これからどう接していけばいいのか思いにふける。

「比企谷は何をしてたんだ？」

すると、隣で八幡と同じく輪に入らずにいた葉山がそう聞いてくる。

「なんでもいいだろ、そんなこと」

「そんはこと、とは思えない気がするが…言えないことか？」

葉山は八幡と由比ヶ浜の様子が違うことを察したのだろう。
「……雪ノ下さんに捕まってたんだよ」
「それは……、悪いことを聞いた」
申し訳なさそうに返す葉山の言葉には重みがあった。
そんな葉山の苦労に比べると、まだ恵まれているような気がして八幡は少し可笑しく思えた。
「でも、悪く思わないでほしい。……陽乃さんも君に期待してるんだ」
「わかってるよ」
陽乃から聞いたことは知るべき現実だったから悪く思う理由がない。ただ間が悪かっただけだ。
そんなことを考えて、ふと由比ヶ浜を見ると彼方も八幡を見ていた。
「ヒッキーと隼人くん、何気に仲いいよね」
「おいやめろ。邪教のメガネ女子を喜ばせるだけだ」
『はやはち』
邪教の教えは業が深い。
「ははは、そうだな。俺もこの件についてはコメントしないでおこう」
葉山は苦笑いで言うと由比ヶ浜も困ったようにしながらも追求は止めたようだ。
そんな中、戸部が思い出すように邪教…邪教…と呟いていると突然、声を上げる。
「あー!そうそう、聞いて聞いてよー。ここに来る前に総武の女子に声かけられたんよー」
バッと立ち上がり言うと、葉山も「ああ、あれか…」と困ったような顔をする。
「でさー、葉山くーん葉山くーんって言ってくるわけよー」
女子は二人だったらしく葉山を休日に見かけた女子は案の定、一緒に遊ぼうと言ってきた。たまにあるらしいが葉山と戸部はサッカーの備品を買いにきていたので断った。
それを聞いた一色は気まずいようにしていた。前は一色が備品を買っていたので申し訳ないと思ったのだろう。

他にもマネージャーはいるのだから一色のせいでもないし、むしろ今まで買いに行ってくれてたことに感謝してもいいくらいだ。八幡はそんな一色の姿に評価を一段階上げた。

葉山も八幡と同じような感想を抱いたらしく優しく声をかける。

「いろはは今まででも十分頑張ってたさ、感謝してるよ。ありがとうな」

そんな葉山の言葉に一色は「葉山せんぱーい」と笑顔になるが口元は不適に歪む。八幡は計画通りと言わんばかりの表情に、なんかイラっとしたので評価を一段階下げた。

「したらさー、今度はおっさんが声かけてきたんよー」

「あれは参った」

すると戸部は背筋を伸ばし目細めてキリッとしたウザい顔をする。

「葉山さんでよろしいですよね？貴方は葉山教の教祖だと聞きましたが。新興宗教だと思いますが少しお話を…って言われたワケよ」

「え!?」

おっさんは由緒ある寺の僧侶で、最近の新興宗教にはカルトや邪教と言われる類いのものが問題になることが多く宗教全体のイメージを低下させることを懸念しているのだとか。

そこに少僧正から葉山教なる宗教の話をコーヒーショップで聞いたのだとか。

よくある話だ。

戸部のモノマネは完全にスベったが、内容を葉山が分かりやすく説明して小町や一色は、それは大変でしたねー、と言い、由比ヶ浜は口を押さえ目を見開いて驚き、八幡は腹を抱えて笑った。

「あれ？結衣？なんか知ってんの？」

「結衣？」

由比ヶ浜の意味深な反応に葉山と戸部が反応し、そう聞く。

「いやー、し、知らないかも…」

由比ヶ浜は瞳をさ迷わせてそう言うが葉山は当然だが戸部も訝しげな目で見てくる。

「原因、戸部先輩じゃないですか？」

唐突に一色から出る〝戸部原因説〟に当の本人は首を傾げると「え？どゆこと？」と尋ねる。
「戸部先輩が言い出したんじゃないかと」
「え？俺、そんなこと言ってないよ？」
戸部が言い出した、そんなことあるわけないと否定する戸部。当たり前だ、犯人は目の前にいるのだから。
「や、戸部先輩ってよく神、神、とか言ってるじゃないですかー。だから葉山先輩を神とか言ったりとかして、その場のノリで葉山教とか言ったんじゃないかと」
「へ？あー…いやー、言ってないと思う…んだけどー…」
「出た思う！戸部先輩が思うって言った時、大体違うじゃないですかー！」
は～やれやれと言った風の一色に戸部は「うっ」と言いながら、たじろぐ。
「言ったのかなぁ？いや～でもなー……」
「どうなんですか？」
ジッーと一色に見つめられながら、うんうん悩む戸部。悩んでも言ってないのだから分かるはずもない、だから戸部の答えは決まっている。
「俺、かも……っべー…」
「やっぱり！」
何故か戸部を咎めるように勝ち誇る一色、対する戸部は立ち上がった時とは打って変わって肩を落として席につく。
しかし、ここでまさかの追撃が来る！それは勿論、一色だ。
「戸部先輩、葉山先輩に何か言うことはないですか？」
戸部は一瞬だけキョトンとたが、一色の言葉の意味を理解して葉山に話しかける。
「ごめーん、隼人くーん！俺だわー、俺のせいだったわー」
「い、いや、戸部がそれでいいなら俺はかまわないが…」
葉山は愛想笑いで応え、困ったようにため息を吐く。
「うわー、やっぱ優しいわー、隼人くんっべー。っべーわー、海原だ

わー」
　戸部は目を輝かせて感謝するが葉山は微妙な表情だ。
　由比ヶ浜はそんな光景に唖然としながら、ふと一色を見ると真犯人はひっそりとサムズアップで返す。
　八幡は腹を抱えて笑い続けるが次の一言で現実と向き合うことになるのだった……。
「さすがはお姉様です」
「さすおね!?」
　それともビリビリ!?その方がタイプだよ？と八幡は衝撃を受けながら目を見開き一色と小町を交互に見やる。
　すると常盤台の劣等生、一色いろはは困ったように小町を見ながら八幡を指で指す。
「こまちゃん？あの人と同じ並びはやだよー」
「そ、そうだ！俺も人を指で指す奴と一緒は嫌だぞ！」
　二人からの抗議を受けた小町は手をぽんと叩き「そうですね」と言って八幡に目を向ける。
「では、八幡さんで」
「小町ちゃん？泣くよ？きっと気持ち悪いよ？俺。いいの？」
「もう！冗談だよ、じょーだん。やれやれ…」
　ほっぺを膨らませてそう小町は言うが、その目は遠くを見ていて八幡は冗談に思えなかった。

「じゃ、俺らはそろそろ行くべ。な？隼人くん」
「そうだな」
　それから少しして葉山と戸部がそう言って席を立つ。
「また学校で、小町ちゃんは新年度からかな」
「いろはすぅ～、たまには部活来てくれよ～」
「あ、とべっち」
　二人が帰ろうとすると由比ヶ浜が八幡に目配せして戸部を呼び止める。
「ヒッキーのことどう思ってるか聞いていい？」

「お、おい」
由比ヶ浜のホモホモしい聞き方に焦る八幡だが戸部はニカッと笑ってサムズアップして答える。
「当然、好きっしょー。リスペクトしてるしなー。ライバルだけど！」
そして、負けねーから！と力強く言って葉山と一緒に店を出て行く戸部であった。

そして歯車は噛み合い、されど動かず。

戸部は八幡の嘘告白を疑いもせずライバルと認識しながらも、勝手に戦友の絆みたいなのを感じてるような感じだった。

これも好意と言えば好意なのだろうが、嘘を基本に認識した好意だ。

しかし、由比ヶ浜が言うには戸部はあの性格だから嘘が無くても変わらず八幡を認めているだろうと言われて、そうだろうなと思えた。

八幡の戸部への感情は多分、材木座と同じだと思うと言ったら由比ヶ浜からそれはさすがに失礼だと言われ。八幡は、材木座に失礼なのでは？しかも聞く対象に入れてなかったよね？忘れてたでしょ？と思ったが八幡も忘れてたのでスルーした。

例え戸部でも好意を向けらるのは八幡には気恥ずかしさがあった。そして、戸塚からの好意を受けたらと思うとドキドキするなぁ、と一人想像して悶える。

何故そんな想像をしてるのかと言うと、八幡は千葉中央駅でお店の前にあるベンチに一人で座っている。

近くの店内では由比ヶ浜と一色が小町を着せ替え人形のように連れまわしていて、八幡はコバンザメのように付いていくだけなので暇なのだ。

俺必要なくね？と思いながら三人の女の子を眺めていると小町がさすがに疲れたように八幡の元にやって来た。

次世代ハイブリッドぼっちでも、二人のリア充相手は荷が重かったご様子。

「お兄ちゃ～ん」

「ご苦労様だ」

小町はヘトヘトっと八幡の隣に座るともたれかかってきて燃え尽きたボクサーの様に項垂れる。

「タッチ」

「家に全巻あるぞ？帰るか？」

「……」

八幡は軽口にも返事を返す力もないのかと思ったが、そもそも普段からそんなに相手にされてない事実を思い出して悲しくなりながら、思考を切り上げて由比ヶ浜と一色を見る。

二人は何が楽しいのかアクセサリーをお互い手に取り、なにやら話している。遠巻きに見ればほんと二人とも可愛い女の子だと思いながら視野を広げると、周囲の男達もチラチラ見ているのが見てとれる。

「お兄ちゃんはいろはおね……いろはさんのことどう思ってるの？」

二人を眺めていた八幡に不穏な間違いをしつつ小町が塞ぎこんだまま問いかける。

「一色か……よくわからんな」

「？……なにそれ？」

「なんだろうな」

八幡は一色について自分がどう思っているのかあまり深く考えてなかった。

というのも一色は雪ノ下や由比ヶ浜と比べることはできないし、かといって困っているなら助けてやりたいとは思うくらいの気持ちはある。

共通の『本物』を求める同士とも言えるが、友情みたいな感覚はない。何考えてるかわからないし本人もあまり知ってもらおうなどと思ってないだろう。

お互い自由に自分勝手に本物を求め続ける、ほんものフレンズといったところだ。

「珍しいね。お兄ちゃん、好きか嫌いかってハッキリする人なのに」

「確かにな……。まあ…、嫌いではない」

「……変なお兄ちゃん」

一色はなにやら買い物をしてレジにいる。

小町は、そんな一色を優しい顔で眺めている八幡を見て、お義姉ちゃん候補に一色をそっと加えるのだった。

「ヒッキー、小町ちゃん、そろそろ映画の上映時間だよー」

「あ、はーい。じゃ、お兄ちゃん立って立って！」

由比ヶ浜が時計を確認して八幡と小町に聞こえるように大きな声で伝えてくると、小町は立ち上がり八幡の腕を引っ張り立たせると由比ヶ浜の方へ向かう。
「先輩の老後は縁側でお茶をすすりながらぼーっとしてそうですよね」
「理想の老後だな、そうなりたいと切に願うまである」
「へー」
八幡の理想を一色は心底興味なさそうな返事で返し、苦笑いする由比ヶ浜と小町を連れて映画館へ向かう。
「でも、先輩の周りがそれを許してくれなさそうですけどねー」
くるりと振り返りそう付け足す一色の言葉に八幡は、ヤバイです～！と言って平穏を砕く想像が容易にできた。

映画は小町の見たかったディスティニィの最新作映画。パンさんが作中特別出演で登場するとネットで話題になった作品だ。
劇場公開初日に雪ノ下が見に行ったらしく、次の日の奉仕部で雪ノ下が八幡と由比ヶ浜に熱く盛大にネタバレしてきたある意味衝撃の作品。
八幡と由比ヶ浜はシーンの合間に雪ノ下の力強く説明する光景を思い出し、感動もなにもなかった。
パンさんの登場シーンにいたっては雪ノ下の一挙手一投足を完全に再現された通りの動きだったので、パンさんより雪ノ下に感心したほどだ。
「面白かったー。いろはさんはどうでした？」
「うん。特にパンさんがインパクトあったねー」
「……ゆきのん、声まねも完璧だったね」
「ああ……。才能の無駄遣いだかな……」
二人の謎感想に一色と小町は首を傾げる。
あの雪ノ下は二人だけの秘密にしておこう、それは暗黙の了解だった。
『二人だけの秘密』親密な関係を想像させる甘く官能的なその言葉。

そのはずなのに全くドキドキしない。
「そうだ小町、パンさんについてお前どれだけ知ってるんだ？」
「え？まあ、世間一般の範疇くらいかなー」
「そうか……」
「？」
場所を駅のファーストフード店に移し映画についておしゃべりをしている。
由比ヶ浜と一色はディスティニィについて話しているのだが、分からないことは小町が答えたりしていたので八幡は期待を込めて聞いた。
以前、雪ノ下になりゆきで小町はパンさん好きと言ってしまった。
小町がパンさんに詳しければ問題なかったのだが結果は雪ノ下の言う一般常識の範囲には足らないだろう。
そんな心境の八幡など分からない小町は意味が分からない。ただ、また兄が何かやらかしたことだけは分かったが。
「小町ちゃん」
そんな小町に由比ヶ浜が声を掛ける。
「誕生日おめでとう！これ、あたしのとゆきのんのはこっち」
「あ！ありがとうございますー」
時刻も夕方、そろそろ帰る頃合いだ。由比ヶ浜のプレゼントは小さめの箱、雪ノ下のは少し大きい箱だ。
荷物になるから帰りまで渡さなかったのだろう、八幡にはできぬ心配りだ。
「開けていいですかー」
「うん。ゆきのんのプレゼントも中身気になるし」
「え…。お前、知らないのか？」
雪ノ下の判断したプレゼント。それはとても耐久性に長けた実用性のある独特なプレゼントなのだろう、八幡も気になるところだ。
「ネックレスですね！カワイイです～、ありがとうございます！」
「えへへ～、どういたしまして」
「ほーん。アクアマリンか」

「あ、3月の誕生石ですね～。結衣先輩さすがです！」
小町は早速首に付けて鏡で確認している。
でも、八幡はそれより早く雪ノ下のプレゼントが知りたくてウズウズしていた。
「じゃあ雪乃さんのプレゼントを……」
ガサゴソと開ける小町。八幡は、ごくりと固唾を呑んで見守る。
そして、全員の息が詰まる。
「うわぁ……」
八幡は雪ノ下のプレゼントらしいプレゼントについ声を漏らす。
「……ヒッキー、これなに？」
「……電動ペッパーミルだ。しかも充電式」
「あ、わたしの家の喫茶店にも似たようなのあります。手動ですけど」
胡椒を挽く機械、ペッパーミル。味に拘る料理店に必須の商品だ。
「うわー！欲しかったんですよー！雪乃さん！ありがとうございます!!」
しかし、小町は感激している。そりゃ白物家電を欲しがる変わり者だ、無理もない。
天井を見上げて感謝する小町の目には、きっと得意気に微笑む雪ノ下がいるのだろう。
雪ノ下雪乃らしいプレゼント。
「よかったな小町。雪ノ下からのプレゼントなんてレア中のレアだ、大切にしろよ」
「もちろんだよ！」
おそらく雪ノ下が人生で初めて自分の意思で選んだプレゼントだろう、プレゼントとしてはアレだが小町が喜んでたことを教えてあげたいと思う八幡だった。
雪ノ下のプレゼントにはブラックペッパーも付いており、由比ヶ浜は胡椒の実を初めて見たらしく凄く食いついた。
一色や小町も胡椒についてあまり知らないらしく八幡は得意気に胡椒の種類とか語りだして由比ヶ浜の反応を楽しんでいるといつの間にか、かなり日が落ちていた。

「じゃ、そろそろ帰るか」
「そだねー、いい時間だし」
そして、八幡と由比ヶ浜に促されるように小町と一色も席を立ち店を出る。
「一色は葭川（よしかわ）公園駅に行った方か早いよな」
「まぁ…そうですけど……」
八幡は一色の言いたいことは分かる、ナンパ通りの近くだからだ。いくら近寄りがたい美少女でも、そんな通りを歩けばナンパされるに決まっている。
「送ってやるよ。由比ヶ浜、小町よろしくな」
「え？いや、でも……」
そう言って由比ヶ浜と小町をチラチラ見る一色。
「送ってもらいなよ、ヒッキーじゃ少し頼りないかもだけど」
「小町も賛成です！お兄ちゃん、ポイント超高いよ！」
一色は二人の対応に戸惑いつつ「は、はい」と返事をする。
「んじゃ行くか」
「ヒッキー、よろしくね」
「お兄ちゃんファイトだよ！」
小町が何と戦わせるつもりか知らぬ言葉に疑問を抱きつつ由比ヶ浜に「おう、お前もな」と言って別れる。
千葉中央駅東口から出て葭川公園駅へ向かう。
一色は前回のデート同様、今日の出来事などを弾んだ声で話している。
八幡は楽しげに話す一色に、面白い返しもできないのによく喋る気になるな、と思いつつも一色の話を聞いている。
「それで、先輩はどこに行ってたんですか？」
「この近くのピザ屋だよ」
由比ヶ浜と行動してた時の話を聞かれそう答えると、あそこですか～と一色は呟く。多分戸部から聞いたのだろう。
「どうでした？」
「……まあ、なんつーの？美味しかったか？」

「…なんかあったんです？」
「雪ノ下の姉の方と遭遇してな……」
八幡は察しがいいなこいつ、と思いながら陽乃の名前をだすと一色の瞳に一瞬だけ『恐れ』の色が見えた。
「はるさん先輩と何話したんですか？」
「まあ、色々とな……。お前は雪ノ下さんと仲良かったりするのか？」
「仲良いかと聞かれましても、そんな会わないですしなんとも……」
追求されると困るので八幡は咄嗟にそう聞くと一色も察してくれるようにその問いに答える。
「やっぱ怖いか？」
「まあ、わたしと真逆のタイプなので正直苦手ではあります」
「いや、同じタイプだろ……」
八幡はやれやれと呆れ気味に言うと一色は不貞腐れたようにそっぽを向いた。
「違いますよー。…そりゃ、わたしは裏表ありますけど……、はるさん先輩には裏がないからです」
「裏がない？正直者とでも？」
「そうですよ？真っ直ぐだから、わたしの嘘も誤魔化しも見抜かれてしまうんです」
一色は進路相談会の時に平塚先生と一緒に陽乃と話していたようだった。八幡に笑顔でばいばーいとばかりに手を振ってカーテンを閉めた一色。
あの時の一色が妙な態度だったのは陽乃に何か言われたのだろう。
八幡は、その事を思い出して落ち込んだ様子の一色の頭を撫でそうになるのを堪える。
そんな事をしたら通報待ったなしだ。例え一色が許そうとも通行人が通報するだろうと思い、亜麻色の髪を睨んで右腕を左手で掴む。
くそっ！静まれ俺の右腕よっ……！
その姿こそ通報モノなのだが八幡はスキルのおかげで難を逃れる。ステルスヒッキーがなければ即死だった。
「先輩、送ってくれてありがとうございました！」

「ん？」
八幡がくだらない思考で悩んでいると、気付けば駅に着いていた。
一色は笑顔で感謝を述べて県庁前駅方面のゲートへ向かおうとしている。
「おい、一色…」
「ふぇ？なんですかー？」
あざとく、くるりと振り返り八幡に向き合う一色。素であざとかったな、と思いながらも八幡は由比ヶ浜に課せられた任務を遂行する。
「その…、お前が俺のことどう思ってるか聞いていいか？」
一色はその問いに目を見開いて驚くと、あの、その……と狼狽える。
「あ、いや、そう言う意味じゃなくて。由比ヶ浜に色んな奴に聞けと言われてだな…」
どう考えてもそう言う意味にしか取れない言い方、ひと昔前の八幡なら告白して振られただろうに一色は耐えた。
「戸部先輩に聞いてたのはそれですか…」
一色は内容を理解して納得した表情をして小さくうなずく。
そんな一色に心の中で称賛を送りながら返事を待つと、んんっと咳払いをして姿勢を正す。
『先輩……、今付き合ってる人って、……いますか？』
『年下の女の子は、……嫌い、ですか？』
あざと砲第3弾が来る！と八幡は警戒する。
一色は胸のあたりにある右手をきゅと握りしめて頬を少し赤らめ、切ないような笑顔を八幡に向けながら重々しく口を開いた。
「……はい。先輩のこと、……好き、ですよ」
それは、あざといなんてものじゃなかった。真っ直ぐと八幡に向けられた言葉は自然と心に落ちて、たまらず八幡は呆けてしまう。
そんな八幡を見て、一色はニヤリと笑みを浮かべ勝利とばかりに笑顔になる。
「あれー？先輩、ときめいちゃいましたー？」
「ぐっ……。慣れてないんだよ、こういうの」
悔しそうに顔をしかめる八幡をなめ回すように見つめ満足した一

色は「それで」と言い、八幡に問う。
「先輩はどうなんです？」
「あー。同じだ、同じ！くそっ」
「なんですかー！その投げやりな言い方!!」
投げ捨てるように言い放つ八幡に憤慨だとばかりに頬を膨らませる一色は、そう言って踵を返し駅のゲートに向かう。
「では、先輩。また学校で」
怒らせたかな？と不安を抱いた八幡だが一色は笑顔で小さく手を振って立ち去る。
その一色に手を挙げて応え、見えなくなるとふいに笑みがこぼれる。
一色の素敵な何かは、それを悟らせない強さなのだろう。雪ノ下にも由比ヶ浜にも無い完成された強さ。
それはスパイスをきかせすぎな一色に釣り合うだけの強さで八幡と同種の強がりでもあるのだろう。
「責任とってください、か……。ま、生徒会で困ったことがあれば多少助けてやろう」
そんなことを考えるも、一色は何を考えてるかわからないが自分に好意を向けてるのは間違いないと確信できた。
由比ヶ浜から言われたから信じられたのではなく、一色の言葉は正しく受け止められた。
一色の八幡へ向けた感情は八幡が一色に向ける感情と同じモノだったから。

生徒会にようこそ！

生徒会と言えば学園ドラマ、アニメ、特にノベライズのコンテンツで絶大な権力を握り、先生と対等かそれ以上の発言権を有するそんな部活だ。

そして、生徒会長といえば学園の頂点にして至極。誰からも一目置かれる人物が学園の指揮をとり、学校のイベントで常に話題を作る成績優秀な美男、又は美女で構成される華のある人物が選ばれる。

しかし、現実は甘くない。

生徒会は先生の下請け、学校イベントでは実行委員会の下請け、基本裏方。

生徒会長は学校の内申を上げるため、総武高校は指定高推奨を貰えるために雑務をこなすだけの部活だ。

そこに華はなく、生徒会も無難にこなせる生徒が選ばれることが多い。

「比企谷、そこの資料取ってくれるか？」

「おお…これか？」

「ああ、ありがとう」

総武高校も毎年、無難にこなせる生徒会長が選ばれてたのだが今年は少し違った。

生徒会室は何やらよくわからいポスターや、派手な小物など置かれ華やかと言うよりアバンギャルドな雰囲気漂う謎空間になっており、どこかにありそうな芸能事務所のような感じだ。

八幡は、辛うじて生徒会の原型を留めている折り畳み式の長机とパイプ椅子に座り、隣に座る真面目を絵に書いたような正統派メガネ男子、副会長の本牧牧人と生徒会の雑務である入学式の資料作りを手伝っている。

無論、この謎空間を作ったのは彼ではない、彼は見たまま真面目なのだ。

八幡は、その空間の奥にあるデコシール付きパイプ椅子と、お手製の生徒会長と犯人を明記した三角プレートを見て小さくため息を吐

く。
「しかし、お前も大変だな。この仕事も本来は一色がやることだろうに……」
八幡は一色を生徒会長にした責任で少し手伝ってやろうと軽い気持ちでいたが、そんな会長に振り回される副会長や書記の藤沢沙和子など生徒会部員の苦労を計算に入れてなかったことに罪悪感を感じ気まずそうに本牧に声を掛ける。
「ん？ああ、まあ大変ではあるけど遣り甲斐はあるからいいさ」
「……まあ、なに？俺もできるだけ手伝うからさ」
「比企谷も忙しいんだろ？今までも十分助けられたと思ってるから気にするな」
「いや、一色のせいで苦労してんだから手伝うわ」
本牧は資料をＰＣに打ち込む手を止め、虚をつかれたような顔で八幡を見る。
視線を感じ八幡も資料の整理する手を止め訝しげに本牧に顔を向ける。
「……突然、何？」
「比企谷……。会長と…その、付き合ってるのか？」
「はあ？なんでそうなる？」
「いや、そうとしか思えない言い回しだろ」
で？ホントのところどうなんだ？と身を乗り出して探りを入れてくる本牧は実に楽しそうだ。
そんな本牧の真面目から離れた態度にギャップとは必ず萌える要素になるわけではないと新たな初見をする八幡だが、言われた言葉から会話を思い返す。
「あー……、確かに。そう捉えても仕方ないな……」
「で！どうなの!?」
妙にいやらしい顔で食い入るように聞いてくる本牧に、八幡はギャップ萌えとウザいキャラは紙一重だと思いながら「だから違うって」と前置きをして、
「説明するけどさ、……怒るなよ？」

「怒る？この流れでどうして俺が怒る展開になるのか想像できないが……。まあ、分かったよ」
疑問を顔に滲ませつつ本牧はそう言って体勢を戻す。
「俺が一色を推奨したのは知ってるか？」
「ああ、生徒会長になった経緯は会長からなんとなく聞いている」
「じゃあ推奨しなかった場合、どうなってたか知ってるか？」
『先輩がどうしてもと頭を下げてきたから仕方なくですよー、わたし以外適切な人材がいなかったみたいですしねー』
ざっくりとした明らかな嘘の臭いしかしない一色の説明を受けた本牧は適当に聞き流していた言葉を断片的に思い出す。
わたし可愛いから、大勢の推奨者の期待、先生からの懇願、等々。
「誰もやりたがらない生徒会長に祭り上げられて調子に乗ってホイホイ立候補しちゃったのだろうと思っていたんだが……」
本牧はそう言って、これから告げられる内容に予測できる範囲の最悪な内容を想定して身構え、ゴクリと喉をならす。
そんな本牧を見据えて八幡は息を薄く吸い、罪を告白する。
「……一色が生徒会長にならなかった場合、雪ノ下がなってた」
本牧は八幡の言葉を理解できなかったのか呆けた顔をしながら指で言葉を集める仕草をしつつ整理をする。
そして集めた言葉を整理し終えて理解したのか、本牧は指を震わせる。
「……は？……はあああぁ!?意味が……意味が意味が意味がいーみぃーが！わからない！」
予測以上だったのだろう、口と目は大きく見開き真面目さの欠片もない、まるで大罪司教に憑依されたような顔の本牧。
想像したのだろう、雪ノ下の正確に作り上げられた資料と的確な指示の元で働く自分の姿を。
「ここにドーンてな感じに機材置いて……、チョコのデコも良い雰囲気のよろしくでーすとか何なんだよ……。唐突に海浜との合同料理教室とか、先に言えよ……」
今度は一色との打ち合わせを思い出しているのだろう、漏れるセリ

フはとても打ち合わせと思えない内容だが。
理想と現実、かみ合わないものである。
「おおお落ち着け本牧。いや、雪ノ下も結構スパルタよ？」
「……スパルタと理不尽、どちらが良い？」
「うっ……。す、すまん……」
優秀な雪ノ下と真面目な本牧、この組み合わせの相性は相当だ。
八幡の基準だと雪ノ下の発案はスパルタでしかないが、本牧にとってスパルタとは限らない。
現に雪ノ下のテニスの練習メニューに戸塚は応えてみせたが、八幡はスパルタと切って捨てた。
それにそもそも、雪ノ下の発案は雪ノ下陽乃をトレースした内容であって、生徒会長になった雪ノ下はスパルタとは違う別の選択を選んでいた可能性もある。
しかしこれは、八幡が奉仕部を救わなかった場合の仮定の話。
仮定の話は仮定であって現実ではない。だとしても本牧にとって衝撃の事実である。
本牧は優秀な生徒なので仮定の話が意味の無いことは論理的には分かっているが、感情的には分かりたくないのだろう。
隣の芝生が青過ぎる。
どう考えても今の環境より楽な未来しか想像できない、しかしそれでも。
「……雪ノ下さんは生徒会長になりたかったのか？」
「それは分からない。ただ、今はならなくて良かったと思っているみたいだ」
「そうか……。なら良かったのかもな、これで」
真面目な本牧といい加減な一色。
相性的に最悪な組み合わせ、一方的に本牧の精神力が磨り減る状況を容認する自己犠牲のような答えは八幡も予想外だった。
そんな八幡の驚きが顔に出ていたのだろう、本牧は苦笑いをして
「まあ、あれだ」と続ける。
「さっきも言ったが、やりがいはあるし会長みたいな性格の人と関わ

るのもいい経験だ。理不尽も多いが達成感もあるし楽しいこともある」
「そう言ってくれると助かる。まあ、そういうわけだから一色がまたなんかやらかしたら言ってくれ」
「ああ。まあ、生徒会の仕事だからなるべく生徒会で解決できるようには努めたいけどな、1人じゃないし……」
八幡は悟りを開いたような大人びた本牧の言葉に、もうこいつが生徒会長でいいんじゃないか？と感心するが、1人じゃないと言って遠い目をする本牧にニヤリと笑う。
「藤沢か？」
「ファ!?」
「書記の藤沢だよ、どうなんだ？」
「ななんだねキミは！とと突然何を言い出すんだ、さっぱり分からないよ！」
総武カンパニーの本牧会長は明確に何かを隠している、バレバレだけど。
立場が逆転した状況に狼狽する本牧に八幡が探りを入れてるとドアをノックする音が生徒会室に響く。
「牧人さん資りょ……。比企谷先輩…いらしてたんですね……」
「お、おう……」
名前呼びである。
生徒会室に入ってきたのは、先程話題に上がった書記の藤沢沙和子だ。
「比企谷は手が空いてるからと俺の仕事を手伝ってくれてててね、いやー手際よくて本当助かったよ、いやほんとビックリだね！」
本牧は誤魔化すように裏声で捲し立てるように八幡が仕事を手伝ってくれていることを、まるでろくろでも回すかのようなややオーバーな手振りを交えて話し出した。
話を聞いている藤沢は、もじもじしながら自身の三つ編みを触りつつチラチラと八幡を視界に入れているようだ。
（なんだ、この空気……）

八幡は、かもし出すラブコメの波動に動揺するが、この空気を正常に戻すほどのコミュ力もない。
だから、とりあえず冷静を欠いて玉縄化している本牧に「んん！」と咳払いして現状の打開を丸投げすることにした。
「か、会長は？」
咳払いに反応して出した答えは一色の所在。
いろえモンならなんとかしてくれる、そんな信頼にもよく似た丸投げである。
「先生と話してて……ちょっと、ね」
「へ、へぇー」
先生と話してるから一色は動けない。
藤沢の返答は本牧の望む結果ではなかったのだろう、本牧は瞳に落胆の色を浮かべてこぼすように声を漏らす。
しかし、それも一瞬の反応。
本牧は瞳に別の色を浮かべ、微かに口元を歪ませる。
「先生と話してるのは入学式についてかな？」
「多分、そうだと思うけど……」
「……そうか、なるほど」
本牧は先程とはうってかわって清々しい表情でうんうんと頷き、藤沢はその変化に疑問を顔に浮かべてる。
真面目キャラは危機的状況において必ずといっていいほど冷酷な解決案を出すのには理由がある。
――何を捨てればいい？他に何を捨てれば変えられる!?他に何を…
真面目キャラは真面目さゆえ確実に助かる最適解を選び、捨てることを躊躇わない。
本牧は逃げる気なのだ、この場から。
藤沢は几帳面な性格ゆえに自分の作り出した空気は自分の責任と考える。
そんな几帳面な藤沢だからこそ、本牧がこの場から逃げたとしても非難することはしない。

だから、八幡を見捨てれば本牧は助かるのだ。
本牧は自分の考えた解決案に確信を持ち、企みのある表情に変えゆっくりと口を開く。
「俺も入学――」
「そういや、こないだカフェから出てくる本牧と藤沢を見かけたんだが」
ここにいるのが戦士や超大型腰巾着なら逃げ果せただろう。
だが比企谷八幡は甘くなかった。
八幡は正常に戻すコミュ力はないが、壊す力には自信がある。
非情な八幡パパラッチだが先に仕掛けたのは本牧だ。
「！い、いや。あれは……」
因果応報。
本牧は逃げ道を潰されただけではなく、デートを目撃されていた事実に驚愕を隠すことなく顔に出す。
藤沢も目を見開き、口に手をあてて驚きを隠せない様子。
これについて藤沢は、とばっちりなので八幡は多少の罪悪感はあるが気にしないことにした。
「で？どうなんだ？本牧？」
「い、いや。あれ、気になってたカフェだけど男友達と行けない感じのお店だから藤沢さんに付き合ってもらったんだよ。な、な？」
何食わぬ顔で聞く八幡に嘘の匂いしかしない理由をでっちあげる本牧は最早、冷静な思考すらできてないのだろう。
そして、無理がありすぎる理由への同意を求められた藤沢は、
「……」
「……藤沢？どうした？」
藤沢は驚いたまま硬直していた。
しかし、その視線は八幡を直視したままで本牧の声も届いていない様だった。
そんな居心地の悪い視線に八幡は濁った目で見つめ返すと「ええっと……」と藤沢は含みをもたせて話し出す。
「いろはちゃんにも同じこと聞かれたんですけど、お店にも行ったっ

て。……デートの相手、比企谷先輩だったんですね」
「！い、いや。あれは……」
因果応報だった。

ほうしぶちほー

「一色のデートは利用するって意味なんだよ。世間一般のデートと同じ意味じゃない」
あれから八幡は藤沢から質問責めを受けていた。
他に何処に行ったのとか手を繋いだのとか聞かれたりしたが、うまくはぐらかしていた。
八幡も逆襲とばかり二人の関係を聞いたのだが、藤沢が友達と切って捨て、そんなことよりと好奇な顔で聞いてくる。
友達と断言された本牧のテンションはだださがりだ。
「そんなことないですよ。いろはちゃん比企谷先輩といる時、凄く楽しそうですし」
グッと拳を握りしめ、そう断言する藤沢。
「利用してんだ。そりゃ楽しいだろうよ」
しれっと答える八幡に藤沢は頬をぷくっと膨らませる。
「いろはちゃん、戸部先輩と一緒の時はあんな顔しないよ。比企谷先輩の時と全然違うもん！」
「想像してみろ。藤沢が戸部といたとして楽しくいられるか？」
「そ、それは……」
世の理だった。
言い返すことができず悔しそうにする藤沢を横目に完全論破した八幡はどや顔だ。
腹の探り合いで、純真無垢な一直線な攻めしかできない藤沢では八幡に勝てるレベルではなかった。
「会長は比企谷を利用してない。それは断言できる」
そんな八幡のネガティブ思考に攻めあぐねる藤沢を援護する本牧。
切り捨てられて凹んでるのに気丈に、何事も無かったかのように言葉を繋ぐ。
「会長は比企谷といるのが楽しいんだよ。少なくとも便利だとか利用してるとか、そんな打算的な考えで接してない」
「ほう。根拠はあるんだろうな本牧」

根拠の無い主張は妄言と同じだ。
しかし、本牧は自身の主張が妄言ではないと確信しているのだろう。
八幡の問に力強く頷き、「もちろんだ！」といい放つと、
「俺と比企谷では会長の対応が違う！」
一色に便利に使われている被害者の言葉、説得力は申し分ないものだった。
しかし、根拠としては弱い。
一色の計算で対応を変えてる可能性もあるし、受け取り側の感覚の違いでそう思ってるだけかも知れない。
だか八幡はそう言い返すことができなかった。
凹んでいるのに藤沢の力になりたいと気丈に振る舞い傷つく姿は尊い。
魔王がよろよろと立ち上がる勇者に追い討ちしない心境だ。
「そうですよ！私、副会長と一緒にいると想像したら楽しいですよ！」
「え!?」
言い返せない八幡に、ここぞとばかりに追い討ちをかける藤沢だっか、その言葉に反応したのは本牧だった。
藤沢は本牧に上擦った声で返されて自身の言葉を思い返して、そういった意味にしか捉えられない言葉に顔を赤くして「あ、あ、ち違うの！」と慌てている。
「そ、そう。ふ、ふ～ん」
完全に素で返した言葉に違うもクソもない。
本牧は先程の凹んだ気分は、きれいさっぱり霧散していた。
八幡が、そんなもじもじそわそわと落ち着かない２人を眺めていると生徒会室のドアが勢いよく開かれる。
「やっはろー！」
現れたのは由比ヶ浜だった。
「いや、お前。ノックぐらいしろよ……」
八幡のもっともな指摘に「えへへごめーん」と反省の色を見せない由比ヶ浜だが、室内を見渡して首を傾げる。

「あれ？お邪魔だっかな？」
「そ、そんなことないよ」
「はい。大丈夫です」
微妙な空気を読み取った由比ヶ浜に全力で否定する本牧と藤沢。
命短し恋せよ乙女が座右の銘の由比ヶ浜は、その反応に何かを感じて好奇な目を2人に向ける。
「もういいのか？」
「はぇ？あ、うん。おっけーだよ」
本来の目的を見失いそうな由比ヶ浜に声をかける八幡。
そんな八幡の声に由比ヶ浜はハッと我に帰る。
「じゃ、俺戻るわ」
そう言って八幡はバックを担いで席を立つと、由比ヶ浜も「じゃあね」本牧と藤沢に小さく手を振る。
「比企谷」
八幡が、生徒会室のドアを閉めようと手をかけたところで本牧が爽やかな笑顔で声をかけてくる。
「お前の手伝いは生徒会へのもので、俺個人は関係ない。だから、俺に手伝えることがあれば言ってくれよ」
副会長の立場と本牧個人の感謝は別だと言いたいのだろう。彼は心底真面目だった。
八幡は軽く頷いて笑顔の本牧と、すがるような藤沢の顔をチラッと見てドアを閉めた。
「リア充爆発しろ」
八幡はボソッとそう言って生徒会室を後にしたのだった。

★☆　★☆

生徒会室を後にした八幡の向かう場所は奉仕部である。
八幡は授業が終わり奉仕部に向かおうとしたところ由比ヶ浜に止められた。
それは、奉仕部に居るであろう雪ノ下への配慮である。

雪ノ下は奉仕部のこと、自分の転校のことを言えなかったことに責任を感じているだろう、と。
あの悪魔のような姉が八幡と由比ヶ浜に伝えたことを雪ノ下に言わないわけがない。
そんな状態の雪ノ下に2人で向かうのは酷だろうから、由比ヶ浜が先に行って話をすることになった。
八幡は由比ヶ浜の配慮に感謝した。
由比ヶ浜の配慮は雪ノ下だけでなく八幡にも配慮された結果だったのだから。
八幡は雪ノ下と対等でいたいのだ。
あのまま雪ノ下と対面していた場合、八幡は弱々しく謝罪する雪ノ下を見ることになっていただろう。
そんな由比ヶ浜の優しさに感謝しつつ、肩を並べて歩くのだった。
寒さも落ち着き始め春の訪れを感じ始める季節。
放課後の特別棟は他の生徒の気配も無く、2人の足音だけが響く。
「雪ノ下はどんな感じだ？」
「多分、大丈夫じゃないかな。ヒッキーはいつものように接してあげて」
由比ヶ浜は簡単に言ってのけるが、八幡に同じことはできない。思い付きもしなかったのだから。
八幡に由比ヶ浜のような配慮はできなのは物事を見る視点が違うからだろう。
誰も信じることができず、今までずっと自分の中で問題を整理して自分の判断のみで問題を解決してきた。
損得勘定で実行される八幡の〝やり方〟は心が無く、そのせいで奉仕部が崩壊しそうになったのだから。
あの時、八幡の手を握ってくれたからこそ今がある。
そんな由比ヶ浜だから信用できるのだろう。
「あいつ出会った頃、俺に言ったことがあるんだよ」
「ゆきのんが？」
少し歩いたところで八幡は立ち止まって話し出し、由比ヶ浜も振り

返る。
「ああ。世界を変えたい、ってな」
「世界……」
由比ヶ浜は驚きと困惑が入り交じった顔だ。
無理もない。
話の流れから雪ノ下の問題と世界の変革がリンクしてます、と言ってるようなものだ。
無論、雪ノ下は異世界チート系の訳ありヒロインではない。
「雪ノ下は子供の頃から優秀な姉、絶対の母の意見に逆らえず、常に自分の意見は通らなかった。姉や母の言われた通りに行動してるうちに自分がわからなくなったんだろう」
「う、うん……」
困惑しながら、そう返す由比ヶ浜。
由比ヶ浜が頭の中でどんな想像をしてるのか窺い知れないが、八幡はチート能力に目覚めたわけでもビーターでもない。
「つまり、雪ノ下の世界は雪ノ下家の中で完結してるんだ。……だから、雪ノ下は雪ノ下家を変えたいんだよ」
「あー！なるほど！……てこと、は」
八幡は頷いて由比ヶ浜の想像を肯定する。
絶対の母が全ての元凶であり、変えるための扉。それを開く鍵は、
「わからん」
答えはわからない。
もしかしたら世界変革より難しいのかも知れないと八幡は思ったりする。
「でもヒッキーと出会ってからゆきのん変わった。色々あったけど、きっと今のゆきのんなら変えられると思う」
「だろうな、雪ノ下はやられっぱなしを許すとは思えん」
確かにそうかも、と笑いながら由比ヶ浜は歩き出し、釣られるように八幡も続く。
「俺も変わった、お前のおかげでな」
小さくつぶやいて由比ヶ浜に小走りで追い付き奉仕部に向かうの

だった。

☆★　☆★

「おまたせ、ゆきのん」

「うっす」

奉仕部のドアを開けてるといつものように雪ノ下は読んでいた本を閉じ二人に視線を向ける。

「特に誰も来なかったから問題ないわ。……生徒会は大丈夫？」

由比ヶ浜に微妙にズレてる返事をした後、八幡に少し声のトーンを落として聞いてくる。

気丈に振る舞っているのだろうが、普段なら嫌味の一つでも言うところだ。

やはり内心は不安なのだろう。それは、いつもの瞳の強さが無いことから一目瞭然だった。

「まあ、なんとかな。副会長の手伝いっても実質は一色の仕事だ、バカでもできる」

「そう……」

簡単に返事を済ませた雪ノ下は置いた本に手を伸ばして取ろうとするが、やっぱり止めて膝の上に戻してにぎにぎと動かしている。明らかに挙動不審だ。

重症だ。

平常心を保とうとして緊張して平常心を失い、そのことを自覚して緊張して平常心を失うといった無限ループに陥っているのだろう。

そんな状態を由比ヶ浜も察知して雪ノ下に声をかける。

「ゆきのん、そこは。あら、由比ヶ浜さんには無理そうね、って言うとこだよー……。酷いよゆきのん！」

「え!?わ、私は何も……」

雪ノ下は謂われ無い非難に動揺する。

「いや、雪ノ下が正しい。そこは、はっきりさせないと一色が登校拒否になってしまうだろう」

八幡は由比ヶ浜に何か作戦があるのだろうと思い、話に乗ってみた。

「そこまで!?」
しかし、八幡の言葉に振り返った由比ヶ浜の顔は本気でショックを受けてるようだった。
「じゃあ質問だ。生徒会の元になった組織の名称はなんだ？」
「え!?」
だが八幡は止まれない、性格的に。
由比ヶ浜は「いろはちゃん知ってるの？」と疑って聞いてくるので、八幡は頷いて返した。
「……なかよしクラブ……とか、みたいな……」
由比ヶ浜はそう答えて八幡の様子をチラチラとうかがう。
とか、みたいな、みたいな曖昧な言葉を付け加えることで、多少の違いを範囲に入れようとする由比ヶ浜だが、
「正解は生徒自治会だ。一色は即答だったぞ」
八幡の答えにかすりもしないのであった。
由比ヶ浜は年下の似たようなキャラに負けたのがショックだったのか、ふえぇんと机に突っ伏す。
そして、八幡は「現実とは残酷なものだ……」と勝ち誇る。
「比企谷君」
いつの間にか由比ヶ浜をからかうことに満足していた八幡に雪ノ下から冷たい声が発せられる。
「不正解、発祥は校友会よ。戦時中は学校報国会と呼ばれ、戦後にＧＨＱによって解体された後に生徒自治会が作られたのよ」
雪ノ下は先ほどまでの弱さは消え去り、友を魔の手から救うためにユキペディアを発動させた。
「ゆきのーん」
由比ヶ浜はその頼もしい胸に飛び付くき、雪ノ下は一瞬躊躇った後頭を撫でて慰めてあげるのだった。
「大丈夫、一般的な知識じゃないわ。きっと一色さんは生徒会の資料に書いてあったのを見付けたのよ」
雪ノ下は慈愛に満ちた目で撫でながら、
「彼も同じ資料を見付けて、深く考えずに浅い知識をひけらかしたの

よ」
「まるで道化ね」と付け足して八幡に顔を向け、鼻で笑う雪ノ下。
「ぐっ……」
図星だった。
八幡は羞恥に顔を反らし、お茶を注ぐために席を立つ。
そしてトボトボと歩く八幡に、「私達のもお願いね、道化谷君」と言ってきた。
雪ノ下は調子を取り戻したようだ。
ポットから急須にお湯を注ぎながら外を見ると夕暮れの景色が広がっていた。
あの時と同じ景色を眺めていると、無様に涙声で伝えた言葉を思い出す。
一生忘れないだろう思い出、文字通り人生を変えた日。
急須から三人分のカップにお茶を注ぎながら室内を見ると、雪ノ下と由比ヶ浜が百合百合している。
もうじき、この景色は見れなくなるのだろう。
桜の花が咲く頃、奉仕部はなくなり、雪ノ下は転校する。
しかし、その未来は八幡が何もできなかった場合だ。
依存から抜け出すのに必要なのは確固たる実績。
雪ノ下にしか解決できない問題を解決できれば雪ノ下は変われる。
その問題を八幡が見つけることが出来れば未来は変わる。
八幡は、一生忘れない思い出を幸せなものにしたいと切に願う。
そのために世界を変える、欠けているモノを求めて

感情支配のアウトブレイク

春。其は、俺を心地よい眠りに誘う言葉。
夏。其は、俺を家に引き留める言葉。
秋。其は、俺を深い眠りに誘う言葉。
冬。其は、俺を布団に縛り付ける言葉。
この一節は八幡が昨日の夜、小町に伝えた言葉。
季節は春。
八幡は普段より３０分早く学校の駐輪場に自転車を止めた。
「くそう、小町の奴。ぼっちの俺が３０分早く来てもしょうがないだろうが」
ぶつぶつと悪態をつきながら下駄箱へ向かう八幡。
電車通学やバス通学の生徒が、この時間に集中するのだろう。
普段、遅刻ギリギリに向かうその場所は人が多く、混雑しているようだった。
「はぁ……」
人混みが苦手な八幡は深くため息をつくと自分の下駄箱に向かう。
混雑は妙に靴を履き替える速度が遅いことが原因のようだ。
「あー、やっぱ可愛いわー」
「だよな。前、生のアイドル見たけどさ。あの子のが上だよ、上」
八幡が下駄箱に行くと同じクラスの男子と思われる２人が話していた。
（そこ邪魔なんだけど……）
思っても口に出せない小心者の八幡。
下駄箱が封鎖されて途方に暮れ、どうしようかと悩んでいるが男子達の会話は続く。
「彼氏いんのかなー、やっぱ」
「いてもいなくてもお前に望みはねーよ、安心しろ」
「諦めたら試合終了だよ。俺、彼氏になりたいです」
あるある、ねーよと盛り上がってる２人にイライラとし始めたが、よく見ると他の生徒数名もクラスの男子と同じ方に視線を向けてい

るのがわかった。
　この封鎖の原因を作ってる視線の先の人物は何者なのだろうと、八幡も興味が湧いて視線を向けると。
「一色か……」
　そこには亜麻色の髪を揺らしながら、せっせとポスターを貼っている一色がいた。
　ぴょこぴょこと動く動作は、なるほど可愛いと思えるものだった。
「いろはす頑張ってんなー」
「んあ？」
　ふいに掛けられる声に顔を向けると戸部が隣にいた。
「ヒキタニ君チィース」とウインクしてくる戸部に会釈して返す。
「ヒキタニ君朝から元気ない系？栄ドリ飲む？」
　もぞっとした動きの八幡をそのように感じた戸部はカバンから栄養ドリンクを取り出すとニカッと笑顔で「ファイトいっぱーつ！」と言いながら差し出してくる。
「いや、いつもこうだから……」
「あ？あー、そう言えばそうかー。ヒキタニ君いつもそんな感じだったわー」
　そう言って戸部はカバンに栄養ドリンクを戻すと八幡と一色を交互に見る。
「あれ？ヒキタニ君もそれ系？」
　男子が邪魔で動けず暇つぶしに一色を見ていた八幡に謎なことを言ってくる。
「系って何？」
「それ系はそれ系っしよー。いろはすファンクラブの会員」
「え？なにそのおぞましいクラブ」
　戸部が言うには、ファンクラブといっても会員証や鉄則のようなものはなく、一色をいいなと思ったキミは会員だ！みたいなユルい感じのものらしい。
　学生だから特定の誰かに好意を寄せることに照れがあり、誤魔化すために作られた用語みたいなものなのだろう。

「なるほど。そこの、一色の周りに居る生徒どもを会員と揶揄するために用いられる用語の意味にもなるわけか」
　八幡は、ポスターを貼り終えたところで男子に話しかけられて対応している一色を眺めながら思ったことを口にすると、戸部は「ヒキタニ君辛辣ウー」と笑い、
「まあでも、いろはすって男女共に人気あるからそんな使われ方しないけどなー」
「は？女子には嫌われてるだろ」
「情報古いっしよー。人の印象は日々更新されるんだぜ、ヒキタニ君」
　今まさに印象を更新した八幡を余所に、戸部はコホンとせきを払いつつ続ける。
「生徒会長になってから真面目に勉強するようになって、男友達と遊びに行かなくなったいろはす。生徒会の仕事で駆けずり回る姿は男子のみならず女子からも好印象を与え。そして！」
　そこで戸部は少し寂しそうな表情に変えて一色に視線を向ける。
「隼人くんに過度なアプローチを止めて、サッカー部にも顔を出さなくなってさー……。隣に居るのは生徒会の副会長くんと書記ちゃん。それが更に評価上げてるみたいなんだけどさー。兄のように慕ってた俺への対応も冷たいし、なんか最近距離あるんだよなー……」
　慕って、のところで八幡は戸部を二度見する。
「ヒキタニくん、顔に出てるよ」
　いつから居たのか海老名姫菜が口に手を当ててクスクスと笑っていた。
「あ！海老名さーん」
「とべっち、ハロハロ～」
　海老名は先ほどの表情が嘘のように浮かれた声で話しかける戸部を軽くあしらって一色に視線を向ける。
　一色の近くにはそこそこイケメンの男子数人が一色に話しかけているが、女子も疎らに居る。
　女子も普通に一色と話しているところから八幡は、なるほど、戸部の言ってることもあながち間違ってないのかと思う。

「ぐ腐腐……。いい眺めだわ～」
そんな特別変な感じはしない状況に海老名のセンサーが反応したことに八幡と戸部は顔を見合せる。
「え、海老名さん？どったの？」
戸部が疑問を投げかけると海老名はメガネをキラッと光らせ「ふ化する前のたまごよ～」と意味不明な供述を始めた。
「ああやって一見仲良く話しているけど、あの男の子達は全員ライバルなの。1人の女の子を取り合って腹の探り合いをしてる……。でも結局、誰も報われない運命……。そう！女の子には意中の男性が既にいるの……！」
そこで海老名は八幡をチラッと見た後、メガネをクイッと手で直し。
「そして……。ある日、あの少年は現実を目の前にするの」
海老名は一色の近くにいる華奢な少年を指差す。
「女の子が知らない男と幸せそうに歩いてる姿を見てしまうの。そしてそれが恋人だと知り、少年は喪失感に打ちひしがれる……。そして、一人ぼっちの孤独を感じ暗闇で手を伸ばす……。……すると、その手を握る暖かい手が！はあはあ……」
「え、海老名さーん……」
異常を察知して戸部は手を伸ばすが、海老名にペチッと払い除けられる。
「そこにはライバルだった男の子が」
海老名は一色の近くにいる小麦色に焼けた大柄の少年を指差す。
「ライバルの男の子は少年を力強く抱き寄せる。そう……、少年は1人じゃなかったの……。いつも隣に彼がいた。そして、喪失感を埋めるように2人はお互いを求め合う。穴を埋めるように……、穴を！」
そこで興奮が最高潮に達したのか海老名はヨロヨロとふらつくと倒れこむ。
「海老名さーーん！」
海老名を抱き止めた戸部は流れるような手つきで脈を測り「今回は大丈夫かー」と安堵する。

「ありがとう、とべっち。もう大丈夫」
ヨロヨロと立ち上がり戸部にお礼を述べる海老名。
八幡はそんな２人を眺めてから、周囲を見渡すとあることに気付く。
今繰り広げられた異常な光景に反応してる生徒は少ない。つまり、これを日常の１コマと捉えていることが窺える。
「まあ、とべっちの言ってることは大体合ってるよ」
「え？なんのこと？」
「ヒキタニ君ボケたん？いろはすのこと」
唐突に海老名に話しかけられた内容がわからなかった八幡に戸部が大丈夫？といった感じで教えてくる。
一色が人気者の件だろうが八幡は心の中で、「俺以外が大丈夫じゃないんだよ！」と叫んだ。
「彼女も大変だよね～。毎日毎日ああやって囲まれて」
「一色はちやほやされるの好きだから喜んでんじゃねーの」
すると戸部が「そこよ、そこ」と言い。
「俺もそう思ってたんだけとさー。どうも本人、嬉しくは思ってないみたいなんだわ」
八幡は、戸部に言われて一色を観察する。
一色は確かに奉仕部にいる時のように自分から会話を出したりしていないようだ。
「うーん。まあ、確かに合わせてるような感じがするな」
「そうそう。流石ヒキタニくんだね」
「まあ、そのおかげで得るものもあったみたいだけどなー」
戸部はそう言ってカバンから何か書かれた用紙を取り出す。
「これこれ。隼人くんの彼女に相応しい子ランキング」
そこには、『葉山隼人くんの彼女、誰なら許せる？』といったタイトルのランキング表が書かれており、三位に一色いろは３２２票と明記されていた。
二位の雪ノ下雪乃と１３票差と接戦なところを見るとかなりのものだ。

因みに一位は５８７票で戸塚彩加だった。
総武高の闇は深い。
ランキングは３人に大半の票が集中してるらしく、四位は三浦優美子１０４票、五位に海老名姫菜５８票といった結果だ。
そして八幡は、そのままランキング表を見ていると１票のところに比企谷八幡の名前を見かける。
海老名に視線を向けると笑顔で見返してきた。
「実は俺、いろはすに入れたんよ。ヒキタニ君は誰に入れたん？」
八幡は安定の影の薄さでアンケートすら受けていないのだった。
まるで誇らしいことのようにどや顔で説明しようと戸部に顔を向ける八幡だが、向いた直後に顔を強張らせる。
「戸部、今なんつった？」
後ろから唐突に呼ばれた戸部は顔が一瞬で青く変化して恐る恐る後ろを振り向く。
その、ドスの利いた声の持ち主。
君の名は。
「あ、優美子。ハロハロ～」
三浦優美子は海老名に挨拶を返して戸部に近づく。
「いやー……。サッカー部のマネージャーだし、妹みたいなもんだからなんとなく……」
三浦は戸部の持ってたランキング表を取り上げ、内容を確認する。
そして、一色に視線を向けるとチッと舌打ちした後、表をグシャグシャと丸めてゴミ箱に投げ入れる。
戸部はその光景を弱々しく眺めるのみ。
「ヒキタニ君～」
「俺に振るな」
下駄箱の一部と化してた八幡に仔犬のような瞳で助けを求める戸部。
「あ、ヒキオ」
あ、ゴミ。みたいなアクセントで呼ばれる八幡。
「で、アンタはアレはどうしたよ」

三浦はゴミ箱をチラッと見て八幡に聞いてくる。
「俺はアンケートを受けてない」
八幡は、アレはどうしたよ。の翻訳が、ゴミ箱に入らなくていいのかよ、ではないことを祈りつつそう答える。
「は？」
「優美子。ヒキタニくん、忘れられてたんだよ」
八幡の言ってる意味が理解できなかった三浦に海老名が説明する。
「流石ヒキオ、マジうけるんだけど！」
三浦はそれは楽しそうに腹を抱えて笑うのだった。
ツボに入ったようで、ヒーヒー言いながらチラッと八幡を見てさらに爆笑。
「優美子、笑いすぎだよ」
そんな三浦の態度に海老名はそう言って八幡に「ごめんね～」と三浦の代わりに両手を合わせて謝罪する。
「別に……。慣れてるから気にしてない」
八幡は表情を変えず淡々とした口調でそう言うと、三浦は笑うのを止めバツの悪そうな顔をする。
「あー……、今のはあーしが悪い。ごめん、ヒキオ」
三浦は頭をガシガシと掻いて、そう謝罪する。
そんな三浦の態度が意外だったのか、八幡は声を詰まらせて呆けた顔で頷いた。
「ん。じゃあ、あーしら先行くから」
そう言って三浦は自分の下駄箱に向かうか、そこには封鎖してるクラスの男子がいる。
すると三浦は男子の横に並び睨みを利かせて一言。
「邪魔」
なんということでしょう。
その一言で、先ほどまで封鎖していた2人の男子は跳び跳ねるように場所を開け、一色を見て緩んでた顔は怯えの色に様変わり。
履き替えを済ましてなかった失態のせいで逃げることもできず立ち尽くす始末。

三浦は、そんな男子を当然のように気にする素振りも見せず靴を履き替える。
「ヒキタニくんととべっち、教室で」
そして海老名も2人に声をかけた後、三浦と共に大勢の生徒がごった返す中、『モーゼの十戒』の海が割れるシーンのように人が割れる道を歩いていった。
「ヒキタニ君、マジサンクス！」
八幡がカースト上位者の威光を恐怖とともに見ていると、戸部が親指を立てて感謝する。
結果的に戸部の発言がうやむやになったからだろう。
「じゃー、俺たちも行くべ」
そう戸部は言って靴を履き替え、「早く早く」と急かしてくる。
急ぐ理由も一緒に行く理由も無いのだが、ここに居てもしょうがないので八幡は誘われるままホイホイ付いていくことにした。
靴をを履き替えて何気なく一色を見ると、まだ男子達に話しかけられて対応に追われていた。
ちょと困ったような感じがする一色の姿を、人気者は大変だね～と感想を抱いていると一色と目が合った。
一色は八幡をポケーと見たかと思えば、良いものを見つけたと言わんばかりに笑顔で「せんぱーい」と言いながら手を振ってくる。
「一色さんが俺に手を振ってきたぞ！」
「いや、俺だろ！」
自分だと期待したか？残念！俺だよ!!
まさに外道。と暫定一色ファンクラブ会員の男子2人相手に妙な優越感に浸ってしまった八幡は、外道ベイビーのように接近する一色から逃げるタイミングを逃してしまう。
会員の2人は近づく一色に「こんにちは」と爽やかに声をかけるが、一瞥もされることなくスルーされる。
そうして一色は八幡の近くに来ると袖を引っ張りながら「どうですか～。あのポスター、わたしが作ったんですよ～」と言ってくる。
「おお。いろはす、見てた見てた。おつかれさんよー」

「戸部先輩には聞いてないです」
「え、ええー……」
戸部はこの一色の対応のどこに慕われてると思っているのか謎だ。
そんな会員と戸部を軽く蹴散らして八幡に「どうですか～」と聞いてくる一色が何を考えているのか、どういうつもりで袖を引っ張っているのか。
「い、いいんじゃねーの？おつかれ……」
朝から色々ありすぎた。
小町にたたき起こされ、戸部にからまれ、暴走する海老名、こわーい三浦ときたところに一色のこの行動。
だからだろう。八幡は思考がうまく働かず、そう適当に返してしまう。
「もー！可愛い彼女が頑張ってる姿を見てその感想はないですよー！」
これはいけない。
八幡は自分の迂闊さに愕然とする。
そして八幡は小学生の夏、小町が夏休みの工作にアイスの棒で城を作たと言って感想を聞いてきた時を思い出す。
その時も八幡は適当に返し、その態度に小町は不機嫌になった。
つーん、と言いながら無視する小町の機嫌を戻すため真夏の暑い中、ガリガリ君を買いに出かけたのは辛い思い出だ。
しかし現金なもので、小町はガリガリ君のおかげで機嫌を直して食べた後の棒を何を思ってか、砲身に見立てて城の天守閣にくっつけていた。
安い女だった。そしてアホだ。
だが八幡も、あの時と同じ失態をまた繰り返してしまった。
小町をどうこう言える立場ではないのだ。
そう考えた八幡の出した結論は。
（やはり、ハーゲンダッツだろうか……）
一色はデザート作りが上手い。料理教室の時にこっそりくれたクッキーはとても美味しかった。

あんな旨いクッキーを作れる一色が安いガリガリ君に満足するとは思えない。
ハーゲンダッツ、痛い出費だ。
しかしそれで可愛い彼女が機嫌を直すのなら仕方な
「ちょっとまて」
違う、そうじゃない。
何故、何時の間に一色が彼女になっているのか。
一色と付き合うことになった出来事の記憶は無いし、思い出も無い。
もちろん世界線を移動した感覚も無い、魔眼など持ち合わせていないのだから。
あまりにも一色の『彼女』とか言うパワーワードが強烈に思考を狂わせたのだろう。
八幡はそう思い立ち、とりあえず彼女といっだ誤認から訂正しようと仕切り直しすことにした。
「……どうしたんですかぁ」
すると一色は不安気に瞳を震わせて弱々しく聞いてくる。
八幡の雰囲気の変化を察したのだろう。
何か良くないことを言われる、と。
そこで八幡ははたと気付く。
一色が意味も無くこんな嘘をつくはずがないことを。
何らかの理由があって嘘を言い、八幡ならそれに合わせてくれると信じているのだ。
「……悪かった。誕生日、埋め合わせするから許してくれないか？」
後で理由を聞くとして、とりあえず合わせてやろうと思い、できうる限りの優しい口調でそう言った。
そんな八幡に一色は虚をつかれたように驚いた顔をしたが、すぐ笑顔に変える。
「期待してた通り……。や、それ以上ですよー」
ぽつりとそう言った後、一色は「期待してますねー」と嬉しそうに笑う。

その姿に一抹の不安を感じた八幡はそこで気付く。
何故俺は、一色の期待に応える必要があるのか、と。
雪ノ下や由比ヶ浜なら応えたいと思うのだが、一色の期待に応えてもリスクしかないのではなかろうか？と。
そんなことを考えていると一色は、でわ～と笑顔で手を振って立ち去ろうと踵を返す。
「お、おい――」
そんな一色を呼び止めようと手を伸ばした八幡だが、突然肩を掴まれる。
「ヒキタニ君。……いろはすと付き合ってたの？」
八幡の肩に手を置いた戸部は掴む力とは裏腹に力無い声でそう聞いてくる。
「いや、ちょと肩を離してくれ」
「手を伸ばしてたけどさ、手でも繋ごうとしてたの？ラブラブなの？……そういえばこないだも一緒だったよね？」
恋のライバルと思ってた相手が別の女子と付き合っている。
しかもその女子は妹のように思ってた一色だ。
八幡を掴む手に自然と力が入る。
「落ち着け戸部。あれは小町の誕生日祝いだよ、関係……ッ！おいやめろ、揺らすな、く、くるし……うぇ」
サッカー部で鍛えてあるだけに戸部の力は強い。
そして八幡は周囲に目を向けると大勢の生徒の視線が集中していた。
会員の2人も、嘘だろ……。といった顔だ。
そんな中、圧倒的な力の前に抵抗できずに揺すられ続ける八幡は薄れゆく意識の中で一色を見る。
囲んでた男子から解放され、1人悠々と立ち去って行く一色。
そこで初めて理解する。
あぁ……。俺はまた一色に利用されたのだ、と。

閑話休題

３０分早く来たのに一時限目の終わりに教室に行った八幡。
普段は見向きもされないが今日の教室は、一部の男子の刺すような視線と葉山の同情するような視線、由比ヶ浜の何か言いたそうな視線などに晒された。
しばらくすると授業が終わり、先生が退出すると生徒もちらほらとグループを作り暫しの談笑が始まる。
その喧騒の中、ぼっちである八幡はいつものように机に突っ伏して次の授業まで英気を養うのだが、
「いや～、ヒキタニ君ごめ～ん。気絶するとは思わなかったんよ～。死んだかと思ったわ～」
そこに戸部がやってくる。
「誰でも頸動脈締め付けられたら落ちる。ったく、注意しろよ。」
拝むように謝罪をする戸部に八幡はムスッとした顔で思い出すように首を擦りながら答える。
「で、でもさ、仕方なくね？あんなことがあったんだから……、仕方なくね！」
自己暗示するように言いながら仕方ないアピールをする戸部。
そんな、本当に反省してるのか怪しい戸部の態度にため息を吐く八幡。
「お前が将来、仕方ないって理由で犯罪を犯さないか心配だよ」
「そんときゃ隼人くんに頼るから問題ないって～」
「問題大有りだろが……」
なんという短絡的思考、流石ＤＱＮ脳。
しかし、葉山なら罪を償えと諭して戸部はめでたくブタ箱入りだろう。
そんなどうでもいいことを考えていると八幡の前に突然、大天使が降臨した。
「おはよう、八幡。朝から大変だったみたいだね」
「戸塚！」

八幡に戸塚彩加の優しく慈愛に満ちた声が掛けられる。
「倒れかたが悪いと大怪我にもなってたんだからね。ちゃんと反省しないとダメだよ」
「……は～い。ヒキタニ君、海よりも深く反省してっから～」
大天使の戸塚にメッといった表情で責められては、戸部も反省せざるを得ない。
「でもさ、ヒキタニ君どうやっていろはす落としたん？」
これが戸部の本題で、謝罪はついでだ。
「一色を落としたいのか？なら簡単だ、俺にした様に頸動脈を締めれば落ちるぞ」
「い、いや～、悪かったってば。意地悪無しでオナシャス！」
と、言われても利用されたので助言などできない。
三年生になると海老名とクラスが分かれるかも知れない、そんな状況で進展が無いことに藁にもすがりたい心境なのだろう。
基本的に学生は、クラス内の関係を重視する。
学年が上がると強制的にクラスも変わり、仲の良かった友達と別々になることは多い。
例え今、クラス内で薄い人間関係であったとしても、それだけで親友になることはよくあることだ。そして、その逆もしかり。
特に海老名はその変化が強いだろうとは八幡も思った。
「そうは言ってもな……」
しかし、八幡は人間関係の構築を始めから諦めていたので聞かれても困ることだ。
「八幡に聞いても無駄だよ」
うんうんと悩む八幡の代わりに戸塚がさらっと酷いことを言う。
「違うよ、違うからね？そんな意味じゃないから、そんな顔しないでよ八幡」
絶望のどん底のような八幡の顔を見て戸塚は慌ててそう言ってから説明する。
「八幡、モテるから勝手に惹き付けてしまうんだよ。だから聞いても無駄」

「えー！・ヒキタニ君が？・それはないでしょー」
「本当だよ。ね、八幡」
「ね、て言われてもそれはさすがに……」
戸塚の意見には無条件で賛同したいところだが、これには賛同できなかった。
八幡がこれに賛同すればナルシストみたいなものだから仕方ないだろう。
すると戸塚は目をウルウルとして、
「ぼくも八幡のこと好きだよ？」
「うん、戸塚の言った通りだ。戸部よ、聞いても無駄だ」
「ヒキタニ君⁉」
あっさり手のひら返しをする姿に、それで良いのかといった仕草で訴える戸部だが八幡は涼しい顔でスルー。
「まあ、戸部くんは今のままでいいんじゃないかな？・無理に自分を繕っても後悔するよきっと」
「そうか～、自分らしくかー。ん？・自分らしく……、あれ？・自分らしいってなんだろ」
八幡の代わりにとばかりに戸塚が助言すると戸部は雪ノ下と同様の問題に直面する。
1つだけ違うのは、戸部はその事を考えなかった所だが。
「深く考えなくてもいいよ。今の戸部くんが戸部くんらしいってこと」
「お！・そだな、それもそうか～。よしっと！・戸塚、ありがとなー」
戸部は笑顔で言うと教室の時計を確認して自分の席に戻って行く。
八幡は戸部が戻る姿を見てると由比ヶ浜と目が合うがサッと目を逸らされる。
（説明しないとな～。一色の奴、面倒なことしやがって……）
八幡は、ため息をついて視線を戻すと。
「八幡は自分らしさってどんなものだと思う？」
と、戸塚が聞いてくる。
「そうだな……、人間ってのは周囲の環境や人間関係から影響されて

変化するものだ。その変化を取捨選択することで自分らしさが生まれる、と俺は考える」
俺は俺だ、と答えるのは戸部と同類みたいで嫌だなと思い哲学っぽく語る。
そんな八幡に戸塚は「八幡らしい答えだね」、とクスクスと笑い混じりにそう言う。
「じゃあ、戸塚の自分らしさって何だ？」
「ぼく？」
八幡は発言の照れを誤魔化すように聞く、すると戸塚は嬉しそうに微笑み。
「そうだね。譲れない気持ちを貫き通す、ってことかな」
「それは？」
「男らしく！ってことだよ」
戸塚は両手をむにゅと握り気合いを入れて言い放つ。
「戸塚、男らしいぞ」
「も～！顔と声が言葉に伴ってないよ～」
ほっこりとした顔で見つめる八幡に、戸塚は頬をマシュマロのように膨らませて抗議の声を上げる。
「でも八幡は、やっぱり変わったね」
しばらく八幡をほっこりさせていた戸塚はそう言って笑みをこぼす。
「まあ、俺も一年経てば変化することもある」
「うん。昔の一匹狼みたいな八幡もかっこよかったけどね」
「お、おう」
八幡は、一匹狼はぼっちのことでは？と思ったが、戸塚のはにかんだ笑顔を見れたことでどうでもよくなった。
そんな癒しの一時も次の授業を知らせるチャイムが鳴って終わりを告げ、外に出ていた生徒も戻ってくる。
「じゃあ、そろそろ行くね」
戸塚もその流れに沿うように自分の席に向かう。
途中、顔を少し傾けて手を小さく振りながら屈託のない笑顔を向け

る戸塚。
そんな戸塚を目で追いながら、八幡は改めて思う。
戸塚彩加、声も仕草も女にしか見えない。いや、女より女らしい美少女。
だが男だ。
テニス部の部長だが、体付きはとても細い。
だが男だ。
季節は春だというのにまだ寒いな。桜のつぼみも咲く気配はない。
だが男だ。
青い長い髪をポニーテールにしている生徒と目が合った。改造した女子の制服を着こなしている。
だがおと……女ですごめんなさい睨まないで！
そうして、逃げるように視線を戻して誤魔化すように目覚まし時計と化しているスマホをまさぐる。
サワサワっとまさぐっていると、数少ない登録者の1つで止まる。
そして、少し考えてメールを送ろうと操作する。
[一色に奉仕部に来るように連絡を頼んでいいか？後、噂は勿論嘘だ。]
そして、メールの内容を確認して送る。
少し間を置いて由比ヶ浜が携帯を見たのを確認し、自身のスマホをしまう。
スマホをしまってる途中に由比ヶ浜から、[いろはちゃんにメール送ったよ。放課後、詳しく教えてね。]と、時を止めてるのかと思うほどの高速返信に八幡は超びびることになった。
一色は必ず奉仕部に来るだろう。
長い付き合いではないが、一色は逃げるようなダサいことはしないだろうと八幡は確信している。
「一色いろは、待っていろよ……」
誰に言うでもなく、小さくつぶやく復讐に燃える八幡。
すると、近くから舌打ちが聞こえた気がした。
次の授業は数学だ、寝よう。と机に突っ伏す八幡だった。

地方の発売日が1日遅れるのはまちがっている。

場所は奉仕部。

一色が奉仕部に来るまでに八幡は、今朝の騒動を雪ノ下と由比ヶ浜に説明した。

雪ノ下は、そもそも騒動事態を知らなかったが説明を受けて呆れるような顔で頭を押さえた。

由比ヶ浜は説明を聞いた後、「いろはちゃんの話も聞かないと判断できないね～」と困った顔で言った。

雪ノ下も由比ヶ浜の意見に同意して一色を待つことになったのたが、疑問に思うだろうことをスルーされた八幡は少し困惑した。

その場しのぎの策にしてはリスクが大き過ぎて釣り合ってないのだ。

少し経って、控えめにドアを叩いて「こ、こんにちは～」と、おずおずと奉仕部に来た一色に3人の視線が向かう。

「いらっしゃい、一色さん」

「とりあえず座って、お茶用意するから」

「は、は～い……」

由比ヶ浜がお茶を注ぎに向かうのと入れ代わりに一色が依頼者用の席に座る。

いくら由比ヶ浜でもお茶くらい注げるようで、紙カップに注がれたお茶を一色の席に置いて自分の席に戻る。

その間の一色は、まるで八幡のように挙動不審だ。

そう、一色のリスクは後処理が非常に面倒なのだ。

雪ノ下と由比ヶ浜だけでこの状態なのに、葉山への説明をどうするつもりなのだろうか、といった疑問が八幡にはあった。

「言い訳を聞こうか、一色」

八幡は尋問でもするように声のトーンを落として、机を指でトントンと叩いた。

「言い訳と言いますか……、えとですね、言い寄られるのにうんざりしてたんですよー」

「戸部から聞いた通りだな。お前、マジでそうなのか？」
「はい。そういうのもういいかな～って思いましてですね、どうしようか悩んでいたら先輩がいたんですよ」
「人を道具のように扱うの、やめてくれませんかね？」
尋問開始と同時に軽くジャブを放つ一色に辟易する八幡。
「言い寄られることにうんざりしていたから、比企谷君を彼氏役にした、と言うことかしら」
すると雪ノ下が困惑しながらも、一色の動機を簡潔にまとめて問いかける。
「はい、そうです」
「それだと比企谷君は彼氏役を続けないと元の木阿弥になると思うのだけれど……」
雪ノ下は一色の言葉を受けて、今度は八幡に困惑した視線を向ける。
「ねぇよ、絶対やらねーよ」
八幡は続けると思ったのか？心外だ、とでも言わんばかりに即答で否定する。
八幡の否定の言葉を聞いてホッとした顔をして肩をなでおろす雪ノ下だが、その肩を由比ヶ浜がちょんちょんとつつく。
「ねぇゆきのん、もとのもくあみってなに？」
とても低レベルの疑問を由比ヶ浜は恥ずかしげもなく言葉にする。
雪ノ下が一瞬、え？といった顔をするが、それを隠すように由比ヶ浜に微笑み、
「いったんよくなったものが、再びもとの状態に戻ること。戦国時代の武将、筒井順昭が病死した時、死を隠すために木阿弥……。まあ、比企谷君みたいな人を影武者にするのだけれど、子の筒井順慶が成人すると同時に御役御免になり元の比企谷君に戻った。つまり、底辺から上流階級に成り上がるけど結局底辺に戻った、と言った意味よ」
と、内容を身近な対象に例えることで由比ヶ浜に分かりやすく説明する雪ノ下。
「いや、なぜ俺で例えた雪ノ下。そりゃ底辺だよ、底辺だけれども」

「ヒッキー可哀想……」
「由比ヶ浜、同情はやめろ」
木阿弥の境遇を八幡に置き換えて想像したのだろう、由比ヶ浜は悲しそうな顔で八幡を見る。
感受性の強い子だ。八幡はそう思いながらも、「小町がいる俺は木阿弥より上だ」と、妙なプライドで張り合う。
しかし、木阿弥は僧侶であって底辺ではないことを八幡は知らない。
「そんなことより一色さん、比企谷君は協力するつもりはないみたいよ」
そんな必死な八幡をさらっと流して話を戻す雪ノ下。
その表情は平静を装っているが、喋り終わると口だけニヤリと笑う。ドSだ。
「そ、そうですね……。えと、別に協力してもらわなくていいですし、何かしてもらおうとも思ってません」
一色は、そんな雪ノ下に若干引きつつも笑顔で答える。
「それじゃあ本当に意味無くない？」
それでは本当に元の木阿弥ではないか、お互いそう思い雪ノ下と由比ヶ浜は顔を見合せ困惑する。
「彼氏がいる、って設定が欲しかったんですよ」
「なにそれ？」
一色の言ってることが全然理解できず由比ヶ浜は困惑を益々深くする。
「それなら比企谷君ではなく、架空の彼氏にすればよかったのではないかしら」
設定が欲しければ八幡を利用せずとも架空の彼氏で十分なのではないか。と、雪ノ下も少し考えて、そう結論を出す。
「それだと、勝手に彼氏像とかイメージされてたりして面倒なことになると思うんです。今朝の事、どんな風に噂されているか知ってますか？」
雪ノ下はそもそも知らなかったので首を振って応え、由比ヶ浜は思

い出すように思案して。
「えっと……、目付きが不気味な男と付き合ってるとか、地縛霊に取り付かれたとか、ストーカーに脅されている、とか？」
八幡は昼休憩にベストプレイスに行く道すがら、すれ違う女子が〝地縛霊〟なるフレーズを口にしていたのを聞いていた。
よもや俺とは、とショックを受けてひっそりと落ち込む。
「他には、隼人くんへの新たなアプローチとか、いろはちゃんがイメチェンした、とか……あれ？とべっち以外、ろくな情報がない」
由比ヶ浜は聞いた噂を言って、不思議そうな顔をして問いかけるように雪ノ下に向ける。
聞いた雪ノ下は、「あっ……」と漏らして一色に視線を向ける。
「そうです、雪ノ下先輩。ほとんどの人は付き合ってると信じてないんですよ」
「え!?なんで！」
由比ヶ浜は水を浴びせかけられたように驚き、一色に振り向く。
「先輩を知らない人からすれば、わたしと付き合うレベルでは無いと判断するんですよ、見た目で。まあ、外見だけでしか判断できない人なんて、操るのちょろいですよ」
一色は驚く雪ノ下と由比ヶ浜に、したり顔でそう答える。
（だめだ！勝てるわけがない！あいつは伝説のスーパートップカーストなんだぞ！）
八幡は、まるで純粋な戦闘民族を相手にした王子のように復讐の炎は鎮火した。
そんな八幡をよそに、少しの沈黙の後ひ雪ノ下が、「そ、それで一色さん」と言って、
「そこまでして手に入れた設定でも、信じてもらえないなら意味が無いと思うのだけれど」
「信じてもらわなくてもいいんです、要は誘いを断る口実なので」
一色の返答に雪ノ下は少し考え。
「抑止力……、と言ったところかしら。いえ……、核の傘、が近い例え？」

「う～ん。まあ、そんな感じですかね？誘っても絶対断られると思ったら誘わないですから」
「でも、そんな遠回しなことしなくても、二度と誘う気を起こさないようにすれば早いと思うのだけれど」
「どんな方法ですか？」
「例えば……」、と雪ノ下は口にする。
　高値の花として君臨する雪ノ下の処世術に一色の期待も高まる。
「私があなたと行動を共にして何かメリットはあるのかしら。今この時間も特にメリットを感じないのだけれど、事前に教えてくれれば検討するわ、検討する必要があると思ったらね。と、言えば大抵の男子は二度と文不相応な考えはしなくなるわよ」
「それは雪ノ下先輩だからできることですよ……」
　げに恐ろしき雪ノ下の提案、チャレンジした勇者に冥福を祈る。
　そんな参考にならない答えに、一色の期待値も表情と連動するように下がっていく。
「けれど、それほど困ってたのなら依頼に来れば良かったのではないかしら」
「いや、自分でなんとかできるものを、依頼するのもどうかと思ったのですが……」
「そ、そうね……」
　困ったような顔でそう返す雪ノ下。
　誰かの力を借りたいと思うから依頼するのであって、自力で解決できるなら依頼する必要がない。
　そんな依頼、普段の雪ノ下なら一蹴して、軽く罵倒しそうなものなのだが。
「わたしのやり方、何かまずかったですかね」
　そんな普段と違う雪ノ下に、一色は段々不安になって恐る恐る声をかける。
「上手く言えないのだけれど、一色さんのやり方に納得できないの。一色さんが自分で決めたことだから口出しする権利は無いと思ってる、けど……」

「……雪ノ下先輩からすれば、遠回しで非効率な方法だからじゃないですかね」
「そういうことではないの。ごめんなさいね、変なこと言ってる自覚はあるのだけれど……」
言い寄る男子を遠ざける。といった目標を完遂することなら、一色案と雪ノ下案のどちらでも達成できることは雪ノ下も分かっている。
だってやだもん、といった理由しか浮かばない、感情的な反対。
そんな、まるで子供のような理由しか頭に浮かばず口を閉ざす雪ノ下に、一色も戸惑う。
「あたしも納得できないかな」
すると、黙って聞いていた由比ヶ浜が困った顔で雪ノ下に同意する。
「やっぱ何か問題ありましたかね」
由比ヶ浜にも反対され、一色は益々戸惑う。
「いろはちゃんの案だと、誘いを断る以前に誘われないようにする。……これって、ゆきのんの案と違って断られて傷つく人が出ないんだよね」
利用された八幡は面倒ではあるが、その面倒も時間とともに解消される。
「そうですね。誰も傷つくことが無い案だと思うのですが……」
「それは違う」
由比ヶ浜に、はっきりと自分の言葉を否定された一色は肩をビクッと震わせる。
「……お願い、自分の気持ちを大切にして欲しいの」
そして、由比ヶ浜は一拍置いて悲しい表情でそう言った。
一色のやり方は自分の気持ちを偽る行為。
その本質は八幡の修学旅行の嘘告白と同じく、自分の気持ちを蔑ろにした方法だ。
けれど八幡と違い、傷つくことを自覚している一色は由比ヶ浜の言葉に俯いて「……はい」と小さく返す。
「あたしもカフェで言ってた意味に気付いてあげれなくてゴメン」

一色の行動は諦めの結果だ。
由比ヶ浜が一色のカフェで気持ちを伝えるつもりが無い、と言った意味を理解していれば別の選択があったのかも知れない。
「いえ。入り込む余地が無いと分かってたので、どうしようもないですから……」
一色は俯いたまま、少し投げやり気味に答える。
同学年で同じ部活を圧倒的に長い期間過ごしてきた3人と自分。
特に八幡と雪ノ下から感じる、奉仕部を特別視するような空気に入り込む余地が無いと感じていた。
「……それはちょと違うんじゃないかな」
由比ヶ浜は、そんな一色の態度に困ったような顔をして答えると雪ノ下に振り向く。
「そうね。一色さんは入り口を見つけている、私にはわからないもの」
「それって、どういう……」
由比ヶ浜に応えるように頷いて答える雪ノ下に一色は困惑して2人を見る。
「つまり、そういうこと」
氷層の上を歩いているような、薄い関係。
生徒会選挙までは、そんな絆などとはほど遠いい不干渉の空気に浸っていただけの空間だった。
それを守るために八幡と雪ノ下は奉仕部を特別視する歪んだ信頼関係で繋がっていたのだが、傍から見れば一色のような感想を抱くのは当然だろう。
入り口にすら届いていない関係の雪ノ下と由比ヶ浜からすれば、一色は先を行っているように見える。
そんなことを知らない一色は、由比ヶ浜から言われた意味が理解できるはずもない。
「それにしても一色さん。……やっぱり、そうだったのね」
そんな困惑したままの一色に、雪ノ下から確信を得た言葉を投げかけられる。
「あ、いや。その、やっぱりです……」

ずっと困惑顔だった一色は雪ノ下の言葉を受けて、俯きながら頬を少し赤く染めて答える。
「あの男、めんどくさいわよ？」
そんな仕草に少しからかうような口調で雪ノ下が聞くと、一色は照れた顔を向けて微笑むと。
「わたしも相当、めんどくさいですから」
と、同じ口調で返した。
雪ノ下は、その答えに一瞬目を丸くするが「それもそうね」、と納得したように微笑む。
そうして2人で一頻り笑いあっていると、由比ヶ浜が割って入るように口を開いた。
「いろはちゃんとあたし達は、少し行き違いがあるみたいだよね」
「そうね。認識の相違、第三者視点からの違い、かしらね」
「そういえば、さっき雪ノ下先輩の言ってた、わからないーみたいなのとか一体何のことです？」
「それについては話せば長くなるのだけれども。……そうね、一色さんには話しておくべきかも知れないわね」
第三者視点からの認識の違い。
一見仲の良い関係に思えても、その中は嫉妬と強欲が吹き荒れているなんてことは多々ある。
奉仕部の3人の関係は、そんな感情すら曖昧な不安定なもの。
その原因の一端である雪ノ下の問題は、第三者の認識を大きく歪ませることになる。
雪ノ下は少し間を置いて話初めようと口を開きかけるが、その時にガチャとイスの音が部室に響きそちらに視線を向ける。
「いや、なんつーか」
そこには居心地悪そうに頬を掻いて視線さ迷わせた八幡がいた。
「俺席外した方がいいかな～、て」
八幡は焦っていた。
普段から存在を忘れられることはあったが、自分の話題の最中に忘れられると思わなかった。

見れば雪ノ下は今まで見たことが無いほどに驚愕を顔に張り付けており、由比ヶ浜に至っては放心したように八幡を見たまま動かない。

一色は顔を真っ赤にして少し体を引いたように仰け反っている。

「ひ、比企谷君。いつからそこに……」

「さ、最初から？」

記憶力は校内一であるであろう雪ノ下に聞かれて、ついつい疑問形で返す八幡。

「……ヒッキー、今の話聞いてた？」

「……そりゃ、まあ」

不安げな顔で恐る恐るといった感じで聞いてきた由比ヶ浜は、八幡の返事を聞くと一色に申し訳なさそうに視線を送る。

その由比ヶ浜の仕草に釣られて八幡も一色を見る。

そして八幡と目が合った一色は、ゆでダコのように顔を真っ赤にして俯いた。

「す、すまん……」

他の国では、とりあえず肩を叩きながらＨＡＨＡＨＡ！と豪快に笑い飛ばしたり、逆に謝罪と賠償を請求するなどあるが八幡は日本人だ。

どうすればいいのか分からない状況なら謝罪すればいい、と日本人特有の習性に従ってしまった。

すると一色はビクッと肩を震わせて「先輩……」と、声を漏らすように呟いて潤んだ瞳で問いかけてきた。

「……それは……、何の謝罪ですか？」

「あ、いや」

モノレールの時の様な今にも泣きそうな表情で聞かれた八幡は言葉に詰まり一歩後退る。

自分の軽はずみな発言で、こんな表情をさせたことが予想以上に心を乱して八幡は押し黙る。

そんな八幡の姿をどう捉えたのか、一色は目に涙を滲ませ肩を落とす。

その顔から落ちる涙を目で捉えた八幡は思考の限界を迎え、助けを求めるように雪ノ下と由比ヶ浜に目線を送る。
「あ、あたしのせいだ……。あたしがあんなこと言わなければこんなことに……」
「いえ、由比ヶ浜さん。私が比企谷君の存在を忘れなければ……」
部長失格ね、と悲痛な声で呟く雪ノ下と、途方に暮れる由比ヶ浜からは期待した成果は得られないと悟った八幡は、その場に佇む。
どのくらいそうしていたのか、部室には一色の鼻をすする音だけが聞こえていた。
八幡は自身に向けられた感情の対処は得意なのだが、それは『負』限定であって、今回のような『負』以外の感情には疎い。
雪ノ下は自分の感情すら分からないのだからどうしようもない。
こんな2人だからこそ一年間で連絡先すら交換しないまま、時を過ごしてきたのだろう。
「ゆきのん。1つ、試したいことがあるんだ……」
そんな2人を、ここまで繋ぎ止めたのが由比ヶ浜結衣だった。
八幡が立ち止まってしまった時、いつも背中を押してくれたのは彼女だ。
八幡と雪ノ下のことを考え、道を示してくれる心優しい女の子。
また、由比ヶ浜に助けられることに情けなさと罪悪感を感じ、八幡は由比ヶ浜の『試したいこと』を聞く。
きっとそれが正解なのだろう、と。
「頭に強い衝撃を与えたら、記憶を失うって。だから、試してみる価値あるんじゃないかな？って」
「いや、ちょっと待て！」
突如声を荒げた八幡に驚く由比ヶ浜。
驚いたのはこっちだよ！と抗議の視線を向けるが、由比ヶ浜は真剣な表情で見返す。
まるでこれが正解のように。
「ヒッキー、これしか無いと思う。記憶失うって言っても、ごく最近の記憶が一般的ってテレビで言ってたし」

「そういう問題じゃねーよ！……って。雪ノ下、何を考えてる？」
　由比ヶ浜の戦慄するような提案を受けて顎に手を当てて考えている雪ノ下を視界に捉えて言い知れぬ不安を覚える八幡。
「いえ……。勿論、由比ヶ浜さんの提案は却下よ。記憶喪失になるまでの衝撃を与えたら生命の危険もあるし、後遺症の危険もある。確証も無いし、暴力を見過ごすこともできないわ」
「そう言われると、確かに危険かも……」
　そんな雪ノ下の常識的な理由に、由比ヶ浜も納得して引き下がる。
　由比ヶ浜は真剣に考えた結果、この提案を口にしたのだ。
　その事実に八幡は恐怖を覚えると同時に、少し前に優しい女の子の評価をしたことに、何かモヤっとした気持ちを感じた。
　気付けば一色の鼻をすするのを止めていた。この会話の流れを聞いていたのだろう。
　由比ヶ浜の非現実な提案も、ある程度は効果があったようだった。
　八幡がそんなことを考えていると、「ただ……」と雪ノ下が話し始める。
「記憶を消す。これはいい案だと思うわ」
「は？」
「最近の研究で、マウスでの記憶操作を成功させたとの発表があったのよ。確か、日本人の教授が携わっていたはずだから、姉さんに相談すれば……」
「人体実験じゃねーか！」
　八幡は脳裏に嬉々としてガラス越しに人体実験の様子を眺める雪ノ下陽乃を想像して身震いをすると、今にもスマホを取りだそうとする雪ノ下に「待て待て！」と言って、
「いや、いくらなんでも女子会聞いてただけでこの対応はおかしいだろ！」
「え？」
　そして、雪ノ下はスマホを手に取ったまま不思議そうな顔で八幡を見上げる。
「そりゃ、俺みたいなボッチにはこういった女同士の会話を聞かれた

ショックはわかんねーけど。元々、一色が葉山のこと好きなの俺も知ってるんだから、記憶消す必要ないだろ！」
八幡が慌てたようにそう言うと部室は静寂に包まれた。
「は？」
その声は雪ノ下が漏らしたものだが、由比ヶ浜と一色も口から今にも「は？」と言いそうだった。
「え？違うの？」
部室の微妙な空気に八幡は、〝また俺何かやっちゃいました？〟と思い部室の３人を見渡す。
「う、うん！そ、そうだよね！あたし、ちょっとオーバーだった！かも……」
「え！あ、そうですね。わたしもちょと雰囲気に流されてたみたいです！」
「ハハハ～」と、その微妙な雰囲気を吹き飛ばすように由比ヶ浜と一色が妙なテンションで笑い合う。
そんな２人、特に一色は先程まで涙を流してた人物とは思えないほどの変化に八幡は胡散臭げな視線を送る。
「わ、私も」
すると、少し遅れて雪ノ下も同調するように声を上げる。
「知的好奇心に負けて目的を見失ってたわ……」
これは本音なのだろう。
しかし八幡は、こんな唐突な変化はさすがにおかしいと指摘しようとするが、由比ヶ浜が注目を集めるように机をバンと叩いて遮ると、
「そうそう、こないだ新作のディスティニィー映画見たよ、ゆきのん！」
「そう。ふふっ、あれはとてもいいものよ」
「雪ノ下先輩も見たんですねー！」
この話はおしまいとばかりに別の話題に切り替わった。
それから妙なテンションのまま八幡をおいてけぼりに世間話に花を咲かせる３人。
その異常な空間と化した部室はさすがに長く続かないと悟ったの

か、少し早めにお開きとなった。
何故か由比ヶ浜の家でお泊まり会をする、と3人仲良く帰って行く姿を見送って、八幡は駐輪場に自転車を取りに向かう。
終業式間近なだけあって部活で残る生徒は少ないのだろう。
閑散とした駐輪場には人の気配は無く、八幡1人だけだった。
妙なテンションから開放されて、静かな空間になったことで八幡は冷静に考えてみた。
「一色が好きなのは葉山じゃなくて、……俺？」
結論を言葉に出してみると、あまりに自意識過剰だと頭を振って再考する。
しかし、何度考えてもそう考えるのが一番辻褄が合う。
それでも普段なら何かしら理由を付けて否定するのだが、それを躊躇う自分がいることに言い知れぬ不安を感じる。
（いや、ねえよ。由比ヶ浜のこともあって冷静に考えれないだけだ）
そう考えて無理矢理アイデンティティーを維持しようとする八幡だが、脳裏に雪ノ下陽乃の薄く笑う姿が浮かぶのだった。

この素晴らしい教師に祝福を、ほんとお願い！

日曜日。
津田沼駅から少し歩いたところにある大型書店。
品揃えも千葉随一を誇る。（八幡調べ）
そこに颯爽と踏み入った八幡は、検索機に事前に調べておいたＩＳＢＮコードを打ち込み、お目当ての本を探す。
本の検索にタイトル名を使うのは素人。
ブックマスター八幡は、そんなことを考えながら検索機に表示された『在庫あり』を見つめニヤリと笑う。
そして表示されたデータを元に向かうと、流れるように手を棚に滑らせ、お目当ての本を手に取る。
１０万３０００冊を遥かに越える本の中から一冊の本を簡単に手にしたことに満足気な笑みを浮かべ、意味もなくページを捲る。
「うむ」
意味もなく捲った本をそっ閉じ、小さく頷くと謎の声を発し、くるりとターンをしてレジに向かう。
コートを払う仕草をするが、別にコートを羽織ってなどいない。
レジに到着すると、店員さんに「お願いします」と声をかけ、ブックカバーをつけてもらう。
レジで事前に用意していたお金を払うと、「ありがとうございます」と言って颯爽と去る。
礼儀も忘れないブックマスター八幡だった。
「比企谷、買い物か？」
そんな、妙な達成感に浸っている八幡は、その間近に聞こえる声の先に視線を向ける。
そこには国語を担当する教師であり、奉仕部の顧問である平塚静が、オッスと片手を挙げていた。
「先生。……奇遇ですね、買い物ですか？」
「ああ、いやな。家に電話したら比企谷がここに行ったと聞いてな」
「俺、ですか？」

「君が電話しても出ないから、どうしたものかと思ったがな」
言われてスマホを取り出すと、確かにメールと着信が表示されていた。
しかし多い、履歴が全部平塚先生で埋め尽くされている。まるで闇金の取り立てのようだった。
「すみません……。で、俺に何か用ですか？」
「いやなに、ちょと様子をうかがいにな」
なんとなく怖くなって謝罪をするが、平塚先生は終始笑顔だ。
普段なら何で出ないのかと拳の1つでも飛んできそうなのにその様子は無い。
その様子が気にかかり疑念を抱くと、表情から察したのか平塚先生は笑顔を深めた。
「いや～。比企谷の買い物をする姿が実に面白くてな。『ふっ、またつまらぬものを買ってしまった』みたいな？」
「ガハッ！」
比企谷八幡の黒歴史が、また1つ更新されたのだった。
出会いからものの数秒で精神力をすり減らされた八幡は脳内で身悶える。
「で？何を買ったんだ？」
「何でもいいでしょう」
「あ～。比企谷も男の子だもんな。皆には内緒にしてやる」
「いや、見てたんでしょ!?だったら違うことはわかってますよね!?……あ、でも内緒にはしてくださいお願いします」
「はは、冗談だ」
黒歴史を自然に口にしそうな人だから八幡の不安は拭えない。
材木座なんかの耳に入ったりすれば最悪なんてものではない、と自分の行動に後悔する。
しかし、短い付き合いだが、平塚先生は生徒の頼みを無視するような人ではないだろうとは思っている。
いや、そう思うしかないのが八幡の実情だろう。
切り替えるしかない。己の失態なのだから、運を天に任せてひたす

ら祈るしか手がないのだ、と。
「……で。本当に様子を見にきただけじゃないんでしょ？」
「ん？ああ、まあな。まあ、立ち話もなんだな。比企谷、ちょと付き合え」
「はあ」
そう言って歩き出す平塚先生にストーカーの要領で付いていく。
書店から駐車場まで歩いていくと、前に見た黒のスポーツカーが目に入る。
平塚先生は愛車のキーを手でクルクルと回しながら自分の愛車近づくと、ロックを外して乗車する。
「比企谷」
乗れと言うことだろう、と推測して八幡も乗車する。
「どこに行くんすか？」
「とりあえず、メシにしよう。まだ食ってないんだろ？」
「まあ、そうですが……。あまり金持ってきてないっすよ、俺」
「おごってやるから安心しろ。じゃ、行くぞ」
どこのラーメン屋に向かうのかわからないが、ただメシは嫌いじゃない。
そんなことを考えていると車は駐車場から出る。
街中は信号も多く、スポーツカーの本領を発揮できないせいか、平塚先生のテンションは少し下がり気味だ。
八幡は、先生と食事をするのもこれで最後なのだろう、と思いながら外の景色を眺めていた。
「そういえば比企谷は大学の進路希望は決まったのか？」
「まあ、近くの文系の大学で行けそうなところならってとこで。特に希望校はありませんね」
「そうか。まあ、それなら問題ないだろうな。推奨が決まったら教えるように頼んでおく」
「……は？推奨？なんすかそれ？」
何かの聞き間違えかと思いながら聞くと、平塚先生は「……聞いとらんのか。あいつめ……」と言って困った顔をする。

「指定校推奨だよ。比企谷は文系なら問題ないと判断された」
「いや、指定校って……。俺、学校側に評価されるようなことしてないんだけど……」
指定校推奨、大学側が高校へ推奨枠を与え、学校は推奨する生徒に与える制度。
その性質上、学校側の評価が高い生徒に優先して送られる制度といえる。
各クラブの部長などから選ばれるのが基本で、八幡が選ばれる理由が何一つ無い制度といえよう。
それどころか、八幡の普段の授業態度、文化祭の噂などで、先生達の心情は最低となってもおかしくないほどだ。
「生徒会長には、毎年必ず指定校推奨が与えられる。その枠を使ったんだよ」
「……一色、ですか……」
「ああ。一年が生徒会長を勤めた前例が無くてな。本来なら推奨を与えられる立場の一色も選別をする権利が与えられたんだよ」
来年に持ち越しできる制度でも無いし、来年も一色が生徒会長を勤めることを先生達も望んでいるようで、『だったら一色の推奨する人物に与えよう』、といった流れになったようだ。
「でも俺ですよ?それで、はいそうですか、とはいかないでしょう」
「まあな。文化祭の噂や体育祭なんかで先生側の心情は最悪だったからな」
「でしょうね」
八幡は、一色が自分の名を出した時の先生達の表情を想像して同情するような顔になる。
「だから一色は生徒会にある文化祭や体育祭の資料を調べて、貢献率からの評価を示したわけだ」
「……なるほど。……でも、それで納得されたんですか?」
作業の貢献率では他の委員を圧倒していることは間違いないだろう。
しかし、推奨するには能力面だけで選んでいいわけがない。推奨す

る生徒なのだから、学校のイメージを損なうような人物ではいけない。
社会でも同じことで、評価される基準の大半を占めるのは、やはり性格なのだ。
そんな疑問を八幡が言葉にのせているのを察したのか、平塚先生は楽しそうに話しだした。
「相模、城廻、海老名、そして雪ノ下に君の印象を聞いた結果が噂と真逆だった事を先生達に伝えて、『人に物を教える立場の教師が、生徒の噂を真に受けてどうするんですか！』と、力説したんだよ。特に被害者と噂にあった相模の君への好印象が決め手になって、無事に推奨を貰えたわけだ」
「お、おおう……」
相模の好印象とは、城廻先輩の評価を詳しくとか、材木座がまたスルーされてるとか、俺の知ってる一色と違う！など、平塚先生の語った内容が濃すぎて脳が追いつかない。
今にも『すごーい』と言いそうなほど混乱している八幡をよそに平塚先生は思い出したように笑う。
「いやはや、同じ先生である私が言うのもあれだが、スカッとしたさ！」
平塚先生は、あの教師の顔～とか一色が私に見せたどや顔～、と楽しげに話す。
何やら他の教師の愚痴も途中途中に含まれているところから、平塚先生は力説の内容が本当に気分がよかったのだろう。
その一方、八幡の表情は優れない。
「勘違いするなよ」
そんな八幡を横目で確認した平塚先生は、サイヤ人の王子のようなセリフを口にして、やれやれといった顔で話しかける。
「一色は私のためにやったんだ。私が比企谷に推奨の話しを通そうとしてたのを知ってたからな」
「……え？なんで……」
「まあ、お礼みたいなものだ」

一色に助けられたから中途半端なお礼になったがな……、と呟く平塚先生の顔は穏やかだ。
「礼って……。俺、先生に何か感謝されるようなことしてないですよ？」
「私が何故、君を奉仕部に入れたと思う？」
「それは、俺の性格の更正ですよね」
「それもあるが、雪ノ下の更正も個人的に期待したからだよ。そして君は応えてくれた」
これは、前に話した雪ノ下へ踏み込んだことに対してであるのが明白で、だからこそ八幡は納得できることではなく。
「いや、それは何も解決してませんよ。むしろこのままだと雪ノ下は……」
「それは雪ノ下が解決する問題だ。それとも君は、雪ノ下の人生にも責任を負うつもりなのか？」
八幡は、平塚先生の問いに息を飲んだ。
『雪ノ下の問題は、雪ノ下自身が解決すべきだ』と言っておきながら、雪ノ下陽乃から聞かされた話しから自分が解決しようと頭を働かせていた。
その考えがいかに身勝手で、傲慢な考え方かと、思うこともしなかった自分の愚かさに項垂れる。
そりゃこんな中途半端な人間が可愛い妹の近くをうろちょろしてたら腹の1つや2つ立てる。
小町の近くにこんな男がいたら八幡は殴り飛ばしているだろうと思い、雪ノ下陽乃がどんな気持ちでいたのか理解した。
だが、それでも雪ノ下のことを他人事と割り切って見過ごすことはできない自分もいる。
その気持ちが正しいのか間違ってるのかわからないが、本心は文化祭の時から変わらない。
「でも……俺は……。雪ノ下を助けてやりたいんです。勝手だとは思いますが、困ってる友達を助けたいって気持ちは嘘じゃないと思いますから……」

八幡の絞り出すように言った言葉を受け、平塚静は小さく頷く。
「その言葉を聞けて安心したよ。今日来た意味がなくなるからな」
茶化すような口調で言っているが、平塚先生は安堵した気持ちを表すように息を吐く。
「私に協力した見返りに、奉仕部で困ってることがあったら助けてあげてほしい、と一色に頼まれてな」
「何で一色がそんなことを……」
「陽乃の奴が色々と一色に話したんたよ。だから奉仕部の現状も大体把握しているはずだ」
「……それでも、あいつには関係ないことですよね？」
「彼女も奉仕部について何か思うことがあるのだろうな」
そう言って平塚先生は優しく微笑む。
その表情から、一色の思うことを察しているのだろうことはわかる。
「……一色にとって、奉仕部の俺達は大切な存在だからですか」
「そうだな。だから助けてあげたいと思う気持ちは、君が雪ノ下を思う気持ちと同じだろう」
自分の力で解決しようとしないで他人に頼る。
八幡が忌み嫌っていたやり方だが、誰かを大切に思うからこそ、その考えに至る。
そんな簡単な理屈を否定してきた、自身の思考に妙な違和感を覚える。
「とりあえずその話は後だ。着いたぞ」
着いた先は幕張本郷駅からすぐ近くのオシャレな中華料理店。
ジャニーズの誰かが通ってるお店で、予約必須な有名店だった。
平塚先生はそのお店の前に車を止める。
「あの。予約とかしてるんですか？」
「問題ない」
八幡は、何が問題ないのかと疑問を抱いたが、それはすぐ理解した。
店に入ると何を聞かれるまでもなく、個室に案内される平塚先生。
顔パスだ。

（何者だよ、この先生……）
その姿は実に堂々としており、八幡でさえドン引きするほどだ。
（これじゃあ、男も逃げるでしょ……。美人なのに……）
一番に性格を更正しないといけないのは先生なのではないだろうか、と思う八幡だった。

過ぎ去りし時を求めて

全体的に白を基準にした中華料理店。
テーブルは中華料理店によくある円形のよく回るアレで、その周囲に6つのイスが並べられている。
店内は人気店なだけに客も多いだけあってか、厨房から香ばしい匂いが漂っている。
「先生の知り合いのお店とかなんですか？」
「この店の従業員の息子が総武の生徒だったんだよ。その繋がりでな」
「ほーん」
そんな会話をしつつ個室に向かう。
個室も基本的な作りは同じようで、平塚先生が座ったイスの対面に八幡は座る。
すると後ろから付いてきていた女性店員（可愛い）が、オーダーを聞いてくる。
家から近いが学生には少し敷居が高いことと、予約しないと2時間待ちなど当たり前な有名中華料理店ゆえに八幡は来店したことは無い。
今回を逃すと、次に来店できるのは少なくとも大学生になった頃だろう。
これは、心理学的に『希少性の原理』が働く状態なのだ。
貴重品、数量限定、レアガチャ。希少性の原理によって高められた品々。
しかもそれを選ぶとなると、より高いものを選んでしまうのが恐ろしいところだ。
無料というところで心理的抑制が働くが、この場合はさほど影響しないだろう。
「俺はラーメンと焼餃子で」
だが、八幡が注文したのはこの二品。
彼には『希少性の原理』が働かなかったのかと思ってしまうほどシ

ンプルな二品。
しかしこれは間違いだ。
お店の品格を示すのは、やはり日本の中華料理で一番シンプルなこの二品。
有名中華料理店ののれんを掲げていようと、彼にとっては些細なことなのだ。
『見極めには味以外の要素はいらぬ』
自身の舌が見極める。
八幡は希少性の原理を、お店の品格を見極めるために使ったのだ。
味こそ全て。それ以外は無価値。
そこには、己に課した不文律を曲げぬ、ラーメンマスター八幡の姿があった……。
「私はチャーシューメンと小籠包。あ～、あと杏仁豆腐を二人前」
神妙な顔で注文したラーメンマスター八幡をよそに、平塚先生は気さくに店員に注文をする。
そして注文を受けた女性店員（可愛い）が個室から出ていく時にペコリとお辞儀すると、平塚先生は手を振って応え、八幡は静かに頷く。
それを見届けた女性店員（可愛い）が笑顔を残して部屋を出ると、八幡は込み上げてくる達成感に酔いしれる。
道行く人に名前を付けたり、他人の会話の内容を創作したり、他人の会話の語尾に『ですわ』を付けてほくそ笑んだり。
様々な1人遊びが世の中には存在するが、その極致は自身を他人に置き換えることだろう。
有名芸能人になりきって『ちょ、待てよ！』と言ってみたり、アニメキャラになりきって『撃っていいのは、撃たれる覚悟があるやつだけだと。』とシューティングゲームで言ってみたり。
そして、他人ではなく自分の作った空想のキャラクターに置き換える、1人遊びを極めた極意『空想一人芝居』。
誰かが作り上げたキャラクターではなく、自家発電キャラクターであり、妄想といった1人の世界でのみ完結している芝居。
ボッチならではの発想から生まれるがゆえに、世に出ることもなけ

れば、ボッチなので一子相伝すらしない。
　ボッチを極めた者にしか得られぬ達成感がそこにあった。
「ここの杏仁豆腐は絶品だ。比企谷のも注文しておいたから食ってみろ」
「え？ああ、はい。じゃ、遠慮なく……」
　そんな悲しい達成感に浸る八幡に平塚先生の声がかかる。
　その声で現実に引き戻された八幡は空返事で返すと、店に入るまでにふと思った疑問が脳裏に浮かぶ。
「一色から、奉仕部で困ったことがあれば～、と言われてなんで俺なんです？」
「ん？……わからんか？」
　すると平塚先生は、不思議そうな顔で八幡を見つめて首を傾げる。
　まるで当然とばかりの表情で聞かれた八幡は、ふむぅと考えて可能性が高そうな答えを導き出す。
「……俺が一番扱いやすいからですか？」
「バカを言うな！比企谷みたいなめんどくさい奴は、そういないだろうに」
　そう言って笑う平塚先生に、さすがに少しムッとした八幡は、「じゃあなんなんですか」と投げやりに問いかける。
「困ったことは困った奴に。当然の帰結だろ？」
「あ、さいですか」
　なんだこの教師、と思いつつも反論できない理由に歯噛みして、不貞腐れるようにそっぽ向く八幡。
　そんな八幡を平塚先生は、さすがに煽り過ぎたと思い「悪い悪い」と涙を手で拭きながら謝罪する。
「いや～。まあ、比企谷は昔に比べると成長してると思うぞ」
「そりゃ、成長期ですからね」
「うむ。成長を諦めた奴もいたからな、……立派なことだよ」
　八幡の軽口を軽くスルーして、平塚先生は昔を懐かしむように遠い目をする。
「成長を諦める……ですか」

成長しないではなく、諦める。
八幡も奉仕部に入る前は不必要と思って見ないようにした『本物』。
絶対に手に入らないと諦めていた、〝それ〟を求めることが平塚先生の言う八幡の成長なのだろう。
諦めた奴もきっと、めんどくさい性格で先生を悩ませてたんだろうな～、と考えてると平塚先生は苦笑いして答えた。
「ああ。察しの通り、昔の君によく似た生徒だったよ」
「それは……。大変でしたね」
「思考回路も一緒だったからな」
平塚先生は明るく話しているが、聞いた八幡はいたたまれない。
そんなめんどくさい生徒が再度登場すれば、煽りたくもなるだろう。
同じ立場なら泣きたくなるような事を楽しげに話す平塚先生を見ると、八幡はなんだか色々と申し訳ない気持ちになる。
「ん？なんだ比企谷？その同情するような顔は」
「いや、先生も大変だな～と思いまして……」
「そうでもないぞ？同じような生徒ばかりだと張り合いがないしな」
「ぼっちで協調性の欠片もない、嫌われ者の生徒とか……。俺が教師ならスルー確実ですけどね」
自分のような人間を、第三者視点で想像して苦笑いで応える八幡。
「いや？そいつは人気者でクラスの中心、他の生徒からも慕われるような生徒だったぞ？」
「別人じゃねーか……」
葉山みたいな真逆の人間と似てるなど、暴論としか思えない言葉を平然とした顔で口にする平塚先生。
（どこが似てたの？やっぱり目？この目で慕われるなんてあるの？いや、ねーな。平塚ジョークだコンチクショウ！）
からかわれていたのだと結論付けて、平塚先生に抗議の濁った目を向ける八幡。
しかし平塚先生は、からかったつもりがないのか平然とした顔のまま話を続ける。

「本質的なところが似てたんだよ。やり方が、内に向けるか外に向けるか、で、違いはあったがな」
「……最悪じゃないですか。そんなのと似てるとか勘弁してくださいよ……」
やり方の違いとは、つまり、文化際の時の八幡の立場を他人に向けるようにすることだ。
そのやり方の例を挙げると、葉山が修学旅行の時にした依頼を罪悪感も持たず平然とやってのけるような人間だ。
普通の感覚ではない。
しかし、平塚先生は真剣な表情で「いいや」と言って、
「一緒だよ。君のやってきたことも、普通の人間にはできることではない。むしろ君のやり方の方が異常だ」
善悪は別にして、問題解決のために犠牲にするやり方は一緒。その違いは犠牲になる人が自分か他人でしかない。
そしてこの場合、多くの人は自分か他人を天秤に掛けるとすれば『他人』を選ぶだろう。
ゆえに異常さ、といった面から見れば、八幡のやり方の方が異常だ。
八幡は、そんな平塚先生の言った意味を理解して「なるほど……」と小さく呟く。
「理解したならそれで良い。お節介かと思ったが、今の君は1人になると、昔の自分に戻りそうな危うさを感じたからな」
「いえ、そうですね……。確かにその可能性があったかも知れません……」
昔のやり方をしないのは、雪ノ下と由比ヶ浜の影響が強い。
自分の意志ではなく、2人を理由にして自分の行動を決めるその考え方は、逆を返せば2人がいないと行動の意味を失う。
雪ノ下にどうこう言う資格がない、これではまるで依存だ。
由比ヶ浜が他の人に好きかどうか聞けと言った意味はそういうことかと、八幡は思った。
人の心に対して異様に鈍感。いや、鈍感なんて生温い機械のような無機質な精神構造。

由比ヶ浜はそんな八幡を、おそらく感覚的に理解したからこそあんな言い方をしたのだろう。
それが依存だとしても、自分を見てくれる、独占する感覚を失うことになったとしても。
そんなことを考えて思考の渦に飲まれる八幡を、平塚先生は困った顔で眺めている。
どのくらい考えていたのだろうか、個室の入り口から人が入ってくる気配を感じて八幡はそちらに意識を向ける。
すると、入り口から男性店員（マッチョ）が注文した料理を持ってくるのが見える。
男性店員（マッチョ）は、テーブルに料理を置く時、さりげなく筋肉アピールをしているように料理を置いていく。平塚先生なチャーシューメンに釘付けだ。
男性店員（マッチョ）は、料理を置き終わるとムキムキっとしたまま笑顔で部屋から出て行く。
去り際に八幡にキラリと歯を光らせて。
その姿を呆然と見守った八幡は、そのまま視線をスライドし、チャーシューメンに釘付けな平塚先生を見る。
「……その、俺に似た生徒って、今でも諦めているんですか？」
八幡は、先程の一連の流れを一切合切無視してそう聞いた。
昼ドラの政治家や大企業の社長にありがちな〝悪〟設定を地で行くスタイル。その性格で社会に出ていけばどうなるのかが、少し気になったからだ。
そう考えると、誰かを助ける為に自分を犠牲にするような八幡の性格はヒーローだ。
つまり、『ヒーローは常に孤独』といった理論が成立する。
昔の作品に８マンといったヒーローがいた。彼も常に孤独だった。
とある有名な漫画家が、岐阜県の郡上八幡の地方キャラクターを勝手に作った。そのご当地ヒーローの名は『ＧＪ８マン』である。
孤独で、まる子の影にひっそりと存在するヒーロー。まさに八幡である。

そんな特に意味の無い、取り留めの無い会話のネタとして聞いた八幡だったが、平塚先生には珍しく「そいつなんだがな……」と言って、少し悩むように言葉をためて疲れたような表情をすると。
「陽乃だよ」
と言った。
そんな返しが来て、返す言葉が見つからない八幡。
呆然としている八幡をよそに、平塚先生は「続きは飯を食ってからにしよう」と言ってチャーシューメンを食べ始める。
雪ノ下陽乃。
八幡の行動や思考を知っているように言い当てるのは、自分の発想と本質的に似ていれば簡単に予想ができるから。
そして、その発想が本質的に似ているからこそ八幡は恐れ、警戒してしまう。
本質的に似ている人間が、自分と違う道を進む姿を陽乃はどんな目で見ていたのか。
興味か、好奇心か。
しかし、本質的に八幡と似ているとするならば、もっと別の理由なはずだ。
八幡は少し目を瞑り、考えてから目を開く。
八幡は好きなのだ。
目を背けて、その場から立ち去ればいいのに、本能がソレを求めるように受け入れてしまう。
まるで生まれた理由がそこにあるように、目を背けられない。
近付けば近付くほど、その色香にあてられるように本能に従ってしまう。
「いただきます」
そう言ってラーメンの誘惑に負け、本能に従う八幡。
この色と香りに抗う術はない。
(ほう、これはいいラーメンだ)
麺をすすり、次いでスープを口にする。
(やっぱり、こう。麺をすすっちゃ、熱い汁飲むのが楽しいんだよね)

ハフハフ、ズズゥと食べる八幡は、横目で焼餃子を確認する。
「……ん？比企谷。なんだそれ？」
「……酢と胡椒とラー油で作った、…餃子のタレですよ」
「ほう。一口貰っていいか？」
餃子のタレを自作していた八幡に、平塚先生が興味を示し聞いてきた。
先生のおごりなのだから断る理由もないのだが、聞いたと同時に餃子に箸を伸ばす平塚先生にはもの申したい気になる。
せめて確認くらいして欲しいところだ、と思いながら平塚先生が餃子をタレにつけて食べる姿を見守る。
「おお！これはいいな！やるではないか、比企谷」
どうやらお気に召されたご様子の平塚先生はもう1つ餃子を口に運ぶ。
（う～ん。何が違うんだろうか……）
八幡は一口と言いながら2つ食べる平塚先生を見て、疑問を浮かべる。
（由比ヶ浜とピザをシェアした時はドキドキしたのに、今は何も感じない。この違いはなんだ？）
聞いてしまえば八幡の物語は終了するであろう疑問を抱きつつ、八幡も餃子を口に運ぶ。無感情で。
2人とも無言で食事をする。ボッチとボッチ（独身）に団欒など存在しないように。
そうして終始無言でラーメンと餃子を食べ終わり、平塚先生が注文した杏仁豆腐の1つを貰う。
平塚先生もほぼ同時に杏仁豆腐に手をつけて、美味しそうに食べていた。
杏仁とは、漢方では『きょうにん』、菓子としては『あんにん』と言う。
杏(アンズ)の種の中の仁(さね)と言われる部分だから、杏仁。だったら読みは『あんずさね』ではなかろうか。
そんな疑問もどこ吹く風か、八幡は美味しいさね～と舌鼓を打つ。

「そろそろ話の続きをするぞ」
モノを食べる時はね、誰にも邪魔されず自由で、なんというか救われてなきゃあダメなんだ。1人で静かで豊かで……。
そんな心境の八幡だったが、これはおごりだ、自由ではない。
そして、目の前にいる人はしずかちゃんではない、静さんだ。そして、静さんは豊かだ。どことは言わないが。
八幡はしずしずと姿勢を正し、平塚先生に向き直る。
「タレは胡椒を多めに入れるのがポイントですよ。ラー油は無くても美味しいのでお好みで使い分けるのもいいかも知れません」
「比企谷……。……まあ、その話は参考にはするが」
やれやれとため息を漏らす平塚先生。
だけど八幡が話す前にワンクッションおきたかった気持ちを理解しているようで、声に怒りはない。タレの色合いを確かめるように見てるのは、きっと気のせいだ。
そして八幡は、一泊置いて平塚先生の目を見て答える。
これから話すことは今日、平塚先生が会いに来た理由である本題だ。
「……俺のことですか？」
平塚先生は八幡の言葉に、「ああ」と声のトーンを落として答える。
平塚先生は生徒の自主性を重んじる人だ。いくら一色に頼まれたとしても、きっと答えは教えてくれない。
それでもこうして何かを伝えに来たのは、八幡の問題の深さがそれだけ複雑化しているということなのだろう。
八幡は自分の変化に戸惑っている。
平塚先生曰く、雪ノ下陽乃に似ていると言われた頃は、自身の取り巻く人間関係に執着するようなことは無かった。
どんな関係もいずれ崩壊するのだから、と。
どこか他人事のように距離を置き、他人を知ることを避けていた。それが正しいと思っていたし、そう思うことが〝自分らしさ〟だと考えていた。
それなのに今は、奉仕部の終わりに動揺したり、雪ノ下雪乃を助け

たいと思い、由比ヶ浜の気持ちに真摯な態度で応えようと思ったりするようになった。
自分らしさを貫くなら、奉仕部の終わりに思うことはないし、雪ノ下雪乃に「頑張れよ」なんて適当な言葉で送り出し、由比ヶ浜の気持ちに応えて、以前から興味のあった恋愛とやらを体験してみようなどと思っていただろう。
しかしそもそも、奉仕部がギクシャクしだした段階で離れていたので、前提条件が成立していないのだが。
「比企谷は自分をどう思っている？」
「……どうなんですかね。正直、今はよくわかりませんよ」
「それがどうしてなのかは理解はしている。と、思っていいか？」
「はい、まあ……」
その八幡の答えに平塚先生は満足したように腕を組んで、「うむうむ」と言いながら頷く。
真剣な話だと思い真剣に答えた八幡は、平塚先生のそんな仕草がバカにしてるように思い、ジロリと抗議の目線を送る。
「いやいや、悪い。つい嬉しくてな！」
「なんなんですか……」
悪びれもなく嬉しそうに言う平塚先生に、ため息混じりに言い返す八幡。
そんな八幡を見て、平塚先生は話を戻すように咳払いして話を続ける。
「君は、他の者なら自然に行動することすら理由を探して意味を見出だそうとする。あらゆる行動の全てを理論武装しているから、心、といった理論で説明できないモノを、どう扱えばいいかわからない」
平塚先生は、まるで答え合わせのように八幡の悩みを言い当てる。
八幡が過去に考えた持論がある。
人はそう簡単に変わらない。何か1つのきっかけで容易く自分が変わるなら、そもそもそいつには自分なんてないのだ。
自我、そして自意識ある者はどこかで変化を拒んでいる。自己同一性を保とうとするのが本来人のあるべき姿だ。

つまりこの理屈なら、八幡は自己同一性を保とうと変化を拒んでいるのだが、その自己が揺らいでいるから整合性がとれないでいることになる。

「比企谷が一番考えなくてはならんのは、過去の自分のことだ」

自己が揺らいでいるのなら、問題は自己にある。

人は感情で動き、理論で正当化させる生物である。

八幡の自己も感情から生まれたもので、理論で自我を形成している。つまり、感情ありきの理論なはずなのに、感情を生む心を拒む八幡の自己は歪なのだ。

「俺は何をまちがっているのですかね……」

「それは君自身が考えることだ。……ただ、過去の比企谷の状態については教えてやろう」

その自己を歪にしている状態。

平塚先生は残っていた一口ぶんの杏仁豆腐を平らげて、八幡に伝えるべき言葉を述べる。

「それは、共依存と言うものだ」

そう、平塚先生は確信をもって言い切った。

共依存。

お互いに依存し合った関係。相手から依存されることで自己の存在価値を見出だし、相手をコントロールすることで自身の安定を保とうとする状態。

その共依存の関係と決別したのが、奉仕部でのあの一件なのだろう。

しかし、本質的な部分が変わってないのだから、その矛先を雪ノ下と由比ヶ浜へ向けただけで何も解決していない。

その本質的な部分が似ている、と言うことは陽乃と八幡の共依存の対象も似ていることになる。

２人のわかりやすい共通点である、両親と妹は対象外、無論平塚先生もあり得ない。だとすると他に対象になりそうな人物は……。

そう考えて、陽乃の人間関係をよく知らない八幡は思考を切る。

結局、平塚先生の言う通り、過去の自分を知ることでしか答えは見

つからないのだ。
　そうしてふと平塚先生を見ると、真面目な雰囲気は霧散しており、美しい物を見るような視線を八幡に向けていた。
「……なんすか」
「いいなぁ。青春だなぁ～。もう一度あの頃に戻りたいなぁ……。過ぎ去りし時を、求めたいなぁ……」
　八幡が怪訝な顔で問うと、某国民的ＲＰＧの副題が入った切ない返答が反ってきた。
　これは、居酒屋で上司が陥る状態、〝昔に戻りたい〟である。
　そんなこと言われてもどうしようもないことである。昔に戻れるなら誰しも戻りたいだろう。
　中には「後悔の無い人生を送っている」「俺は過去を振り返えらない」などと昔に戻りたくない理由を言う奴もいるが、それは詭弁である。そう言う奴に限って、「しまった」といった後悔の言葉をよく使うのだ。
　後悔があるならやり直したいと思うのが正常な反応だ。しかし、それを指摘すると、「それも人生」と割り切った風に嘯（うそぶ）く。
　しかし、そのくせゲームのセーブデータを二重にして保険をかけたり、ゲームオーバーになったら平然とコンテニューをする。
　ゲームオーバーはその時点でゲームが終了することを示しているのだから、そいつにとってそのゲームはそこで終了しなければならない筈である。
　まったくもってダブルスタンダード様々な卑しい性格だ。
　それはさておき、平塚先生の状態はよろしくない。何がよろしくないかというと、この状態の上司は酒の力も合わさって高確率で泣き出すのだ。
　平塚先生はお酒を飲まなくても雰囲気に酔うことのできる困った体質である。だから八幡は、事態の収拾を図る必要がある。
「過ぎ去りし時を求めたら、俺の死んだ目を復活させてください。……てか、教師ってこの時期忙しいって聞きましたけど、先生はゲームしてる暇があるんですね」

「ギクリ！」
八幡の疑問に、冷や水を浴びせられたように背筋をピンと伸ばして擬音を口にする平塚先生。
八幡にじとっとした目を向けられ、気まずさからかツツツーっと視線を反らしてぼそっと口を動かす。
「……もっとこう、な、なんだってー！みたいなリアクションを期待していたのに……」
八幡の冷静な対応に、まるで子供の様につまらなそうに口を尖らせる平塚先生。
「これ以上、情けない姿を見せたくないので」
ご機嫌な様子で八幡の悩む姿を眺め、煽るようなセリフを吐く少女を思い浮べる。
八幡は、あの生意気な後輩に見下されるのは絶対に嫌なのだ。
「と、いっても今は冷静な判断ができそうにないので、後でじっくり考えさせてもらいますよ」
「ふむ、そうか。まあ、それがいいだろう」
そう言って平塚先生は話は終わりとばかりに席を立ったので、釣られるように八幡も席を立つ。
そして、何か満足気な様子の平塚先生に、ふと気になったことを聞いてみた。
「……先生、ゲームってどこまで進んだんですか？」
「ん？ああ、試練の道って場所までだよ。ネタバレはするなよ？」
その答えに八幡は、顔をなんとか崩さずに平静を装う。
「情けない姿は見せないでくださいね……」
「な、なんだ突然。気になるではないか、……何か、あるのか？」
相当感情移入しているのか、不安になり探るように聞いてくる平塚先生。ネタバレ禁止とは一体と思いながらも、言える言葉は１つだけ。
「試練の道は険しいってことですよ……」
試練の道の先に、結婚イベントが待ち受けているなんて言えない八幡だった。

一色イロハの憂鬱

よくテレビで犯罪を犯した者が漫画やアニメを見ていた、と報道されることがある。

それはまるで漫画やアニメが影響していると思えるように。

でも実際は、その人が生きてきた全てがその人を犯罪に駆り立てただけなのは少し考えればわかることです。

では何故、そんなことすら理解できずに漫画やアニメを見ている彼らを犯罪者を見るように見下す者がいるのか。

それはとても簡単です。

答えは、考えないからです。

では何故、そんな簡単なことをしないのか。

それも簡単です。

答えは、見下したいからです。

では、そんな人達が集まるとどうなるのかと言うと、当然のことながらランク付けをします。

理想の人、同レベルの人、それ以下、と。

そして自分のランクと合った者同士でコミュニティを形成して、下のランクを見下します。

自分が無いから、他者と比較することで自我を保とうとしてるのです。

そんな人達が高校生になると、病気にかかったかのように恋愛を意識しだします。

では何故、恋愛を意識しだすのか。

簡単です。

答えは、漫画やアニメに影響されるからです。

見下したいから考えない。考えないから影響される。

彼らを犯罪者を見るように見下している自分が、造り上げられた犯罪者像そのものとは笑えない話です。

見下したい、と思う心は心理学的に『嫉妬』から生まれるものです。

優越感を満たすため、他者を見下し悦を得る。そんな人です。

かくいうわたし、一色いろはもそんな人でした。
「いろははいいよねー。葉山先輩とお話できて」
「てゆうかー。こないだのランキングで葉山先輩と付き合うならってやつ、いろは、雪ノ下先輩と接戦だったじゃん。彼女になるチャンスあるよねー」
「いいなー」
そんな人達、もとい学友と、教室後方窓側で昼休憩の一時を過ごしている。彼女達は、少女漫画片手に葉山先輩談義に盛り上がっているご様子。
わたしが葉山先輩に告白したことは知られていない。それ相応の覚悟はしていたつもりだったけど、多分、葉山先輩が口止めしてくれてたのだろう。それでも、三浦先輩や戸部が言うかと思ったんだけどそんなことはなかった。告白について何かと思うことがあるのか、驚くほど何もなかった。
だから未だに葉山先輩ＬＯＶＥな一色いろはのイメージが消えることはなく、こうして彼女達は、わたし１人を置き去りにして恋愛談義に花を咲かせる。
まあ、花を咲かせて幸せになれるのなら好きなだけ咲かせてあげましょう。花咲か爺さんも余すところなく犬を使いきり、灰すら使いきって物品を得たのだから。
あのがめつさ、嫌いではありません。
ただ会話の内容が意味不明過ぎませんか？葉山先輩の彼女は投票式なの？なら当選した雪乃先輩は彼女になる権利を得たの？
そんなことを思いながら、ゲンナリする気持ちを抑えて、雪乃先輩が聞いたら目で殺しそうな会話をする彼女達に返事を返す。
「そおかなー。でも～。葉山先輩はー、みんなの気持ちを無視するようなことしないー、って思うしー」
「それある！」
折本先輩かよ。
「でも実際、葉山先輩って彼女つくらないのが謎だよねー」
「だよねー」

とか言いながら彼女ができたら批判するくせに。
雪乃先輩は葉山先輩と幼馴染みだから、昔はとても苦労したのだろう。
でもまあそう思うのは、わたしが常に一番で、劣等感を感じることが無かったからなんでしょうかね……。
「にしても、いろはの自称彼氏ウケるよねー」
「そうそう、凄いキョドってたしー」
「勘違いしてストーカーになったりして」
そんなことを考えて彼女達の話を聞き流してると、どうやら話題は先輩のことになっていた。
目が怖いだの、性格陰湿そうだの、猫背だの、友達いなさそうなど、面白可笑しく先輩のイメージをネタに盛り上がっている。そして、その語るイメージが全部正解だから反応に困るところだ。
わたしがいる限り、彼女達は一番になれない。だから劣等感を感じてしまうのだろう。
葉山先輩の話で溜まった劣等感を、こうやって他者を見下す優越感で補う。今日は先輩を使って優越感に浸ることにしたらしい。
そんな彼女達に、わたしは頬をぷくっと膨らませて抗議の視線を向ける。
「一応、わたしの彼氏なんだよ。その言い方はヒドいよー」
「あー、ゴメンゴメン」
わたしの軽い口調の抗議に、軽い謝罪の言葉が反ってくる。
もちろん誰も信じていない。だが、言外に『わたしは誰とも付き合うつもりがない』という意味が含まれているのが明白。
そして、彼女達が先輩の話題を出したのは、その『確認』をしたかったのかも知れない。
と、まあそのおかげで、男子からのお誘いも随分減ったし、誰々が付き合い始めたなんてことを聞くようになった。わたしマジキューピッド。
わたしは先輩や雪乃先輩みたいに、直接的な否定はできない。結衣先輩もそうでしょう。

この社会は数の力こそ正義であり、正しい。どんなに論理的で合理的であろうと、それが少数意見なら淘汰されるだけ。
彼女達のような価値観が、間違いなく多数意見だ。ソースはわたし。
つまり、彼女達のように上辺だけ取り繕って、馴れ合いの人間関係を築くことが大人になるために必要なのです。
……誰も本物など求めたくないのでしょう。
だったらその価値観を利用してやればいい。……そう思ったんだけど、そう上手くいかないものです。
結衣先輩の言った意味がよくわかります。クラスが一緒だから、度々経験してたのでしょうね。
好きな人をバカにされるのはかなりキツい……。
「いろは」
そんなことを考えてると、彼女達が心配そうに顔をして声をかけてきた。
どうやら表情に出ていたらしい。ダメですね、ダメダメです。
彼女達は、そんなわたしを気遣うように、優しい口調で話しかけてくる。
「ホントに何もされてないの？」
「悩み事があるなら言ってよ。協力出来ることならしたいし」
「本当にストーカーになってないよね？」
そんな声に、わたしは苦笑いしそうになる感情を堪える。
彼女達の第一印象は相当悪かったようだ。
全体的にそれほど見た目悪くないんだけどなー。……やっぱ目だよね、目になんか不穏な感じがするんだろうね。慣れてくると、味わい深い目なんだけどね。てか、ストーカー心配し過ぎでしょ。
まあでも、彼女達に不必要な心配をさせたのは、わたしの落ち度だ。だから真摯な態度で応える必要があるでしょう。
わたしは拝むように手を合わせて謝罪をする。
「ごめんー・生徒会の仕事のこと考えてた。副会長に頼りっきりで、それで申し訳ないなー、と思ってたから」

申し訳ないとは思ってないけどねー。
何かと理由をつけて、書記ちゃんとお喋りしようとしてるし。だから仕事という理由を与えているのです。逆に感謝して、わたしのことを、いろは様と呼ぶようにしてもらいたいですね。
てゆうか書記ちゃんも満更でもないみたいだし。
こないだなんて副会長が書記ちゃんにプリントを渡す時、2人の指が触れて、お互い頬を染めてモジモジしてるのを目の当たりにした。
なんですかね、あの2人……。ちゃおとりぼんかっつーの！間近でピュアピュアなラブコメ見せられた、わたしの心はキュアハッピー！ですかね！
「あー、あの、いかにも仕事出来そうな見た目の副会長かー」
「本牧先輩だよね。密かに人気あるんだよあの人。誠実そうだから」
「そうそう。なんかいいよねー」
副会長は彼女達も知るところの存在感はあるようだ。カテゴリーとしては対等なのか、話す内容も当たり障りのないものになっている。
わたしはそんな彼女達に、目一杯にスマイルチャージをして会話に混ざる。
「副会長は、過労死すればいいんです」
「なんで！」
こうして、和やかなお昼休みは過ぎてゆくのでした。

× × ×

午後の授業も終わり、教室内の動きも活発化する。
この時期になると、クラブ活動をしている生徒もほとんどいなくなり、この1年で築き上げた交遊関係を確かめるかのように集まってお喋りをする。どこに遊びに行こうとか、春休みの予定を確かめ合ったり、先輩みたいに1人で帰宅する者など、様々だ。
わたしはそんな人々と違い、いそいそと教室を出ると生徒会室に向かう。仕事だからね！しょうがないね！
生徒会長になる前は、それなりに気にしていた人間関係だけど、今となっては些細なこと。

１年生の中で最強の存在となってしまった、わたし。
わたしの周囲が人間関係の頂点なのです。フフッ……、わたし…おそろしい子！
そんなことを思いながら特別棟に向かう。教室と違い、誰の気配も無い。だから自然といやらしい笑みがこぼれる。
「あ……」
「お、おう」
２階の渡り廊下への階段を上がっていると、１人で渡り廊下に歩を進めていたであろう男子生徒と目が合った。
人の気配は全く感じなかった。だが、その生徒は確かにそこにいた。
わたしの顔がよほど不気味だったのだろう。やや細身の体を猫のように丸めて、手をポケットに突っ込んだまま、わたしに引きつった笑みを向けている。寝癖だろうか、髪の毛には小さいカールを作っており、目も寝起きだと言わんばかりに据わっている。
……や、わかっています、少し現実逃避したかっただけです。そうですね、どう見ても先輩です。
「お前も色々あるもんな、……なんかゴメンね」
ものすごい優しい声でそう言って、スタスタと早歩きで立ち去ろうとする先輩。
「ちょ、ちょっと待ってくださーい！せんぱーい！違うんですー！」
わたしは渡り廊下を歩く先輩に素早く追い付き、ブレザーの袖を掴んで引っ張る。まるで、マグロと格闘中の松方〇樹のように力強く。
「わ、わかったから引っ張るな！服が、服が破けちゃうから！」
「ほ、ほんとですか？逃げたら、イソップ先輩の星に送り届けますよ」
「殺す気かよ……。てか、チョイス古すぎだろ……」
名作は語り継がれるもの、ＯＰのヒーローも有名ですし。
そんな知ってて当たり前なことを言いながら、袖が破れてないか確認している先輩を眺めてふと考える。
どうしよう……、よく考えたら何も違わない。だけどこのままリリースするのは愚行。先輩のことだからネタにするのは間違いない。

まず先輩は、奉仕部の雪乃先輩と結衣先輩に話す。それで雪乃先輩が「どんな顔だったの？」と聞いてくるでしょう。そうすると先輩は、あの顔でわたしの顔真似をする。そんな面白い顔を結衣先輩がネタにするはずもなく、次の日の教室で先輩の顔芸が面白いと話す。すると戸部が先輩に顔芸してくれ、と頼みに行くでしょう。だけど先輩のことだから、戸部の頼みなんて受けるはずがないので、代わりに「一色の顔真似だから、本人に頼め」とか言うに決まっています。すると戸部は、わたしの顔芸が面白いと、無駄に大きい声で言うでしょう。

最悪です。屈辱だけど、先輩に頼むしかありませんね……。

「先輩……。さっきのこと、秘密にしてもらえませんか……。でないと、戸部先輩を亡き者にするしか……」

これ以上、先輩に借りを作りたくないんですけど、背に腹はかえられません。

「なぜ戸部……」

「それは、戸部先輩だからです」

少し考えれば、先輩なら理解できると思いますよ？

先輩は、頭の上に〝？〟が付いていそうな表情で少し間を置いて、わたしの願いに答える。

「ま、いいけどよ。……一色、ちょっと時間あるか？」

どうやら秘密にしてくれるようだ。まあ、先輩からすればイメージなんて価値ありませんからね。交換価値でしたか、大航海時代に胡椒がスペインなどでは貴重品だったけど、インドではただの香辛料みたいな。

しかし、時間ですか。時間ほど高価な物は、この世に無いことは先輩もご存知のはず。

つまり、黙って欲しくば言うことを聞け！と言うことでしょうか……。

……はっ！

わたしは自分の体を抱き締めて警戒しながら答えた。

「もしや、わたしの体を……」

「いらんわ、んなもん」

「そんなこと言いながら……」
あやしい……。
警戒する仕草をするわたしに、先輩は深いため息を吐き、頭をガシガシとかいて答える。
「……少し話したいだけだ。なんか飲みもんおごってやるから、行くぞ」
「初めからそう言ってくれればいいんですよ。あ、わたし、ミルクティーで」
「お前ほんと、がめついのな」
危機的状況こそ、利益を生むチャンスである。ｂｙいろは
しかし、わたしの体をノータイムで拒否とは。冗談とわかっていても普通は動揺するものですが、流石先輩ですね。
まあ、雪乃先輩の体とか、結衣先輩の胸とか、わたしの仕草を気にしてることは知ってますけど。
あ、まさか！
こうなることすら想定内で、わたしを油断させておいて、体育倉庫に呼び込んで……。あやしい……。
なんて、先輩がそんなことするとは思ってないですけどねー。
煩悩を完全に理性で抑えているから動揺しないんでしょう。だからわたしも、あんな冗談を言えるんですよねー。
でもまあ……、先輩に本気で求められたら、考えてあげなくもないですけどね。

一色イロハの動揺

先輩に連れ立って、特別棟の一階にある自動販売機に向かった。
一階も人通りは無く、閑散としている。
先輩はわたしの頼んだミルクティーとＭＡＸコーヒーを買う。あのコーヒー、他の地域では事実上の継続商品として、まろやかミルクのカフェラッテと名を変えて販売されています。ソースはお父さん。
「ありがとうございます～」
わたしはミルクティーをひょいっと受け取ると、先輩は「じゃ、行くか」と言って歩き出す。すると入れ違いに２人の男子生徒がわたし達の方に歩いてきた。
１人は見覚えがある、同じクラスの男子だ。女子からはガリメガネと呼ばれている。
「秦野君、こんばんはー。お友達も、こんばんはー」
「あ、ど、ども……」
「ども……。さ、相模って言います……」
２人に笑顔で挨拶すると、秦野君は名前を覚えてもらえてたのが嬉しかったのか、顔を赤くして緊張したように答える。
お友達の相模君は、若干上擦った声で答えた。こちらは、さしずめ美白メガネといった感じかな？
「……知り合い？」
友達と聞かないあたりが先輩らしいです。
「秦野君は、同じクラスの子ですよ。ね、秦野君」
「は、はひ」
わたしが声をかけると、秦野君は過呼吸になるんじゃないかと思えるほど狼狽した。
うーん。前からこのタイプの人と会話する時はあったけど、ここまで動揺しなかったんだけどなぁ。
お友達の相模君も、わたしと視線合わせようとしないし……。
「大体の関係性はわかった……。悪いなお前ら、だけど勘違いはするんじゃないぞ？これで教室で挨拶でもしようものなら大変なことに

なるからな……」
　わたしが2人の態度に首をかしげていると、先輩が遠い目をしてそんなことを言った。
「わかってますよ……」
「心得てますから……」
「そうか……」
　何だろう、この一体感……。
「てか、比企谷先輩はどんな関係なんですか？雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩と同じ部活ってだけでも軽く殺意が湧きますが」
「先日のあの噂……。本当だとしたら、リア充の烙印を押しますよ」
　2人はメガネを光らせて先輩に、わたしとの関係を聞いている。
　先輩の知り合いだったのだろうか？と、そんな疑問を乗せた視線で先輩を見ると、先輩は驚いた顔をして、「え……。なんで俺のこと知ってんの？」と言って困惑した。
　そんな先輩に2人は愕然とした顔をした後、深く息を吐いて答える。
「……遊戯部に来たじゃないですか」
「忘れたんですか……」
　すると先輩は空を見上げて「遊戯部……遊戯王……カード……インセクター……メガネ……」と呟いた後に、2人に視線を戻す。
「ああ、台形メガネと丸メガネか。忘れたとかじゃ、まあ、……色々とアレがソレでな」
「思い出し方に不快感しかないですが、……まあいいです」
「その呼び方に悪意しか感じませんが、……まあいいです」
　一応敬語だけど、声に先程までの緊張は見られない。
「先輩……。会話したことがないわたしですら覚えてましたよ……」
「会話したこと、あるんですけどね……」
　そう言って、先輩を呆れたように見つめていると、秦野君が消え入りそうな声が聞こえた。ご、こめん……。
　微妙な空気が流れ、静まりかえる。
　どうしようかと悩んでいると、先輩はけぷこむけぷこむ、と謎の咳

払いをして口を開く。
「こいつは俺を先輩としか呼ばん、名前を覚えているかも不明だ。まあなに？つまり、そんな関係だ」
なんて言い草でしょう！まるで赤の他人のような言い方じゃないですか！仮にもデートしたし、クリスマスは一緒に過ごしたじゃないですか！（暴論）
まあ、それは冗談として理由は分かります。自分と一緒にいるところを見られると、わたしが困るからとか考えているんでしょう。
先輩は他人にどう思われてもいいと思っているのに、他人がどう思われるのかを気にするところがありますからね。
……でも、名前を覚えてるか不明ってところは本当に思ってそうですが……。
「……なるほど」
秦野君は自分は名前覚えてくれてたからか少し嬉しそうに頷いている。先輩はそれで良いのかも知れませんが、わたしは納得しませんよ。
だからわたしは、先輩に笑顔を向けて言葉を付け足すことにした。
「そうですねー。あなた、おまえ、みたいな関係ですよね～、せーんぱい」
「何言ってんのおまえ！…あ」
なんですか～、あ・な・た。
先輩が盛大に自爆したのを確認したわたしは、先輩の服の袖口をクイクイ引っ張る。
「わたし生徒会に顔出さないといけないから、お話する時間あまり無いんですよ～。ささ、早く早く！」
「いや、ちょ、おま」
「秦野君と相模君、でわ～」
わたしはそのまま、先輩を引きずる様にこの場を去る。そんなわたし達のやり取りを、２人は唖然とした顔で見送っていた。
×　×　×
それから先輩は困惑した表情でわたしを見た後、案内でもするよう

に少し前に進んでこの場所に座った。
購買の斜め後ろ、テニスコートが眺める場所だ。
……まさか先輩は、テニスをしてる戸塚先輩をここで眺めているのではないかとの疑惑を感じます。
「お前、あんなことしていいのかよ……」
「何がですか？」
先輩は手に持っていたミルクティーを横に置いて、そんなことを聞いてきた。
その質問にわたしはミルクティーを受け取ると先輩の横に座り、とぼけるように答える。
「俺と関わりがあると思われると、お前のイメージ悪くなるだろ」
思った通りの答えにため息が漏れる。
「気にしてもらったことは感謝しますけど、それを判断するのはわたしじゃないですか。先輩と関わりがある程度で悪くなるイメージなら必要ありませんよ、そんなの」
「自慢じゃないが、俺のイメージはその程度ではないぞ？」
「本当に自慢じゃないですね……」
何故誇らしげに言うんでしょうか、この人は……。
「とにかく！前に先輩に何かしてもらおうと思わない、と言ったんですから何もしなくていいですよ」
「いや、だけどな……」
先輩はそれでも食い下がるように言ってくる。
過保護ですね～。心配してくれることには嫌な気はしませんが、これは言っといた方がいいですね。
「わたし、先輩達との関わりを否定するなら、そんなものいりません。そりゃ怖いですけど、わたしの本物はそこにありませんからね」
わたしが力強くそう言うと、先輩はポカーンとした顔になる。
い、いや、わたしも言ってから少し恥ずかしいと思いましたけど、そんな顔されるともっと恥ずかしくなるじゃないですか。何か言ってくださいよー！
「な、なんですか……」

沈黙に耐えかねて目を逸らしてしまう。
先輩の沈黙。助けてセガール！
「……いや、サンキューな」
お礼を言われた。
「なぜお礼を言われたのかよくわかりませんが、分かってくれたらそれでいいです……」
先日、結衣先輩と雪乃先輩と3人で話した時に言われたことがある。
『過ごした時間はあたし達のが長いけど、ヒッキーの考えてること知ったのはあの時が初めて。だから、あたし達もヒッキーが考えてることまだよくわかってないよ』
『そうね。でも、私なんて自分の気持ちすらよくわからないから、似たようなものだけれど』
でも2人には、このお礼の意味はわかるのでしょうね……。
会話が途切れてしまって、手持ちぶさたになったのでミルクティーを飲むことにした。
先輩を横目で見ると、同じくあの甘ったるいコーヒーを飲んでいた。
「それで、先輩が話したいことってなんなんですかー？」
お互い少ししんみりした雰囲気になってしまったので、話題を逸らす。
わたしと先輩の間に、こんな空気は似合わないと思う。
先輩も同じなのか「ああ」と普段の声に戻して答える。
「先ずは推奨の件、ありがとな」
「あー……、あれですか。気にしないでいいですよほんと、消去法で最後に残っただけですから」
「意外だな。お前のことだから、恩着せがましく何かを請求してくるもんだと思ってたが」
「先輩、ガチでわたしのことなんだと思ってるんですかね……」
こんな可愛い後輩に対して酷くないですかね……。
わたしが盛大にため息を吐いて応じていても、先輩は気にもせず続

ける。
「サッカー部の先輩とか色々いただろう？……葉山とか」
「葉山先輩の成績だと推奨貰えるから必要ないですし、他の人は成績が微妙過ぎてアレです。戸部先輩とかがいい例」
「なるほど……。するってーと、由比ヶ浜もダメだな」
「ええ、無理でした。だからー、嫌々ながら先輩にしたんです」
「なんで嫌々なの？一色、マジで俺のことなんだと思ってるんですかね……」
　今度は先輩が盛大なため息を吐くが、わたしは気にもせず続ける。
　それにはちゃんとした理由があるんですよ？
「だって先輩、余裕ができたら学校休んで家でゴロゴロするだけじゃないですかー」
　そしたら会える日が少なくなるじゃないですかー。
　わたしの指摘は当たりだったらしく、先輩は言葉に詰まり顔をしかめる。
「ほらやっぱり」
「い、いや、ゴロゴロはしないぞ？先見の明を広げるために知識を蓄えたり、だな……」
「マンガ読んだり、アニメ見たりしながら自堕落な生活をする、と」
「くっ、由比ヶ浜なら誤魔化せたが……。……一色やるな」
「結衣先輩……」
　きっと、「せん、けんのめい？よくわかんないけど、ヒッキーなんかすごい……」なんて目をキラキラしながら言ってる姿が容易に想像できてしまう……。
「で、聞きたいんだか、文化祭の俺の仕事とか調べたりしたんだよな。それってどの程度記録されてたりするんだ？」
　わたしが結衣先輩の生き方に思いをはせていると、先輩が探るような視線で聞いてきた。
　その妙な質問に、わたしは顎に指を立てて答える。
「結構明細に記録されてるものですよ？数値の変動でどのような変化があったりとか、そういった想像しやすいくらいには記録されてま

す。意外と見てて楽しいですよ」
「なるほどな。お前、数学得意そうだもんな」
「なんか悪意を感じるんですけど……」
わたしが疑いの目を向けると先輩は鼻で笑った。
コイツ……。うまいこと言った、みたいな顔が腹立ちますね。
「でだ。それって、俺も見ることが可能なものなのか知りたい」
「……次回の文化祭運営で参考にするための記録なので、特に規制はありませんけど」
「持ち出しも可能か？」
「パソコンに保存してあるんで、プリントアウトすれば問題ないと思いますが……。何でですか？」
わたしの返答に安堵したように息を吐く先輩が気になって聞いてみると、先輩は少し考えてから口を開いた。
「2年前の文化祭がどうだったかの確認。過去の記録もあるんだろ？」
「ええ。よくご存知で」
「こないだ手伝ったからな」
ああ、副会長の手伝いしてくれた時かー。確か入学式の資料もありましたね。
しかし、2年前の文化祭の記録ですか……。
「はるさん先輩が委員長した時ですよね。わたしも見ました」
「ほう……、またどうゆう風の吹き回しだ？」
「失礼な！……今年の文化祭はわたしが委員長になるじゃないですかー。だからどうせなら一番盛り上がる文化祭にしようと思いまして」
わたしの理由に先輩は「なるほど」と納得して小さく頷く。
前回の文化祭は色々問題があったせいで、わたしなら勝てる、と確信した。
その勢いではるさん先輩も越えちゃう？と思ったのですが……です、が…。
そんなことを思い出しながらチラッと先輩を見ると、目で見た感想

を聞いてくるのでわたしは肩を落として答える。
「……あんなの無理です。だって生徒が、プロの写真家とか販売士の資格持った人とかのレクチャー受けてたりしてるんですよ？チートですよチート」
しかも明細な時間管理もされて、起こり得る事態の対処マニュアルなんかも用意されている。
そんなプロ仕様の文化祭相手に、しがない喫茶店の娘の知識じゃ太刀打ちできない。
「だろうな。大方、俺の予想通りだ」
先輩はコーヒーを飲み、ふーっと一息ついてそう答える。
そもそもなんで文化祭の委員長なんかしたんでしょうかね？
それに全力ですし。
わたしみたいにどうせなら精神でしょうか、いい迷惑ですよ。
「お話はそのことだったんですか。なら、副会長に用意させときますよ？」
「お前……。本牧が可哀想だから今から行く」
先輩は副会長の境遇を思い、哀愁のこもった表情で答える。
誤解ですよ！あの人は書記ちゃんと仲良くしたいがために、管理を率先して請け負ってるんです！
そう説明しても先輩は「……ああ、ああ」と言ってわたしの意見を聞き流す。
理不尽です！副会長が書記ちゃんから資料を受け取る時に、指先が触れた時のあの表情……。
しかし、わたしと副会長では人徳の差が歴然としてるので、何を言っても先輩の評価は変わらないでしょう。
悔しいです。
「まあいいです……。でも、奉仕部に行かなくていいんですか？」
「由比ヶ浜に伝えとく」
そう言うと先輩はスマホをポチポチといじり、結衣先輩へのメールを作っている。
わたしはその姿をツマミにミルクティーを飲む。

死んだ目で淡々と打つ先輩の姿が少し面白いです。
「ふふっ。なんか、公園のベンチにいるサラリーマンみたいですねー」
先輩はそのわたしの言葉にピクッと反応して、真剣な顔で見つめてきた。
「おいおい、そりゃ失礼ってもんだろ。あの人達は社会の歯車として日々社畜として働いているんだ。子供の頃に、ああはなりたくないと思っていた姿になってしまった自分と、家庭のために歯車から抜け出せない今の自分に向き合いながら暮らす日々なんだぞ。テレビをつければ、同年代の芸能人が華やかな舞台でアイドルとお喋りしている。それを眺めながら『ああなりたかっな……』なんて、生意気な自分のガキを横目にビールを飲んで呟いているんだよ。そんな辛い人生を歩んでいる人と、俺を一緒にするのは失礼だ。ああ、働きたくない」
……。
「まるで見てきたように話しますね……」
「俺の親父を見てきたかからな」
たまに先輩は反応に困ることを言います……。
「そ、それじゃ、行くか」
わたしの微妙な反応に先輩は焦ったように立ち上がりながら言ってくる。
結衣先輩ならなんとかしそうですもんね。ごめんね、わたしで……。
「そうですね……」
その声にわたしも立ち上がり、残ったミルクティーを飲み干した。
「ん」
すると先輩は、わたしの飲み干したミルクティーの缶を見ながら手を伸ばしてくる。
「あ、ありがとうございますー」
お互いどこかぎこちない所作は集中力を欠いていて、缶を先輩に渡そうとした際にお互いの指先が触れる。
「……あ」

「す、すまん……」
わたしは動揺して缶を手放し、視線をさ迷わせる。
先輩も動揺してか、焦ったようにカランカランと音を立て転がる缶を追いかけた。
副会長、なんかごめんなさい……。